事、さらばお肴仕らうと藁苞解いて黄金作、長藏「太刀魚のつくり物、粗末ながら」と指出せば、四斗兵衛「ムヽこりやお肴がにくすぎて、我等ちつと食べにくい、この肴はマアお預け申さうかい」長藏「イヤ御辭儀には及ばぬ、太刀魚よりはコレ此鑓の鉦、嚙みこなした齒節の丈夫、適れ四海の軍帥、サ醉狂人と見極めてのお肴、受けてすつぱり切つてもらひたい」四斗兵衛「ムヽ、切れとは何を」長藏「時姫の首」四斗兵衛「ヤ」長藏「たつた今匿はれた時姫の、その首が貰ひたい。ガよもや貴樣得切るまいの」四斗兵衛「ソリヤモ、何より心易い事、切つてやろ〳〵。何の己が首ぢやなし、人の首の一つや二つ、望なら目の前で」と、又引受けてどぶ〳〵〳〵。長藏「然らば肴も」四斗兵衛「ハテ志ぢや戴こかい。時姫の首、夫も合點切つてやろ」と、初の心酒故に、打つてかはつた詞づめ、ひと癖者と知られたり。始終一間に聞居る女房走り出で、女房「コレ四斗兵衛殿、兄樣に詞番うたこなたの出世、知行取になる事も、酒で忘るゝたわいなし、如何に酒に醉うたとて、お姫樣の首切ろとは、あんまりな人非人。コレそこな人、酒の醉を合手にせずと、とつとと去んでもらひましよ」と、聲震はして腹立つ女房。夫は酒に廻らぬ舌つき、四斗兵衛「ヤイソヽヽそげめ、知行々々とぬかすが、何の五萬石や十萬石、此酒にかへらるゝものかい。それで姫の首討つてやるが、ナヽナ何とした」女房「ムヽすりやどう有つてもお姫樣を切る氣ぢやの」四斗兵衛「ヲヽ切る」女房「それ聞いたらもう爰には置きまされぬ、わしが供して兄樣へ手渡しする」と、一間へ駈入りかひぐ〳〵しく、姫の手を取り立出づる。盡きせぬ緣か見合す顏、「ナウ懷しや戀しや」と、立寄る姫を拔打に首は前にぞ落ちにけり。ハァヽはつとおまきが氣も半亂。鹽賣突立ち長藏「ヲヽ適れ四斗兵衛、出かされたり」と、云捨ててこそ驅りゆく。あとに女房が聲をあげ、女房「扨も〳〵痛はしや、お命を助けう爲、心を碎いて兄樣が、爰迄預けに見えたもの、其の時つれなう預らずば、かう云ふ事は出來まいもの、佛賴んで地獄の牛頭馬頭。若し今にても兄樣がお迎に見えたらば、わしや言分がないわいの。一層殺して〳〵」と夫に取付きしがみ付き、恨み歎けばころりとこけ、前後も知らぬ高鼾。かくとも知らず片岡が、禮儀の上下折目を正し、御迎の乘物つらせ悠々と戸口に佇み、逢酒正「ヤア家來共、云付置きし物この家へ持參し、案内せよ」と詞につれ、衣服大小しら臺に、輝く兜は龍頭、あたり狹しと並べ置き、片岡しづ〳〵内に入り、」逢酒正「誠に雷の落くる空難、事故なく相すみし故、早速姫の御迎ひに參上せり。是と申すも四斗兵衛殿、御匿ひ下されし故、助かるまじき姫の命、助かりし命の親、直に鎌倉へ同道致し、時政公へ御目見え、契約の通り只今より武士に取持つ印の音物、御受納あつて姫諸共、御出立下さらば、此の上悅なし」と、慇懃に述べければ、女房あるにもあられぬ思ひ、兄の脇差拔き取つて、自害と見ゆるを片岡押へ

て、春久「ハテ心得ぬ此の有樣」と、刀物拐取り眼を配り、春久「ヤこりや是、時姫君の御死骸、何者が手に掛けし。ア、しなしたり〳〵」と齒を喰ひしばる怒の面色。造酒正「妹が振舞といひ、扨は四斗兵衞めが仕業よな。儕下郎め主君の敵、一分試」と切付くる。心得むつくと起上れば、いらつて切込む刀は電、こなたのささくは飛鳥の翔、勢雲に龍頭、の兜を片手に引摑み、一間を指して驅込んだり。造酒正春久「ヤア卑怯者逃ぐるとて逃がさうか」と續いて驅行く向ふに妹女房「ヲヲお腹立は道理至極、酒故亂るゝ心を知り、匿うたは私が科、それよりマア先へ私を殺して下さんせ、さうない中は奥へはやらぬ」造酒正「ヤア邪魔ひろぐな」と引摺りのけ、驅けゆく鐺に又取付き、やらじ放せと爭ふ最中、表の方に大音聲、三浦之助「江州醒が井の住人和田兵衞秀盛殿、御用意よくば坂本の城へ御入城、三浦之助義村御迎に伺候せり」と、呼はる聲は以前の鹽賣。初には似ぬ勇士の扮裝、せきにせいたる片岡も、樣子如何と躊躇ひ居る。女房不思議立向ひ、女房「坂本の城へ誘はんとは、何時味方させ、何時の契約。殊には隱す夫の本名、和田兵衞秀盛とは」三浦之助「ホ、陳平韓信が腸を探り、市人に姿をやつし隱されても、美名は四海に芳ばしく、宇治の方の仰を受け、何卒して味方に招き、雌の劍を授けんと、姿をやつし徘徊すれども、素より面體見知らぬ某、如何と心を碎く中、中山道にて不思議に出合ひ、我が姓名をしるしたる、手鑓を以て試せし手練、和田兵衞ならで外に及ばぬ稀代の手の内、何卒味方に賴まんと、思へどたよる手段なく、如何と案じる時も時、時姫君を匿まはれし、これ幸と此の家に來り、首討つて渡されよと、渡せし劍が卽ち雌の劍、我が心を推量ありしか、事故なく受けられしは、味方に加はる印の割印、此上は片時も早く打立ち給へ、御供せん」と、高らかに呼はつたり。片岡聞くより猶もせき立ち、造酒正「ヤア京鎌倉と引別るれば、我は鎌倉時政方、京方の奴原一人も生け置かれず。其上眼前姫の仇、何所までも」と驅けゆく一間、隔の戸障子踏み開けば、内に四斗兵衞悠々と、溫袍にかはる肌著の小具足、唐縫したる陣羽織に、十王頭の小手脛當、太刀と兜を兩の手に、牀机にかゝる有樣は、實に百萬騎の軍帥と、骨柄ゆゝしく見えにけり。和田兵衞兜を座前に直し、盛「如何に片岡、時姫の身に代り殺されし其娘は、定めて貴殿の息女ならん、痛はしさよ」と悔みの詞。造酒正「ム、すりや某が娘と知つて」秀盛「ホ、、、、敵の氣を見て士卒を使ふこの和田兵衞、況んや一人の女童、如何程に佯ればとて、親子の親しみ上下の人相、一目にも見違ゆべきか。顏家公に緣邊は切れたれども、不義の科ある時姫君、夫故娘を身代とし、時姫の心の儘、三浦之助に添はせんと、心を碎く片岡殿。其忠義を感じ入り、不愍ながら殺害致せば、時姫といふ名は消えて、今は憚る所なし、御迎の乘物に、忍びまします時姫君、早々是へ」と和田兵衞が、詞に片

岡陳じもならず、表の方、乗物あくれば時姫君、こけつ轉びつ住の江が、死骸に取付き縋付き、時姫「親の許さぬ戀路故、かねて亡き身と思ひしに、自らが命に代つて、死んでたもつた住の江、嬉しいとも忝ないとも、いかで詞の有るべきぞ。只恨しいは造酒正、かくなる事を露はども、など知らしてはくれざりし、知らばやみ〳〵此人を、殺すまいもの味氣なや」と、恨み嘆ちの涙川、袖に淵なす計なり。造酒正「ヤア住の江とは紛らはし、其の死骸は時姫君、さいふ汝が我が娘、ナ御合點が參つたか、親に優つた娘が忠義、大死さして下さるな」と、目をしばたゝく片岡が、心を察して妹は、三浦之助に打向ひ、女房「時政公の御息女といへば、添はれぬ敵味方、兄樣の娘御に何の障も味方同士、申し御了簡は」といふを打消し、三浦之助「ヤア味方とは汚らはし、鎌倉方へ裏返つたる不忠侍、その娘に何の緣組、某に心を寄せし時姫君、首討たれよと望みしも　敵の緣に引かれぬ潔白。是非時姫を娘とし、此三浦へ送りたくば、聟引出には汝が首、覺悟せよや」と詰寄すれば　秀盛「ヤレ早まられな三浦之助、命を捨てて名を揚ぐるは、誰しも武士の好む所、名を捨てて忠義を立る造酒正、その證據こそ此兜、これこそ將軍宣下の御寶、たとへ賴家軍に打勝ち、四海殘らず押領あつても、此兜なき時は、將軍宣下思ひも寄らず、そこを計つて片岡が、鎌倉方へ裏返り不忠の名を取られし故、念なう兜を奪取り、某に渡されしは、名を捨てて忠義を立つる古今の忠臣。この兜手に入るからは、是より坂本の城へ走せ向ひ、鎌倉勢と分目の軍、たとへ時政何萬騎にて向ふとも、宇治勢多に壘を構へ、變に應じ機に乘じ、或は顯れ或は隱れ、千變萬化に寄手を惱まし、大將に舌卷かせんは、この和田兵衛が方寸にあり、心安かれ方々」と、坐ながら計る軍師の軍配。造酒正「ホヽ、驚き入つたる秀盛の明智、かゝる軍帥味方にあらば、軍の勝利疑なし。我は有つても益なき臣、今こそ三浦の望に任せ、聟引出進上せん」と、いふより早く差添腹に突き立つれば、「ナウ悲しや」と姫妹、縋り歎くを押退け突退け、造酒正「京方には誰々と、指折の數にも入りし某が、暫くにても鎌倉へ、裏返つたるその惡名、何を以てか雪ぐべき、味方の内にも追從表裏の大江の入道、某再び城に歸らば、兼々より鎌倉へ、内通したる事共の、顯はれん事身の大事と、如何なる非道謀計を以て、味方の心を迷はさば、まち〳〵なる人心、我疑へば人疑ふ、人氣和せざる其の時は、軍の勝利思ひも寄らず。そこを思うて此の切腹、死後にても片岡は、返り忠せし不忠の臣と末代に名は汚すとも、一心五臓に忘れぬ忠義、何卒名ある軍帥を、御味方させんものと、心當とは和田兵衛殿、妹が連添ふと聞けば幸ひ住所を尋ね、我が志を立てん事、此人ならでと娘を誘ひ、存念を立てたる某、妹悔むな、時姫君もお歎なく、御身に代る娘めが、志を立ててたべ。不愍やお主のお爲と聞き、悅び事は悅びしが、とてもの事に男の子に生れたら、

戰場の一大事、御馬前の御用に立つて名を上る、討死したら父上迄がお嬉しかろが、女子の身の腑甲斐なさ、父様怨へて下されと、言うた時は出かしたと、賞むる事さへ胸に迫り、一言一句も出なんだに、親に優つて先に立ち、親は後れて歩む足、此家へ來る道々の、堅牢地神の首には、嘸片岡が踏む足が、大磐石とこたへやせん、重き忠義にかへたる娘、よう死んでくれたな出かした」と、鍛ひに鍛ひし忠義の身體も、子故の鞴に吹立てられ、咽ぶ涙は熱湯の、湯玉迸る如くなり。妹は正體泣沈み、「よく〳〵うすい兄弟中、たつた一人の姪子にも、名乘合もする事か、果敢ない別れ悲しや」と、歎けば共に時姫君、時姫「とても添はれぬ敵同士、疾うからわしが死んだらば、斯うした憂目は見まいもの、どうぞ添ひたい〳〵と、未練な心の迷ひから、親子の衆のこの最期、コレ勘忍してたもいなう。思切らうと思うても、儘にならぬが戀路の因果、つれない命死遲れ、面目ない恥かしい。叶はぬ戀を諦めて、此身の果は尼法師、それがせめての言分ぞや」と、身をから菊の兩袖に、保ちかねたる露涙、親子の爲の香花ぞと、兜を時の香爐に薫らす煙蘭奢待、「東大寺の寶物なれば、佛緣に誘はれ、未來の佛果」と合す手に、又も涙の數珠の玉、秀盛「こは有難き御手向、娘も我も成佛得脫、只此上は三浦之助へ、媒介頼む和田兵衛殿」秀盛「ヲヽ、その義はちつとも氣遣あるな」と、兜を取つて三浦に向ひ、秀盛「舁引出と望みし首、此兜ゆゑ命を捨てし片岡なれば、一心五體は兜に殘る、之を引出に姫の事、氣強きばかり武士とは云はぬ、コリヤ情も武士の道具ぞ」と、渡せば取つて三浦之助、三浦之助「此上何か辭退せん。さは云へ勝利を得る迄は、お預け申すおまき殿。家を出づる時、妻子を忘れ、戰場に及んで身を忘るゝは勇士の常、若しも運盡き頼家公、御大事とならん、時これ此龍頭の兜を著し、君に代つて討死せん。名香薫る首取りしといふ沙汰あらば、この三浦が討死せしと知り給へ」と、詞は末にあふ坂や、關の清水と湧きかへる、涙ながらの暇乞、離れがたなき初戀に、ほだしは見せぬ若武者を、伴出づる軍の門出、羨ましげに伸上り、見送る手負を介抱し、共に見送る姫女房、戀と無常を見捨てゆく、武士の道こそ三重是非もなき。

第七

名にし近江の景色も、今戰場となこの浦、源の頼家公坂本に居住し給ひ、家々の旗指物、比叡颪に翻り、霜に輝く弓鐵砲、陣所の篝火天を焦がし、要害嚴しく守り居る。御城預り佐々木四郎左衛門高綱、城中隅々つまり〳〵、寒夜を厭はぬ夜廻に、心を配つて立歸れば、物見の軍士新開次郎御前に畏り、新開「某只今遠見致せしに、寄手は比良に陣を取り、明日敵の大將は、御舍兄佐々

木三郎兵衛盛綱殿、未明に寄來る體と見え、數萬の軍兵弓弦をしめし、馬に鞍置き鐵砲火矢の用意最中、御汐斷あるな」と述べければ、高綱「ヲヽ、出かした〳〵、兄盛綱の軍立心憎し。さあらんと某も、かねて手當を仕置きたり。猶又汝諸軍に其旨觸れ知らせよ〳〵」と急立やり、其身は軍慮に他念なく、暫時の暇も几帳草行の堅からぬ、あひにあひ持つ間の襖、物靜かに押開き、妻の篝火一子小四郎の手を引き立出で、篝火「是は〳〵まだ御休もなされず、夜晝合戰の御工夫、只今聞けば明日より矢合、寄せ來る敵は兄御盛綱樣、他人より晴の合戰、此の子も今年十三なれば、今夜鎧の著初させ、父上の御供して、初陣に手柄したいとたつての願、お聞屆遊ばして、小四郎の初陣御許しなされ下されかし」と、母の願に小四郎も、小四郎「明日父上の、戰場への御供を、御赦免有れ」と幼氣に、思詰めたる顏色を、父も點き、高綱「尤々、主君へ忠義に魂を凝らし、我が子の年をはつたと失念、流石は高綱が子程あり、出かす〳〵。成程そちが願に任せ、明日の軍には我に引添ひ、初陣の手柄を見せよ」篝火「サア嬉しや父御の得心、其方も悅びや、鎧の著初に此母が、手づから、縫ひ仕立た鎧下、裃丈藍の下染に、勝つ色見する紅梅縅、母が手を添ゆるのが陰陽和合で著初の故實、此上は作法の通り著せてやつて下さんせ」と、夫婦立寄り壽を、祝うて鶴の小手觸當、總角取つて打著すれば、父は上帶しつかと締め、篝火「適れ武者振、鎧の著ぶり父御にとんと生寫し」と、母の悅び高綱も、我子を見上げ見下して、悅ぶ眼に涙を浮め、高綱「情なきものは武士の身の上、御主人の御爲に、明日討死も計られず、命は義によつて輕し。汝とてもその通り、伯父甥兄弟引分れ、骨肉の戰なれば、敵も味方も晴れ勝負、さり乍ら討死するを忠義とは云はれまじ、千變萬化に軍慮を廻らし、身を全うして始終の勝こそ武士の肝要、我幸ひに付從ひ、未練の働き致すな」と、父の詞に小四郎も、鎧づきしてゆゝしげに、勇み進み し武者振は、末賴もしく見えにけり。母は悅び軍配にて煽立て〳〵、篝火「ヲヽ、出かしやつた、只今の父樣の教訓、忘りやるな。著初の儀式は奧の間で、父御の盃頂戴しや」高綱「成程々々、賴家公にも申上げ、初陣の門出を祝はん。篝火來れ」と打連れて、一間の中へ入りにける。夜もはや更けて深々と、音は湖水のなみならぬ、敵か味方か白妙の、雪にきらめく陣羽織、武者頭巾に目ばかり出し、後先見廻し城門を、忍びやかに打敲けば、豫てぬからぬ佐々木が下知、門番櫓にかけ上り、透し窺ふ星月夜、くわんしやうちやんと裲襠に押取刀篝火が、城門近く走り出で、篝火「注進の者か何者なるぞ」門番「さん候、供をもつれず只一人、敵の忍びか內通か、何にもせよ名を名乘られよ、何と〳〵」と尋ぬる聲。盛綱「ア、騷がし音高し、斯くいふ我はこの城中の主、佐々木高綱が兄三郎兵衛盛綱、弟が顏見たさ、竊かにこれまで來りし」と、案內の趣取次

に、篝火不審晴れやらず、篝火「一家は内證、明日は互に劍を振合ふ敵の大將、三郎兵衛盛綱殿、如何なる手立も圖られず、内へは得こそ通すまじ。たつてとあらは用捨はならず、ソレ何れも防矢の用意々々」といふ折から、奥の間より早使、曽「高綱樣の仰には、兄盛綱樣久々の御入、門を開いて御通しあり、對面なされんとの御事」と、聞いて猶しも訝しながら、「夫の深い思案こそありつらめ。此上は門を開き、御通りなされと申しませい」と、禮義の詞褄襠に、小太刀隱してしづしづと、油斷あら木の門の門、くわつた犇めく城門を、開けば盛綱のつし〳〵、通る容ぶり出向ふ氣配、互に見合す四つ目結、坐するも針の青疊上ずんべりの會釋して、篝火「コレハ〳〵珍らしい盛綱樣、久しう御目にかゝらねど、何方樣にもお揃ひ遊ばし、御健勝の御樣子、陰ながら承つて、夫を始め妾が悅び」盛綱「イヤもうそれは相互、今日も指折つて數ふれば、弟に別れて今年で丁度十三年、其節一子も當歲なりしが、定めて成人したであろ。此方にも小三郎といふ同年の悴、見かはすばかりの成人、先だつての合戰には、國に殘しおきたれど、此度は母も子も、是非に同道してくれと親子の願ひ、久々一家の對面せねば、餘り〳〵の懷かしさに參つた。小四郎が成人顏、早く見たい、一日逢はしておくりやれ」と、世に睦じき盛綱の、詞は二心もあるまいか、如何かかうかと胸は燻る篝火が、篝火「成程あなたの仰やる通り、太平の御代なれば、小四郎も伯父御樣に、御引合せ申して、何が差置きお盃を、頂戴致するが順道なれど、サア儘にならぬは敵同士、どうて明日は初陣に、父御に引添ひ出ますれば、御對面は戰場にて、悴小四郎が小腕の拳、矢一筋射かけませう、それを一家の盃と、思召して下さりませ」と否とは云はさぬ尤ごかし、盛綱返へす詞さへ、鴛鴦の間の襖押開き、高綱「四郎左衛門高綱、それへ參つて對面仕らう」と立出づるその形、軍の出立引かへて、兄弟因の長羽織、遙か下つて座に直り、高綱「一別以來御意得ねど、兄じや人にも御健勝、永々母の御介抱、身に餘つて大慶。先だつては由なき詞の論によつて、兄弟の中不和となり國を立退き、是まで疎遠に年月を送りし失禮、全く御免下さるべし」と、しんきやうの禮こまやかに、手をつき疊にひれ伏せば、盛綱も坐直つて盛綱「ホ、音信不通は相互、今日來るは久々にて對面が致したさ、又その外に折入つて、賴みたき仔細有つておして推參」高綱「是は〳〵兄じや人、改つたるお詞、身分相應な御用ならば、聞かうぢやまで」盛綱「先以て忝し。賴みたいは別儀でない、今宵潛かに陣屋をぬけ出で、只一人來た仔細は、某今日より心を改め、賴家公へ降參に參つた、何卒御前へ取次がしてもらひたい。かやうに云へば盛綱、卑怯者と思はふが、さうでない、明日の合戰は、何れが勝つとも定まらぬ互角の合戰、旗色惡さに降參する三郎ならねど、つく〴〵思へば兄弟弓を引きあふも、武士の習とは云ひながら、昔の爲義

義朝の保元の戰、正しく天の道に背けば、平治の亂に義朝は、長田に討たれ源家を潰し、永く武道の惡名を殘す。いづれが討ち討たれても、父尊靈の魂魄、悲しみは如何計、兄弟が不孝の罪、天より高く、滄海よりなほ深し。夫を思へば、何と刃が合されう。今日只今心付き、恥を捨て兜を脱ぎ、降參に來た此盛綱、骨肉同胞の好には、賴家公へ御取成、賴入る弟」と手をつき、頭を下げにける。物を云はず高綱、ずんと立つて入らんとす。盛綱「是さ弟、聞屆けておくりやるか、迯答如何に」と引止むれば、立てたる滋籐押取つて、りう〳〵發矢と擲り打つ。こは何事と驚く妻、本筈しつかと　盛綱「先づ待て高綱、現在の兄を打擲するは、何故の立腹」と、云はせも立てずはつたと睨み、高綱「兄とは推參慮外千萬。凡そ弓取の操はな、善にもせよ惡にもせよ、一たび賴まれたる詞を變ぜず、危きを見て命を捨て、二君に仕へぬを道とする事、犬打つ童まで知る所、佐々木高綱が頭を踏まへし三郎盛綱　一旦鎌倉に味方しながら、今更旗色の惡しきを感じて、なま面下げて降參とは、よつく腰拔の犬侍、兄弟の緣切つた。それ共御邊、誠高綱が兄ならば、その腐つた性根を改め、いよ〳〵敵味方と成つて、戰場にて四郎左衞門高綱が、首取つて見せうとお云やれ。それこそ誠の兄じや人、有難く存じ奉らん。いつの間にその樣な、臆病神は付いたるぞ。エヽ情なや口惜しや」と、或は勵まし或は敬ひ、怒の眼にはら〳〵涙。盛綱「チヽ尤至極、盛綱も返す詞はなけれども、御邊は一圖に忠計り、孝の道に心付かず、この比我が陣中へ慕ひ來る母微妙、御邊が爲にも親ならずや。どちらが討ち討たる共、お年寄られし母人の、御歎きを思遣り、生きる共死る共、兄弟一所にせん爲に、孝行の降參、聞分けて是非お取次、弟嫁も取なしを」賴む〳〵の眞實も夫の心はかり兼ね、何と挨拶口ごもる。高綱「ヤア恥を恥共思はぬ人畜、顏見るも穢らはしい、城内には暫時も叶はぬ、早出て行きやれ」と手を取つて、引出す義心の誠には、咎めん方もあら氣の高綱、高綱「あかの他人の卑怯者、ぼひ捲つて門を堅めよ。無益の事に陣立の、支度延引暇惜しや。篝火來れ」と立つて入る。兄はすご〳〵計略の裏搔く矢先に返し矢も、思案とり〴〵寨の馬場先、窺ひ寄つたる侍は古郡新左衞門、新左衞門「盛綱殿か、城内の首尾何と〳〵」盛綱「イヤもう弟高綱が義心は鐵石、某も北條殿の御賴、何卒高綱を鎌倉へ味方させんと、よそながら心底を探り見れ共、いかな〳〵二君に仕へる所存のない事、しつかりと錠が下りました。とてもお手に入らぬ高綱、この上暫時も猶豫ならず、短兵急に取圍んで、城を落すが肝要々々。早明方も程近し、大將へ御注進」新左衞門「げに尤、いざござれ」と逸足出して行く跡に、高綱しづ〳〵動出で、高綱「時政に賴まれて、我を鎌倉の味方につけんと、あざとき兄が佯り表裏、計略を仕損じたれば、時を移さず寄せ來らん。ヤア〳〵陣所の諸軍共、鐵砲火矢の用意

せよ」と撥押取つて陣太鼓、亂調に打ち立つれば、東の山に茜さす白旗、赤旗閧の聲、早寄せ來る　三重朝嵐、待設けたる坂本勢、砦櫓の矢間より、敵を寄せじとさし詰引詰、射かくる矢先は雨霰、射竦められて寄手の軍兵、攻めあぐんでぞ見えたる所に、城の大木戸押開き、花やかなる若武者一騎、駒に鞭を打立て〳〵、手綱かい繰り乘出し、小四郎「ヤア臆したる鎌倉勢、我討取つて手柄にせよ」と鞍嵩に突立上り、「我こそ佐々木四郎左衞門高綱が嫡子小四郎高重、今日が初陣」と名乘りかけ〳〵、東西に驅廻れば、好敵なり討止んと、數多の軍兵ばら〳〵と押取卷く。櫓より母篝火、わが子の初陣勝負は如何と、見れば平場の戰に、多勢の中に取込められ、父に學びし手練の太刀打、前後左右より突懸る、琴柱熊手十文字、切拂ひ眞向縱割手を碎き、切立てられて軍兵共、立つ足もなく逃げ散れば、櫓より見る母親は、嬉しき足も千鳥なき、濱邊の方より、年配恰好同毛の、駒に跨り乘り出し、小三郎「日覺ましき小四郎殿の働き驚き入る、某はそなたの伯父、佐々木三郎兵衞盛綱が一子、小三郎盛淸、互に初陣從兄弟同士の晴勝負」と、兩人馬を馳寄せ〳〵、太刀拔きはなし片手綱、互に覺えの大きよくぶきよくの太刀捌き、手を盡してぞ戰へば、左手の山の尾先より、小三郎が父佐々木盛綱、忰が初陣勝負は如何にと、戰瞰下す遠眼鏡。母は櫓に目も放さず、膽を冷やする子と子の勝負、そこを付け込小三郎と、傍なる人にいふ如く、

父があせれば篝火は、夫れ小四郎打太刀が鈍つて見える、そこを〳〵と力む父親あせる母、互に勝負も附かざれば、寄れ組まん尤と、馬を乘寄せむずと組み、ゑいや〳〵と揉み合ひしが、鎧蹴放し組みながら、兩馬が間にどうど落ち、上になり下になり、ころ〳〵轉び打つたりしが、小三郎運や强かりけん、小四郎を取つて引伏せ、上帶解いて高手小手、折重つて大音上げ、盛淸「佐々木の小四郎高重を、初陣の手始め、生捕つたり」と呼はれば、寄手はどつと褒むる聲、櫓の上に篝火が、わつと泣く聲勝閧は、谷に響きて　三重騷しき。

第八

その源は近江路の、比叡山おろし隔てられ、便り堅田のかり絶えて、武夫の義は石山や、月の弓張矢叫びの、矢橋の歸帆陣幕も、ひらめく比良の陣館、小三郎が初陣の、手柄初めと父の悅び、妻の早瀨老母の微妙、軍の安否聞く迄は、心許さぬもち刀、腰元共も鉢卷しめ、追々告げる高名噂、腰元「日出度い〳〵、和子樣が今日の手柄の一番帳、同じ初陣同じ年の、小四郎を生捕り給ふは、大の男を仕止めたより遙かの譽」と口々、側から早瀨が嬉しさ、早瀨「申し、お聞きなされたか、ほんそ孫の小三郎、是からが猶祖母樣の甘やかしが思ひやらるゝ。去りながらひよんな事は、其

手柄の合手が他人なればよけれど、やつぱりお前の孫の小四郎、嬉しいと悲しいと、片身がはりの御心を、思遣つて」といふを打消し、みめう「嫁女、そりや祖母への當言か、尤も孫の名はあれど、不所存な悴佐々木高綱、音信不通の中に出來た小四郎とやら、つひに顔見た事もなし、よしは不愍に思へばとて、かう敵味方と別れた上、我も源藏義秀といふ弓取を夫に持ち、盛綱を生んだ母、涙かけてよいものか、そんな事云出しても下さるな。シテ兵衛盛綱孫の小三郎、まだ歸館召されぬか」腰元「ハイお二人ながら御具足をお上下に召換へられ、道より直に石山の御陣所へ、御出仕遊ばしたとの注進、定めてきつい御褒美」と、さざめき渡る程もなく、立歸る佐々木兵衛、小三郎盛淸、諸人の尊敬身の面目、上下衣服も花やかに、自然と威を持つ其跡に、無慙やな小四郎は、高手に締むる警め繩、左右に取まかれ羽交叶はぬしよげ鳥の、顔見初めの孫か共、いふにいはれず面差の、わかれし我が子高綱に、似たと思へば不愍さを、嫁の手前と紛らせど、胸つぼらしい姿形、見まいと思へば目にかゝる、血筋の因果ぞせん方なき。兵衛盛綱謹んで、盛綱「悴小三郎初陣の手始め、是なる繩付生捕りし事、誰々よりも目指す大敵、佐々木四郎左衛門が悴俘囚とせしは味方の强味、抜群の高名と時政御感斜ならず、御悅びの盃を下され、手づから感狀を下し給はる、御前に竝居る諸大名、凡そ子を持つ程の人羨まぬ者もなく、子息の武勇に肖る爲、其所へも盃此所へも頂戴と、もてはやさるゝ親の面目、それ故退出も遲なはる、首尾殘る方もなし、お悅び下され」と、語る中より早瀨が浮き〳〵、早瀨「何と御覽じましたか、かはいさうに軍の供したがるものを、足手纏ひぢや留守して居れと呵付けて、鎌倉に殘して御出なされたれど、今度の軍にはづれたら、生きては居ぬとせがみにせがまれせう事なし、一層祖母樣三人づれ、跡追うて來た時にも、さん〴〵に叱られたが、今日の手柄を見た時は、よう連れて來たと私が自慢、出かしやつた〳〵、生んだ母まで俄に肩が聳つて來た」和子樣お手柄〳〵と、賞めそやしたる囂しさ。微妙も共に出かしたと、勇んで見ても何所やらに、濟ぬは胸の潮境、わけ兼ぬるこそ道理なれ。小三郎手をつかへ、小三郎「わけて君の御諚には、囚人の小四郎、首討つ事必ず無用、何時迄も助け置くこそ味方の計略、縛は其の儘にて、隨分大切に仕れとの御事なり。ノウ小四郎殿、こなたとは從兄弟同士、初陣の軍に仕負け、嘸無念にござらう」と、言はれて小四郎顔振上げ、小四郎「父樣の豫ての敎、勝つも負けるも軍の習、まさかの時に逃げるのが、侍の恥辱ぢやげな。生捕られても恥とは思はぬ、早首切つて下され」と、目を瞑いだる立派さは誠に父が子なりけり。物見の侍罷出で、侍「和田兵衛秀盛と名乘り、盛綱公に見參致さんと、供廻り僅か一兩人にて通り候」と訴ふれば、盛綱「ハテ心得ぬ、敵方の侍大將輕々しく來るは一物、ソレ囚人奥に取逃すな、皆退け」と

追立て遣り、騒がず座席取かたづけ、衣紋繕ひ出向ふ甲冑の姿、引かへて長上下踏みしだき、伊達拵の大小も、さしも無骨の荒くれ男、目禮式禮悠々と、上座にどつかと押し直り、秀盛「扨々此度の合戰、佐々木三浦かく申す和田兵衛、火水の勝負を決せんと、牙を嚙んで相待つ所に、鎌倉の悠長武士、一日寄せては二日見合せ、睨合ひて日を送る中、此方はほつと退屈、それ故今日は具足も取置き太平の姿、坂本の城より使者に參つた」盛綱「ハァ〳〵、是は〳〵名にし負ふ和田兵衛殿、よく〳〵大切の義なればこそ。御使者の趣逐一に仰聞けられ」と有りければ、秀盛「イヤ別儀でござらぬ、今朝高綱構へにて、其許の手へ生捕られし小四郎高重、ちと此方に入用なれば、只今御返し下されとの使なり」と事も無げに述べければ、盛綱「ハヽヽヽ是は存じの外の御事、何ぞや一人の童連に、侍大將の自身馬を向けられしは珍説々々。あの小悴一人がなければ、合戰も得なされぬか、何故にさ程懇望、事をかしう存ずる」と嘲笑へば、秀盛「げに尤、しかし此方に不審なるは、其の童の小四郎を、貴殿の子息が生捕りしを、一城をも乘取りしが如く悦び勇み、鎌倉方の勝軍の基なりと、箙を敲き勝鬨作つて引かれしはこれ如何に、さ程鎌倉方に懇望せらるゝ小四郎故、此方にも惜しく存じ、是非所望に參つたり。其の代りに少分ながら、此の和田兵衛が髭首進上申す、お望ならば手柄次第に、隨分取つて御覽なされ」とむづと坐したる不敵の顏色。盛綱打笑み、盛綱「扨々弟ながら高綱は、大功の勇士と思ひしに、悋に迷ふ未練の性根、そこを察して朋輩の好、命を救ふ情のお使者、あれしきの小兒、如何樣共申したけれど、生捕の帳に記した上は、時政公より預りの囚人、盛綱私に渡されず。ならば踏込奪取つて歸られよ、其の座は一寸も立たせじ」と、反打つて詰めかくれば、秀盛「アヽおせきなされな、貴殿と拙者只今こゝで刺違へては、敵味方によき大將二人を失ひどちらも兩損。よし〳〵御邊の儘にならぬ囚人、此上は石山の陣に參り、時政殿に直談し、じた共所望致して歸らん。盛綱さらば」と立上り、廣庭におり立てば、盛綱「ヲそりやとも角も勝手次第、さあらば石山へ御案内申さん。ヤアヤア誰かある」と詞の下、小具足固めし覺えの力者、ばら〳〵と取卷いたり。秀盛「ハテ仰山な案内者、敵の陣中へのう〳〵と、一人參る和田兵衛、不知案内の無骨者萬事宜しう」盛綱「氣遣あるな、ソレ必ず大將の御座近く、御引合申すならば、大事の珍客、隨分御酒を、合點か」秀盛「イヤ御酒とは忝い、我等別して大好物、御馳走ならは湖もが〻乾して御目に懸けう、お肴の飛道具、槍薙刀の串肴、何本なり共賞玩致す。盛綱殿おさらば」「和田殿御苦勞」「案内大儀」と長袴、虎を放してやる勇氣、火焔の中へ行く大膽、心の具足鐵石の、石山さして出て行く。盛綱は只茫然と、軍慮を帷幕の打傾き、思案の扇からりと捨て、盛綱「母人夫におはするか」と、音なう聲に立出づる、

陣屋の隈々跡前見廻し、母の膝にすり寄つて、盛綱「親の役目を子が勤むるは順なれ共、御老體の母人に御苦勞御願ひ申さねば叶はぬ事、申さぬ先から心得たとある、御誓言承はりたし」と、事有りげなる願ひの品、聞かねど流石佐々木の後室、打頷き、みめう「親子の中に改めて、頼むと有るはよく〳〵の事ならめ、仔細は知らねど心得ました」盛綱「ハツア早速の御承知忝し、お頼の仔細と申すは、最前の囚人、拙者が爲には甥、母人の爲には孫の小四郎を、今宵のうちに母のお手に掛けられて」と聞きもあへず、みめう「コレ〳〵盛綱、最前我君よりの仰渡され、必ず小四郎に過さすな、殺すなとの御諚ならずや」盛綱「サア其の殺すなと御諚故に、猶以て殺さにやならぬ、辯舌を以て人を懐くる北條殿、小四郎を殺すなとの上意は、生け置いて人質とし、子を餌に飼うて、佐々木四郎左衞門高綱を、味方に付けん謀、鏡にかけて顯はれたり。なか〳〵心を變ずべき、弟高綱とは思はね共、如何なる大丈夫も我が子の愛には迷ふならひ、萬が一この謀に陷つて、降參などの心付かば、子故に不忠の名を流さん事殘念至極。よしさはなく共小四郎が、俘虜となつて生きある中は、恩愛といふ大敵に、高綱が弓勢も弱り、刃金も自然と鈍る道理、迷の種の此小四郎、一時も早く殺してしまへば、弟が義心猶々鐵石、是ぞ兄弟弓矢の情。と有つて我手にかくる時は、主君北條の命に背く、幼な心に此の理を辨へ、自身に切腹するならば、我は油斷の過りばかり、兄が義も立ち、弟が忠も立つ、雙方全きこの役目は、御苦勞ながら母人、窃に小四郎に腹切らせて下されかし。現在の甥が命、申し宥めて助けるこそ、情共いふべけれ、殺すを却つて情とは情なの武士の有樣や。如何なれば兄弟敵味方と引別れ、今朝の矢合に敵は甥なり、味方は我が子、肉身と肉身の、劍を合はす血潮の瀧、修羅の巷の攻太鼓、胸に磐石こたゆるつらさ、弓馬の家に生れし不祥、聞分けてたべ母人」と、事をわけたる物語。母は手を打ち、みめう「尤々、兄のそなたも弟の高綱も、我が子に依怙はなけれども、隔てて居る程不愍もまさり、有り樣はそなたにも、心を置いて居ましたが、弟に不忠の惡名を、付けさすまいと左程迄、心遣ひの親切、ヲヽ忝いぞや、嬉しいぞや。世の譬にも小の蟲を殺して大功を立てる事、眞實親身は子よりも可愛い孫なれ共、思ひ切つて切腹させう」盛綱「ヲヽ、お出かしなされた、健氣者とは見ゆれ共幼き小四郎、若し小腕に切損なはゞ、母人よろしう御介錯。早短日の暮近し、佐々木兄弟が苗字を汚すか名を上るか二つの境、涙ばしかけ給ふな」「氣遣ひめさんな遲れはせぬ」「必ず氣強う遊ばせ」と、渡す一腰受取る腰の張弓に、詞番うて別れ入る。峰吹き返へす木枯に、早園城寺の鐘諸共、誘はれ來る白羽の矢、紅葉の茂みに射込みしは、主は誰とも人目せく、陣笠、目深に篝火が、男出立の半弓に、やはか仇には歸らじと、陣屋間近く慕ひ寄り、和田殿の供廻りに紛

れ込み、爰迄は忍入つたれど、用心堅き陣屋の木戸口、心を通はす矢文の謎、小四郎が目にかゝれかし。祝ひ祝うた初陣に、忌まはしい縄目の恥、外の手でも有る事か、從兄弟同士の小三郎、憎くてらしい手柄顔、甥を縛らせ伯父の身で、夫が本意か恨しい。どうして居るぞ只一目、見たい逢ひたい間の戸に、我身を犇と立板も、通すは涙の矢數なり。洩れてや奥に聲高く、「侍中待中、夜廻り怠り申されな」と、女の聲も敵の中、胸驚かれ篝火は、さし足ながら忍び行く。障子さつと目早の早瀬、紅葉の矢文抜取つて、つく〴〵眺め、「扨こそ〳〵、羽響もなき忍びの矢、女業と推量に違はぬ手跡、狀の文體にもあらず、名にし負はゞ逢坂山のさね葛、人に知られでくる由もがな、と古歌を書きしは、ム、〳〵手は見知らねど相嫁の篝火、囚はれの小四郎に、此の陣屋を脱け出で、人知らず來るよしもがな。こゝは處も近江路や、世に逢坂の關の戸を、明けて逢はんと知らせの謎、ヱ、侍の母の樣にもない、未練なさもしい軍に立てば、討死は覺悟のまへと、立派な小四郎に惡氣を付け、若し取逃しやなどしたら、其不調法は誰にかゝる、一家の誼は生捕つても、命は別條ない樣子、知らせて安堵さす程に、必ず爰らに狼狽て、親子一所の縄目を受け、夫の名まで汚しやんな」と、恨のうらの反古文、打返したる返事の古歌、矢立の硯さらさらと、書したゝめて括付け、内にも人目滋籐の、弓打番ひ陣外の、小松にひやうぴ手答と、とも

に立て切る障子の内、幼な心に油斷せぬ、縄付ながら小四郎は、そつと一間を忍び出で、高重「今伯母樣の讀ましやつた、矢文の手は母樣、爰を脱けて戻れとの、知らせは聞いても敵の中、見咎められては恥の恥、とは云へ母樣何所にござる、死ぬ共ちよつと、顔見たや」と、そろり〳〵とぬき足も、危き毒蛇の陣の口、あはや跡より窺ふ微妙、「小四郎待ちや」と聲に吃驚、小四郎「ア、イ、何所へも行きや致しませぬ、御赦されて」と斗にて、わな〳〵慄ふ有樣を、つく〴〵見れば見るに付け、同じ佐々木の血筋でも、扨も果報の拙い子や、囚人の身となりたれば、子心にも氣おくれして、見すぼらしい顔容、今宵限りの命とは、云はねど蟲が知らすかと、思へばそゞろ先立つ涙、胸に押さげ撫下し、みめ「ヤレ孫よ、此所へおぢや。コレそなたの祖母ぢやわいの。器量骨柄揃うた子に、痛々しいこの縄目と、解いてそなたにこの祖母が、云聞かす事あり」と、立寄り解く血筋の縄、子故に引かれ篝火が、又立戻る陣屋の前、篝火「矢文の返事は兄嫁の早瀬の手跡、行くも歸るも別れては、知るも知らぬも逢坂の、關とは時節を待てとの事か」如何にと見やる戸の隙間、微妙は孫の手を引て、一間の障子押開き、みめ「ナウ小四郎、高綱に別れてから十三年の年月、孫ありとは聞いたばかり、懐かしさ逢ひたさは膝元で育つた小三郎より、顔見ぬ其方の不憫さは百倍、殊更長の浪人の、貧しい中に育てられ、武具馬具迄もさぞ不自由に、口惜しう暮しつら

んと、思遣る程片時も忘るゝ隙はなけれ共、思ふに任せぬ敵味方。この上下は祖母がそなたへ引出物、著てたもやいの」と差出せば、何心なくおし戴き、取上げて不審顔、小四郎「申し祖母様、この上下にはなぜ紋がござりませぬ、九寸五分が添へてあるは、高名手柄せよとある、首掻刀でも有るまい。こりや私に腹切れとの、死装束でござりますな」と覺る利發に驚く箐火。微妙はがはと泣たふれ、暫し詞もなかりしが、みめう「ヲ、流石は親の子程あり、人に優れてその様に、聞分けよい程助けたさは、胸一杯に迫れども、殺さにやどうもならぬといふは、父親の高綱が、武勇智謀の優れたが、そなたの身の仇敵、助けよとある北條殿は、子を人質に高綱を、降参さする謀、夫迄は殺しもせず、まして助けて歸しもせず、何時迄も陣中に、囚へ置けとの主命、生きて居る程高綱が、武勇の妨、爰の道理を聞分けて、潔う腹切つてたも。ヱ、見れば見る程目付なら鼻筋なら、眉に一つの黶子まで父親に此似様、智慧才覺まで違はぬもの、老先も見ずむざむざと、蕾の花を散らすか」と、老の繰言涙のはぐき、漏れて外面に聞く嫁の、「何ほ道理は道理でも、餘り氣強いお袋様、我子は殺さぬ〳〵」と、伸上れども葦垣の、隔つる中ぞ是非もなき。母の心の通じてや、小四郎おとなしく手をつかへ、小四郎「私が命一つで、父様や伯父様の手柄になる事なら、何の惜みは致しませぬ。尤も腹の切様も稽古して置いたなれば、切損ひもせまいけれど、私が一つの願、昨日軍の初陣に、直に敵へ生捕られ、此儘死ぬるは弓矢神の、冥加にも盡きたかと、何ほう悲しい口惜しい。どうでも一度はお歸しなされ、父様母様にたつた一目逢うた上、せめて雜兵の首一つ取つて、立派に死んで見せませう、この御願ひを」みめう「ア、これなう、賢い様でも流石は子供、預りの囚人敵へ歸して、盛綱が武士が立つものか。父や母に逢はされる程なれば、この憂目はないわいの。とはいふものの逢ひたいは道理ぢやわいの、尤ぢや。世が世の時なら二人の孫、右と左に月花と竝べて置いて老の樂しみ、この上もあるまいに、生捕るも孫、捕られるも孫、小三郎が手柄したと、煽立てる眞中へ、縛られて引出されし、顔見た時の祖母が胸は、張裂く様に有りしぞや。迚も甲斐ないそなたの運、期最が未練にあつたなどと、口の端にかけられては、親高綱が弓矢の名折れ、尋常に死んでたもヤ。介錯はこの祖母、可愛い孫を先立てて、いつ迄因果の恥曝さうぞ、祖母も直に自害して三途の川を手を引いて渡るわいの」と抱きしめ、泣く〳〵劔差付くれば、「只二親に逢ふ迄は赦して下され祖母様」と、未練も親子の恩愛に、道理といとど目もうろ〳〵、孫もうろ〳〵隙あらば、逃げんと見やる木戸口の、「こゝに」と母の呼子鳥、小四郎「ヤア母様か」と飛立つ計、驅出す孫を引止めて、せき立つ老母の聲あらゝか、みめう「エ、未練者卑怯者、扨は母親と内通して、爰を脱出る心ぢやな、それなれば猶やられぬ。

望の通り親にも一目逢はした上は、サア〳〵切腹、但し祖母が手に掛けうか」小四郎「サア それは」みめう「サア〳〵何と」と威に拔いて振り上る、劒の下に手を合せ、小四郎「母樣の聲聞てから、一ばい命が惜なつた。どうぞ助けて、お情ぢや、堪忍して下さりませ。アレイ〳〵」と逃げ廻り、おくれる孫に猶氣おくれ、みめう「ヤレ最前の健氣な覺悟忘れしか、迚も叶はぬ期になつて、臆病者の名を取るかや。伯父が見ぬ先自害して、立派な最期と賞められてくれ、祖母が方から手を合す、賴む」といへど逃げまどふ。外には酷や無情やと、恨も三方三惡道、前生の敵同士が、いとしかはいの孫や子に、生れて憂き目を見するかと、老母が親身の血の涙、時雨の中の枯れ紅葉、露より先に散りぬらん。折からさつと山風の、遙に陣鐘攻太鼓、事こそあれとさつそくの早瀨、長刀搔込み走り出で、木戸口開けば駈け入る篝火、早瀨「待つた〳〵、高綱のおかもじこりや何所へ」篝火「知れた事、我子の小四郎取かへす」早瀨「ならぬ〳〵。相嫁の初見參、長刀に乘りたいか」篝火「イヤ推參な」ときしみあふ、眞中に三郎兵衞、小四郎小脇に引抱か　盛綱「石山の御陣所に事有りと覺ゆるぞ。ヤア〳〵小三郎は何所にある」小三郎「ハア　卽只今御加勢」と、用意の小具足兜の緒、しむる間遲しと駈け出す。引違へて知らせの軍卒馳せ參じ、侍「時政公の計略の如く、佐々木四郎左衞門高綱、我が子を捕られし憤、今宵自身に馬を出し、手勢やう〳〵二千餘騎、鎌倉の總大將時政公に直見參仕らんと、死物狂の其有樣、鬼神の如く見え候。併し味方は豫ての用意、大將の陣は數萬の警固、盛綱公には氣遣なく、俘虜の怜を守護あるべしとの御ことなり。猶追々に御注進」と申捨てぞ驅けり行く。三郎兵衞大息つぎ、盛綱「ハヽア南無三寶しなしたり、さしもぬからぬ弟高綱、子故の闇に心眩み、謀に陷つたるな。摩利支天なれば迚、數萬騎のその中へ、いきがけの死軍、討死せんこと眼前たり。此上は親の御慈悲、佛間で御回向なされかし」微妙「盛綱」盛綱「母人」「エヽ力なき武運の末、殘念さよ」と計にて、眼を閉ぢて奥に入る。篝火なほも氣はそゞろ、我子も氣遣ひ夫も如何、千々に碎くる軍の破れ、ゐい〳〵おうの勝鬨は、敵か味方か二人の妻、胸の陣鐘足も空、二度の注進勇みの大音、侍「御悅び候へ、軍は十分味方の勝利、大軍に取圍まれ、集勢の高綱方度を失うて逃げ走るを、或は搔首あるひは射取り、殘る兵散々に追捲り、諸葛孔明と呼ばれたる四郎左衞門高綱を、はんがへ十郎が討止めて候」と、聞くより妻はハアはつと、心散亂燃えたつ篝火、夫の首は渡さじと、行くをやらじと止むる早瀨。侍「大將軍時政公、御成そろ」と呼はる聲、ハアはつと早瀨は大將の御座の設けと走入る。龍の雲にひいるが如く、一陽の春を待つ平の時政、近習の武士古郡新左衞門、佐々木小三郎盛淸御供に扈從して、御召換の鎧櫃御座の次に飾らせて、寛然と入給へば、三郎兵衞母微妙

敬ひ請じ奉る。竹の下の孫八慌たゞしく罷出で、孫八「最前和田兵衛秀盛、御陣所へ參りし所、日比好める酒を強ひて醉ひ臥させ、居間の四方に金網をかけたれば、籠の鳥同然と思の外のしれ者、隱し火矢をもつて屋根を打拔き、御座の間の白旗を奪取り、立退いて候」と言上すれば時政公、時政「敵の軍中へ鎧も著せず只一人、踏込む程の不敵者、汝等が手に合ふべきか。第一の大敵佐々木高綱を討取りたれば、腹心の害は拂うたり。去ながら此の佐々木、古への將門にならひ、一人ならず二人三人の影武者有つて、何れを是と見分けがたし、誠の佐々木か傷首か、弟の首よも見損ずまじ、兄盛綱實檢せよ」と、仰の下るに新左衛門、首桶御前に直し置く。三郎兵衛承り、大將に一禮し、無慙の弟が死首に、是非もなき對面やと、呑込む涙うしろより、父の死顏拜まんと窺ふ小四郎、盛綱が引開くる首桶の、二目共見もわかず。小四郎「父樣さぞ口惜しかろ、わしも跡から追付く」と、氷の刃雪の肌、腹にぐつと突立つる。盛綱「ヤレ母人お止めなされ、何故の切腹。仔細を言へ。」樣子は如何にと人々慌て介抱に、小四郎きつと目を見開き、小四郎「何故死ぬとは伯父樣とも覺えぬ、卑怯未練も父樣に逢ひたさ、父を先だて何まだ〳〵と生恥さらさん、親子一所に討死して、武士の自害の手本を見せる」と、きり〻〳〵と引廻す、その手に縋り母微妙、みめう「ナウその立派な心を知らず、叱つた祖母が面目ない、悔へてたも」と右左。目を瞬く三郎兵衛、時政「猶豫は如何に早實檢、何と〳〵」と御上意に、疵口拭ひ耳際まで、熟と改め故實を守り、謹んで兩手に捧げ、盛綱「矢疵に面體損じたれ共、弟佐々木高綱が首、相違御座なく候」と、御前に直し押し退れば、時政「ホ、ウ骨肉の兄が實檢といひ、首に向つて小四郎が恩愛の涙、切腹の有樣、誠の首の證據明白。思へば昨日この首に、後を見せし時政が、今手の下に誅罰する武運の強さ、ハ、ア心地好や嬉しやな。今といふ今時政が、初めて枕を安く寢るは盛綱が働き、我が著換の鎧一領、當座の褒美に殘し置く。小三郎其外には陣中にて、勝軍の恩賞せん。皆萬歲を唱へよ」と、悅喜の裝四邊を拂ひ、本陣さして歸陣あり。盛綱あたりを熟と見廻し、盛綱「佐佐木高綱が妻篝火、計略の僞首しおほせたれば、小四郎最期の暇乞、赦す是へ」と一言を、聞く間遲しとまろび出で、我子に犇と抱き付き、わつと泣くより外ぞなき。涙ながら母微妙、みめう「僞首と知つて、大將へ渡した其方は、京方へ味方する心底か」盛綱「イ、ヤいつかな心は變ぜねど、高綱夫婦が是程迄仕込だ計略、父が爲に命を捨てる幼少の小四郎が、あんまり神妙健氣さに、不忠と知つて大將を欺きしは弟への心ざし。彼が心を察するに、高綱生きてある中は、鎌倉方に油斷せず、一旦討死せしと伴つて、山奥にも姿を隱し、不意を討たんず謀。然れども底深き北條殿、一應の身代は中々喰はぬ大將、そこを圖つて一子小四郎を、うま〳〵と此方へ生捕らせ

しが手段の根組、最前の首實檢、僞首を見て父上よと、誠しやかの愁歎の有樣に、大地も見拔く時政の眼力を眩ませしは、教へも教へたり、覺えも覺えし親子が才智、見えすく僞首とは思へ共、か程思込んだ小四郎に、何と犬死がさせられう。主人を欺く不調法、申譯は腹一つと、極めた覺悟も負うた子に教へられ、淺瀨を渡る此の佐々木、甥が忠義に比べては伯父が此腹、百千切つても駈合ひ難き最期の大功。其方が命は京鎌倉の運定め、出いたな出かした」と、手負の顏を打守り〳〵、悲歎の涙にくれければ、篝火いとどかきくれて、「子を賞められる親の身の、悅ぶは常なれど、生きて高名手柄して、今の仰に預らば、何ほう嬉しかるべきに、年相應より利發なが生付いた此子が因果、如何に武士の習ひぢやとて、斯う〳〵して自害せいと、教ゆる親の胴慾さ、可愍や初陣の始めから、死に行くを合點して、俺や侍の子ぢやによつて、討死するは嬉しけれど、死んだら父樣や母樣に、つい逢ふ事がなるまいかと、夫ばつかりがと云ひさして、泣顏見せず勇んで行きしその利發さ、遒れ弓矢打物迄、誰に劣らぬ物覺え、腹切る事まで是程に、器用になくば何事ぞ、コレなう小四郎〳〵」と、手負の耳に口さし寄せ、篝火「この深手ぢやもの、耳も遠なろ、目も見えまい、今伯父樣の仰つた事、聞取りやつたか。そなたの命捨てたので、高綱殿の忠義が立つと褒美のお詞、夫を未來の引導に、迷はずと佛に成つてたも」と云聞かすれば嬉しけに、高重「そんならわしが死るので、父樣の軍の勝になるか、ヱ、忝い、祖母樣は何所にぞ、わしや縛られても、卑怯者ぢやないぞへ、夫れで死んでも本望ぢや、伯父樣伯母樣祖母樣にも母樣にも、逢うて死るは嬉しいが、たつた一つ悲いは、父樣に〳〵」と跡は得云はず、舌剛ばり、次第々々に弱り果て、惜しや實生の初花も、無常の風に散りてゆく。みめう「コレなう小四郎孫やい、今はの際に父親を尋ねて死んだ子の心、思遣つて只一目、なぜ顏見せに來てくれぬ。千騎萬騎の大將にも成るべきものを栴檀の、二葉で枯らせし胴慾は、神も佛もなき世か」と歎く微妙の聲限り、涙の早瀨篝火も、消ゆるばかりの思なり。三郎兵衞泣目を拂ひ、盛綱「ハア歎に紛れ後れたり。實檢を仕損じたる鎌倉への申譯、母人さらばと差添に手をかくれば、秀盛「ヤア〳〵盛綱、和田兵衞秀盛是に在り、敵を見掛けて自害とは、臆したるか」と聲かけられ、盛綱「シヤ幸ひのよき敵、歸らば其儘歸さんに、運盡きたる秀盛逃がしはせじ」と突立てば、秀盛「ヲヽ和田兵衞が習ひ得し南蠻流の懷鐵砲、受けて見よ」と、どうど打つ、狙は外れて鎧櫃、内に忍びしはんがへ十郎、太股射拔かれのた打つたり。秀盛「見よや盛綱、底の底まで疑深き北條の隱目附、汝が手にかけざれば、不忠にあらず彼めが不運、今又御邊自害せば、鎌倉への義は立つべきが、佐々木が首は僞物なりと、忽ち露現し是迄も、碎きし心は水の泡、時を待つて佐々木高綱、誠は爰に

と切つて出る其時に、潔く切腹せば、忠も立ち義も全し、腹の切様早い〳〵」盛綱「ハヽアげに過つたり我が命、暫く生きるは弟へ是も情の一つには、甥への寸志追善供養」秀盛「野送り萬事も一家の内證、諸事何事も此座ぎり、表は京方、鎌倉方、右大臣實朝の御座の白旗奪取りしは、軍の吉左右、重ねて再會、とめて見ぬか」と出て行く。盛綱「ヤア盛綱が陣中にて、味方の武士を討つたる曲者」返せ戻せは弓矢の儀式、因は兄嫁小姑、孫よ甥子の死骸に、うき事三井の暮の鐘、消え行く子より親心、我から崎の夜の雨、父に一目粟津の嵐、木の葉の紅葉かき寄せて、夕を照らす勢多の橋、門火は烽火敵味方、さらばとばかり、〻三重別れゆく。

第九

比良の暮雪と賞せしも、誠は寒き暮の雪、冬ぞ寂しき大津の浦に、世を澪わたる舟長の、妻もともど も外稼、内は十五の涎くり、留守の手習机の上、草紙にろくどの切かいて、「天かまいか」の玉錢を、一人打つたり飛廻り、遊びにたわひなかりけり。其日も西へ入相の、鐘に散りしく花ならで、雪解をしのぐ相合傘、よその宿に身を寄せて、我家に歸る女房およつ、ぉよつ「阿房よ、戻つたぞよ」といふ聲聞いて玉錢隱し、ぼん太「ヲヽ、おゐ様ようごんたの」ぉよつ「ヲヽ、彼奴わい、何ぞ他所から來た者の様に。そして暗いのに火もともさず、ぐづ〳〵と何してゐる」ぼん太「サアその様にぐづ〳〵すると叱られるによつて、ぐづ〳〵するかせんか、暗がりにして、お前の臍探ろと思うて」ぉよつ「又阿房めが、火をともせといふに」ぼん太「合點角行燈」硫黄の花にハヽ嘘、ぉよつ「又人を謗らんすかいの」と言ひ〳〵戸口さし覗き、ぉよつ「アレ門口に誰やら居る、誰ぢや、何所のぢや。イヤあなたは傘を御無心申したお侍様、お蔭で雪げを凌ぎまして忝う存じます。マア〳〵おはひりなされませ」と、いふに侍内に入り、侍「是がこなたのお宿元か、扨々綺麗なお住居でござりますな」ぉよつ「イヤモ、やう〳〵このごろ此家へ參りし故、まだ取締りもござりませぬ」侍「シテ御亭主の御商賣は」ぉよつ「イヤ亭主と申すは私計、營とても僅かな暮し」侍「ム、すりや後家御か」ぉよつ「ハイ、左様でござります」侍「是は〳〵まだお若いに、嘸御不自由にござらうな」ぉよつ「イエイエ一人身に慣ましては、さして不自由はござりませねど、此浦風の烈しさに、又しても夜冴が致し、心細い折しもは、誰ぞ力になつてほしいと、サア、思ふ様な縁もない物でござります」と、何所やら甘い咄に侍、襟かき合せさし寄つて、侍「我等花岡園部之介と申す浪人、未だ定まる妻もなければ、清水の花盛にはこの園部を戀慕ふ短冊も有らうかと、櫻の枝を見廻つても、當世は歌詠む姫も無いかして、閨淋しう暮らす某、何と相談する氣はないか」と、しなだれかゝれば、

こなたも打笑み、ぉよっ「聞きますればあなたのお名は園部様とやら、薄雪空の相合傘、お情深いも御縁の端、そしてどうやらいとしらしいお姿といひお顔付、女をなづます目元のしほ」と、こほれかゝりし姿振に、現ぬかして氣は上づり、側に阿房が差覗き、ぼん太「ヱ、悪い身をする侍、丁度股ぐらへ山猫挾んだ樣に」ぉよっ「コリャ又阿房口叩かずと、爰に用はない奥へ行け」ぼん太「アノ俺に奥へ行けかい、行けなら行こが、おれが奥へいたら、挾んだ山猫を出しおろぞへ」ぉよっ「まだ徒口を」と叱られて、ぼん太は奥へ立つて行く。およつは門の戸差寄せて、押入開けてこて〳〵と取出す蒲團打擴げ、ぉよっ「ヲ、寒む。こんな寒い晩は、ちつとなと早う寢て、肌温めう」と身を横に、なるたけ堪へる侍が、青うなり赤うなり、つく息さへも絶え〴〵に、侍「もう其所へはひろかへ、コレもう寢てかいな、どうもならぬ」と蒲團の内、はひればおよつが起直り、ぉよっ「そんならお前はいよ〳〵私と寢る心か」侍「イヤモ、心は何所やら飛んで仕舞うて、身體ぢうが張り切れる」ぉよっ「そりや眞實でござんすか」侍「ヲ、眞實共〳〵、もう根問ひせずとちやつと寢たい」ぉよっ「イヤ夫が定なら、お前へわけて無心が有る、何と聞いて下さんすか」侍「聞きたうても上氣して耳が聞えぬ、少々の事ならまあ寢所での事にせう」ぉよっ「イヱ〳〵、頼む事も頼んでから。何を隱さう私は敵討でござります」侍「よし〳〵敵討呑込んだ」ぉよっ「夫ぢやによつて、若し敵に出合はゞ助太刀して貰はにやならぬ、それ合點でござりますか」侍「よし〳〵助太刀呑込んだ」ぉよっ「萬一返討にあふ時は命を捨て下さんせにやならぬぞへ」侍「よし〳〵返り討呑込んだ」ぉよっ「ヲ、何を言うても呑込んだと、大腹中なお人では有るわいの」侍「よし〳〵大腹中呑込んだ」「ヲ、そりやお前何を言ふのぢや」侍「何ぢや知らぬが早う寢たい」ぉよっ「マアよ知れぬ事を云はず共、私が敵といふは兵法の達人、助太刀せうと仰やるお前、手の内が見たうござんす」侍「ヤア鉢坊主ぢやなし何の手の内」ぉよっ「サア兵法の御鍛錬が」侍「ア、兵法つかふのか、そりや心安い、何時なとつかうて見せう」ぉよっ「左樣なら御手練の程を、ヤレ〳〵嬉しやと申してから、心掛けねば竹刀しなひの用意もなし、何を以て御手練を」侍「イヤ氣遣召さんな、竹刀しなひ用意致した」ぉよっ「何竹刀を御用意とは」侍「ヲ、ハヽ、心掛の武士だもの、竹刀がなくて何とせう、しかも長いと短いがある」と、兩腰するりと拔放せば、赤鰯でもない備前竹光、侍「何と適れ竹刀であらうがの」ぉよっ「アノ是がお前の魂か」侍「イヤ魂は飛んでしまうてこりや人をだましいぢや」ぉよっ「ヲ、いつそ呆れて物が言はれぬ。もう御手練見るに及ばぬ、そのお心なら寢こ語ろ」侍「何ぢや寢よう、こりや忝い」といふ間に行燈吹消せば、侍「コリャなぜ火を消した」ぉよっ「ヱ、明くては恥かしいな」と、勝手知らねば此所彼所、尋ね探ぐる其中に、阿房をそつと蒲團の内、およつは勝

手へ探り行く。こなたは知らず高這に、探りあたる蒲團の内、何かはなしにぐす〳〵、はひれは阿房が大聲あげ、ぼん太「アイタ、、、、ヤレ盗人め、出あへ〳〵」と呼はる聲に吃驚し、こけつ轉びつ侍は、何所ともなく逃歸る。跡にぼん太が高笑ひ、ぼん太「ハ、、、逃るは〳〵。ヤイ侍め、汝が血氣に任せやじり切らうとかゝつても、滅多に切れるぼん太ぢやないわい。おゐ樣も亦おゐ樣ぢや、何のあんな奴が心を試す事があるもので、此間から來る奴等に、碌な奴は一人もない。ヱ、隙費な、追付け旦那樣が戻つてゞあらう、湯なとたいて腰湯さそ」と、あたりこて〳〵取片付け、納戸へ入るやいるさの月影さへ暗くしめ〴〵と、空にちらつく雪よりも、齡の雪を藏うたる、簑笠著たる老人を、乘せて我家へ戻り舟、櫓を押切つて陸に漕付け、二郎作「急ぎ候程に、早舟が著きて候、即ち是が我等が内、サア〳〵お上りなされませ」と、歩みわたせば老人は、しづ〳〵上る陸の方、船頭も舫綱、亂杙に縛り付け、いざ御案内と先に立ち、二郎作「女房共戻つたぞよ、お客がある、何所に居る」と、夫の聲に女房が疾しや遲しと納戸を出で、女房「ヲ、二郎作殿戻らしやんしたか、今日は定めし寒かつたでござんせう」二郎作「イヤモ寒い段ぢやない、雪は散つく、向ふ風の比叡颪で、櫓束持つ手も切る樣にあつたれど、風に逆うて櫓押したので、おれは寒いを忘れたが、あなたには嘸お冷えなされう、いざまづあれへ」と勸められ、簑笠脱ぎ捨て上座に直り、老人「一樹の蔭一河の流、不思議に亭主が世話と成り、寒夜の一宿過分の至り」と聞いて女房が呆れ顔、女房「テモまあ仔細らしい物の云樣、そして見りや生きた兜人形見る樣なお方、ありやマア何方でござんすぞ」二郎作「イヤどなたやら俺も知らぬが、今日は草津の方に軍があると聞いた故、何でもそこらあたりへ行たら、よい儲が有らうかと、矢橋の濱に舟付けて見合して居る所へ、彼方がひよつこりお出なされ、何かなしに舟へ飛乘り、ヤレ出せ、ソレ漕げと、滅多無性におだてられ、合點が行かねどマア沖へ漕出して、扨樣子はと尋ねたれば、石山の陣所へ歸る者、それ迄急ぎ舟を著けよ、望次第に舟賃やらうと仰やる故、畏まつたと精出して、押しても漕いでも向ふ風、と一向石山へ舟は寄らず、仕やう事なしに爰まで連れまして戻つた。今夜はこちにお泊め申し、風が凪だら石山へお供する、隨分御馳走申してくれ」と夫が詞に、女房「それはマア〳〵御難儀や、見ました所鎧とやらを召してござれば、定めて軍に行くお方、ナ申し、左樣な事でござりますか」と、尋ねに老人打頷き、老人「ホウ推量の通り今日の軍に思はぬ敗北、夫故かゝる世話に預る」女房「コレこちの人敗北とは何の事ぢやい」二郎作「ハテ軍に負けるを敗北といふわいやい」女房「ム、そんならあなたはお負けなされたのか、ヲ、夫れはまあ〳〵お笑止や。そして見ました所が、お年に不足もなささうなに、命がけの軍せうより、御子樣も有らうに、隱居

してござれば、敗北と　も有るまいに、定めてお腹が立つでござりませうな」老人「何の〳〵、勝負は時の運による。一旦の勝より始終の勝こそ善なるべし、計らざる今日の戰ひ、佐々木の四郎が謀に乘せられ、味方の大軍大半討たれ、某とても無念の敗北、陸路は佐々木に立切られ、石山へも歸り得ず、とやせん方も渚の方、途方に暮れて漂ふ所に、幸ひなる渡舟、危き難を遁れしも、全く其方が情故」と、始終を咄す軍の樣子、聞いて女房がさし寄つて、女房「申しその佐々木とやら云ふ人は、討死と聞きましたが、矢張生きて居られますか」老人「さればく、是迄佐々木を討取りしも度々なれど、皆影武者の僞佐々木、六日以前の戰に、佐々木が悴小四郎といふ者を、味方へ生捕るその砌に、討死せし佐々木が首、悴小四郎に實檢さすれば、誠の親と歎き悲しみ、直樣切腹、扨は佐々木こそ討取りしと、安堵の思に今日の出陣、又も佐々木に追立てられしは、幾人ありとも計なき、佐々木が謀の恐ろしや」と、舌を卷いて物語、聞く女房が打萎れ、女房「今のお話聞くにつけ、侍といふ者は、小い子でも軍して、命を捨てるといふ事は、果敢ないといはうか、いぢらしいといはうか、其の親々の身に取つては」といふを打消し、二郎作「エ、何の影もかまはぬ他所の事を。イヤ申しかうお宿申しますからは、迚もの事にあなたの御名を」老人「ホ、我こそは」といはんとせしが詞を控へ、老人「イヤ葉武者なれば嗚呼がましう」二郎作「ム、成程、芒の穂にも怖ぢるとやら、承つて益ない事、定めて御疲れでござりませう、見苦しけれど奥へござつて、御休息されませんかい」老人「如何樣老體なれば餘程の疲れ、詞に付いて暫く休息」二郎作「イヤモ何にも御氣遣な事はござりませぬ、ゆるりつとお休みなされませ」老人「ホ、何かに附けて心遣ひは過分々々〳〵」と、老人は靜々立つて奥に入る。跡に女房がくし〳〵と、思ひ侘びたる憂き涙、夫も思案あり顔に、手を拱いてさし俯向き、互に詞納戸より、ひよか〳〵出づる阿房のぼん太、重箱片手に、ぼん太「コレお家樣、お前忘れてござんすか、今日はぼん樣の一七日の逮夜、夫で一文餅三つ買うて來た程に、祝うて佛樣へ進ぜて」と、いふに思はずせき上げて、わつと計りに伏沈む。「ヲ、しほらしい、やう氣が付た、愚なわれが心ざし、供へいでなんとせう」と、しほ〳〵立つて押入の、襖開くれは釣佛壇、御燈明の火は有りながら、濕める香爐の香もりかへ、「智覺院幼幻童子佛果の爲」と手を合せ、伏し拜む目も涙なり。「申し佐々木殿」二郎作「シイ！」女房「イヤ二郎作殿、お前もこちら向いて、せめて一片の回向なとして下さんせ、私が千遍唱へるより、お前のたつた一遍が、あの子の功德になるわいの」と又伏沈めば、「ヤイ〳〵たはけ者、奥に客人もござるに、見苦しい其の泣聲、エ、未練な奴」と叱られて、女房「イエ〳〵なんぼ叱らしやんしても、是が泣かずに居られうか、いかに男のこうけぢやとて、お前計りの子かいな、私が爲にも子ぢや

わいな。まだ年はもいかぬもの、孝行せいと慘たらしい、父御の詞を子心に、大事々々と忘れもせず、立派にあつた其時の、姿が今に目先に見え、何と是が忘られやう、わしや忘れぬ得忘れぬ」と、どうど伏し、歎けば流石恩愛の、涙は胸につゝかけながら、二郎作「ヤイ聲が高い靜に泣け、我迚も肉縁の悴、不愍になうて何とせう、側でありく〳〵見た其方よりも、見ずに案じる我が心、どの樣に有らうと思ふ、骨は碎かれ身は刻まれ、肝のたばねへ燒金を、刺れる樣にあつたわい」と、涙隱せば阿房は目をすり、ぼん太「ア、利根な坊樣で、先度も、俺が穴一してゐたれば、コリヤ阿房よ、穴一すると手が下るといはしやつたによつて、コレ〳〵そんなませた事、いふとつい死ぬるぞやと云うたれば、俺や侍の子ぢやによつて、死ぬる事は何共ないが、ひよつと死んだら、嘸かゝ樣が、泣かしやろなアと云はしやつた、つい泣かしやる樣になつてのけた」と、大聲あけておい〳〵泣く。二郎作「コリヤもういうてくれな、聞く程苦しい此胸が、裂ける樣な」と伏沈む、涙は琵琶の湖に、漣寄する如くなり。かゝる歎きの時しもあれ、長押に掛けたる鳴子の音、風かあらぬかぐわら〳〵〳〵。二郎作聞くより突立上り、二郎作「コリヤ女房、城内より知らせの早打、奥の間に氣を附けよ、阿房は裏を」と追立てやり、戸口をちやうど指固め、居間の疊を跳ね上ぐれば、下よりぬつと鎧武者、侍「今日味方の勝軍言上せん」と手をつけば、二郎作佐々木高綱「ヤア音高し〳〵、谷村小藤治。シテ城内に變はなきや、今日の一戰、味方の勝利、次第聞かん」とひそ〳〵聲、侍「さん候、味方の軍勢粟津の汀に屯を構へ、戰を催す所に、敵の大軍どつと押寄せ、無二無三に駈け立つる。味方はわざと負色見せ、十町ばかり引退く。勝つに乘つて追來る大軍潮の涌くに異ならず、味方もこゝに踏止り、火花を散らして攻め戰ふ。仰置かれし時分はこゝぞと、四つ目結の旗さつと靡かせ、敵の後に大音上げ、佐々木の四郎高綱是に有りと名乘りかけ〳〵、驀地に駈け立つれば、そりやこそ佐々木が又出たぞ、謀に乘らぬ内、引けや〳〵とわれ一に、狼狽へ騒げば後陣より、大將時政采配振り立て、佐々木とて鬼神にてはよもあらじ、騒ぐな者共備へを立てて戰へと、高らかに呼はれども、佐々木といふ名に聞怖ぢし、崩れたつたる敵なれば、耳にも更に聞入れず、風に散り行く木の葉武士、逃げ行く者に目はかけず、目指すは時政只一人、餘すな漏すな者共と、稻麻竹葦と取卷きしが、天を駈けつて遁れしか、又地を潜つて走りしか、無念ながら時政は討漏らし候」と、息つぎあへず訴ふれば、二郎作「ホヽ、適れ高名、手柄々々、併し時政を討漏せしは殘念至極、シテ時政が出立は」侍「鎧は緋縅錦の直垂」二郎作「何、緋縅に、直垂とや。シテ〳〵、徒立か、但しは騎馬か」侍「イヤ馬は其場に射すくめられ、乘換もなく身は徒立」次郎作「ム、さこそ〳〵、汝は直に城内に立歸り、勝軍の油斷を窺ひ、夜討をかけまいものでも

なし、萬事油斷なき樣に、變あらば早速知らせよ。早行け〳〵」と云渡し、差寄つて耳に口、「ハア、畏まり候」と引返して拔道へ、飛込むあとの古疊、元の如くに押し直せば、女房篝火勇み立ち、女房篝火「今の注進聞くに付け、割符を合す奥の老人、時政に極まつた。此家へ來るは天の與へ、百萬騎よりたつた一人を討取れば、四海浪風靜まる手柄、用意さしやんせ四郎殿」と、急立つ女房騷がぬ高綱、高綱「ホ、圖らず我が手に落入る時政、とても今宵は過ごさぬ命」女房「いやいや〳〵、落付くも時による、油斷大敵小敵とて、侮らずとは常々お前が敎へる軍法、いざ討ち給へ、早う〳〵」と、急きに急き立つ折もあれ、又も知らせの鳴子の音、四郎心得手取早く、疊をちやうど跳のくれば、すつと出でたる四の宮太郎、四宮「御注進」と呼はるにぞ、高綱「ヤア汝が五音は甚だ不吉、心元なし如何に〳〵」四宮「されば候、城内には今日の勝軍、いづれも酒宴の興を催す中に、取分け和田兵衞殿、例の大酒數杯を傾け、餘程酒興の折柄に、大江の入道銚子盃携へ出で、和田兵衞の軍功大將感じ思召し、御悅びの御酒を下さる、頂戴有つて然るべしと、聞くより何の思慮もなく、土器取つて押戴き、ちやうど受けて乾し給へば、忽ち眼色土の如く、六穴より迸る、血潮は瀧の如くにて、さしも剛氣の和田兵衞殿、虛空を摑んで七顚八倒、其儘息絕え候」と、語るにはつと佐々木が仰天、高綱「ム、シテ〳〵其座に三浦之介は有合さずや」四宮「さん候、取分け無殘は三浦殿、毒酒を以て和田を殺せし暴惡不道の大江の入道、摑み拉いでくれんずと、阿修羅王の荒れたる如く、入道めがけ驅け上る、板間にかねて陷穽、踏はづして眞倒樣、下に植ゑたる劍にさかれ、身はずた〳〵と三浦の最期、皆入道が謀計なれば、此上は賴家公御身の上も危し危し。片時も早く城内へ、御入あつて守護有るべし」と云捨て又も引返せば、始終こなたに立聞く時政。佐々木はとかう呆果て、暫し詞もなかりしが、高綱「ハア、天なるかな命なるかな、和田と云ひ三浦と云ひ、いづれも秀る當時の英雄、入道などが手立に乘りしは、よく〳〵味方の運の盡き、此上は片時も早く、城内へ馳せ向はん。篝火用意々々々」と氣を急く折から、俄に表騷がしく、馬の嘶き數多の人音、三鱗の旗指物、弓鑓持筒引馬の、飾りもきらつく鎧武者、門口に謹んで、侍「鎌倉の大將時政公、此家に遁れまします由、忍びの物見が知らせにより、御迎の爲參上す、早く御歸陣然るべし」と、呼はり皆々平伏す。内に女房が猶急立ち、女房「アレ時政を迎の大勢、この場を助け歸しては、龍を淵へ放すも同然、サア今の内本望々々、サア〳〵〳〵」とあせる中、時政公一間を立出で、時政「誠に危き難を遁れ、殊に今宵の一宿迄、淺からぬ亭主が情、町人なれば褒美には、この濱邊に家屋敷を建て與ゆる間、濱屋敷として永く所持せよ、猶も望の事あらば、重ねての沙汰に及ばん。さらば〳〵」と馬引かせ、ゆらりと乘れば諸軍勢、四方を圍う

て立歸る、天の助は人力の、及ばぬ運ぞ類なき。篝火「エ、手に入る敵をやみ〳〵と、遁し歸へすは何事ぞ、未練共卑怯共、言ふに言はれぬ腰抜武士、お前は天魔が魅れしか、情なや淺ましや」と、恥しむれば、莞爾と笑ひ、高綱「敵の謀について謀を行ふ高綱、女如きの知る事ならず」篝火「ム、手に入る敵をやみ〳〵遁がすが、謀か計畧か」高綱「ホ、今歸つたは時政でない、ありや僞者」篝火「ナニあの時政を僞者とは」高綱「ホ、是迄度々の戰に、此高綱に欺かれ、其無念已む事を得ず、面體恰好似たるを選み、時政に扮裝たせ、今日の軍に討死させ、時政こそ討取つたりと、味方の者に油斷させ、其虛を討たんといふ手立、疾くより計り知つたるゆゑ、攻口を弛めさせ、わざと助けてこの家へ伴なひ、城内の變一々聞かせて歸せしは、誠の時政を城内へ、誘き出さん我が智謀」と、語るにさてはと女房が、初めて悟る夫の心、感じ入つて横手を打ち、篝火「適れ我夫稀代の計略、そんなら和田殿三浦殿も」高綱「シイ謀は密なるを善」といふ間に取出す種が島、狙は松が枝ばつたり人音、篝火「申し今のは、敵より入る忍びの曲者」高綱「早明方も近づけば、我は是より城内へ」と、又も燈を明烏、かはい〳〵の聲につれ、思出したる小四郎が、名は消えもせで其主は親を殘して西方淨土、彌陀の御國の道塚は、計り知られぬ佐々木が抜道、抜目なき智謀の程こそ　三重たぐひなき。江州坂本の城と申すは、後に峨々たる比叡を負ひ、前には湖水漫々として、日本無雙の名城に、立籠る源の頼家公、數度の軍に戰勝てども、目に餘る敵の大軍、味方は小勢矢も盡きて早落城と見えにけり。城内には大江の入道御母君を初とし、女中殘らず居並んで、頼家公の御居間と、隔つる座敷は大廣間、今日を最期の門出と、お湯引き、髪に梳り、留木の伽羅に諸軍勢、心ときめくばかりなり。入道母君に打向ひ、廣元「天命とは申しながら、和田佐々木三浦之助、おのれ〳〵が片意地を言募り、此入道が下知を用ひず、その罰で殘らず討死、所詮開くべき運ならねば、御生害を勸めまゐらせ、某とても跡より御供、時刻移らば敵軍爰に亂れ入らん、敵に首を渡さんより、片時も早く御自害」と、頻つて勸むる入道が、底意の程ぞ恐ろしき。宇治の方打頷き、宇治局「和田佐々木三浦の輩、討死せしとある上は、最早叶はぬ味方の運命、何惜しからぬ自らが命さりながら、已々が身の始末疎になし置かば、是又死後の物笑ひ、ヤア皆の者、心殘りのないやうに、めい〳〵心付けあらて、自らが自害も見屆け、其上は心次第、必ず早まる事なかれ」と、女ながらも上に立つ心は遙か奥よりも、頼家公の御使として局の千草、しとやかに手をつかへ、千草「母君樣へ我君よりのお使、微運は中上ぐるに及ばず、味方の面々討死の上は、生害の時節今日、潔う死出三途の御供せん、母上樣にも御心靜に御用意あそばせ、此期に臨んで申すべき事とては、彌陀の六字より他事なく候、その旨御肝要に思召し下されよ

との御事にて候」と、涙隠して述べければ、宇治局「ホ此方からも使を以て申し上げんと思ひし折しも、局大儀ぢや。シテ我君には、お隠まいようお入り遊ばすか」千草「ハア左樣でござります、未明より御覺悟よく、只母上樣の御菩提と、御經讀誦遊ばしてでござります」宇治局「ナニ自らが佛果の爲」ハアと答ふも尋ぬるも、跡は涙の玉霰、宇治局「御前へ歸つて申さうは、御念もじのお使、かく成る上は互に申すことの葉はなく候へ共、今生の名殘に御顏ばせ、今一目見まほしくさふらへど、入道の計らひ故、それも叶はず、冥途の旅へ赴き候、必ず母にお心をかけられず、大將たる御身に候へば、潔よく御生害をくれ〴〵賴み參らす」といふ聲涙に咽せ給へば、付添ふ女中も一同に、お道理樣やと伏沈む、涙限りはなかりけり。廣元「ヤア囂しい女ばら、局も早く立歸り、賴家公に早く切腹なされといへ、疾く〳〵行け」と追立てられ、是非なく〳〵も立つて行く。跡に入道聲荒らげ　廣元「泣いても悔んでももう叶はぬ、さつぱりと諦めて、どれからなりと先陣お仕やれ。此入道が初めたけれど、年役なれば跡から罷る。女ばらは誰彼なしに立並んで一所に死ね。サア宇治の方、時移る」と、三方取つて指付け〳〵、サア〳〵〳〵とせり立つるは、此世からなる呵責の鬼、外面は修羅の攻太鼓、矢叫びの聲喧く、母君耳を欹て給ひ、宇治局「ハテ訝しや、昨日の軍に和田三浦を初め、佐々木の四郎も討死せし故、最早この城保ち難し、生害せよと入道の勸め、誠と思ひ極めしに、今城外に和田佐々木とほの聞えしは、誰そ遠見して參られ」と、いらつて宣ふ詞を打消し、廣元「ヤア和田佐々木三浦を初め、其外賴む味方の大將、殘らず討死したは違はぬ、死ぬるのが悲しさに血迷うた空耳ならん、こま言いはずと早々生害」宇治局「イヤ此實否を質さぬ内は、滅多に自害成るまいわいの」廣元「ならずば某介錯」と、すらりと拔いて切付る。どつこいさうはと三方に、受けてもか弱き女業、剛氣の入道疊みかけ、既に危き其所へ、後の襖蹴放して、佐々木の高綱飛んで出で、入道を取つて投退け、高綱「某初め和田三浦、討死と佯り、御二方に生害勸め、夫を手柄に時政に、味方せんとは太い企、是迄、味方の謀内通したるも皆儕、主を賣るの極惡人、最早遁れぬ覺悟せよ」と、詰かけられてちつ共動ぜず、廣元「ホ、よい推量、儕等が忠義立てが胸惡さに、賴家親子が首取つて、時政公へ降參せんと、心を碎いた我が手立、十が九つ仕おほせしに、見顯はされて殘念々々。もう此上は死物狂ひ」と、佐々木を目懸け切付る。さしつたりと搔潛り、刀をちやうど踏落せば、詞には似ぬ大江の入道、奥をさして逃行くを、遁ざし遣らじと追うて行く者共、かゝる事とも知り給はぬ賴家公御身の上氣遣はし、此通り注進申せ、急げ〳〵」に女中達・皆々奥へ走り行く。如何忍び入りたりけん、北條時政廣間に駈出で、時政「入道が知らせ故、時政直に向

うたり、覺悟せよ宇治の方」と、いふ間もあらせず胸板へ、發矢と響く筒音に、脆くも息は絶果てたり。高綱「ヤアお騒ぎあるな宇治の御方、斯くあらん事を察し、つまり〴〵に守護する高綱、入道めが惡工、いかなる事も計られず、奥へ〳〵」と勸めやり、高綱勇んで大音上げ、高綱「鎌倉の大將北條時政を、佐々木四郎が討取つたり」と高らかに呼はれば、主人の敵遁さじと、拔連れ〳〵切つてかゝる。高綱「ヤアこと〴〵しき雜兵原、一々此世の暇をくれん」と、群がる中へ割つて入り、薙ぎ立て〳〵切まくる、その太刀風に木の葉武士、むら〳〵ばつと逃散れば、佐々木も上帶しめ直し、太刀のほめきを冷さんと緣側に突立つ折から、矢一つ來つて高綱が、肝のたばねにかつきと立てば、うんと計りにどうど伏し、果敢なき息は絶果てたり。誰が仕業とも白書院、弓矢携へ悠々と入來る北條時政、時政「是迄數度の戰に、佐々木めにたばかられし其返報、稻毛の前司は某によく似たるを幸ひ、我姿に出立たせ、佐々木めに宛がひし故誠と思ひ、本體を現はせし狼狽者、和田三浦は先だつて入道が、謀計に死したる由、稻毛が咄に聞きたれば、最早高綱唯一人と思ひの外、我が矢先きに最期を遂げし誠の佐々木、今は大將一本立。ヤア〳〵賴家は何所に有る、時政直に見參せん」と、呼はり〳〵奥の方、のた〳〵歩む耳元へ、又もどつさり種が島、吃驚仰天振りかへる、お花畑の烏威し、簑笠取つて高笑ひ、高綱「ハヽヽヽイヤお騒ぎあるな時政公、近江源氏の嫡流佐々木四郎左衛門高綱、それへ參つて御見參仕らん」と、呼はる聲に流石の時政仰天あり、時政「稻毛の前司に勸められ、深々と入來り、又も佐々木が手立に乘りしか、思へば無念」と引返す、表の方より和田兵衛、三方携へ立出づれば、此方より三浦之助、長柄の銚子携へ出で三浦之助「只今城外に於いて賴家公實朝公、御兄弟御對面の上、互に和睦相調ふ」と、いふに和田兵衛引取つて、秀盛「兩將の御心解合ふからは、時政公にも異議あるまじ、御悅の御盃頂戴あれ」と詞の下、佐々木四郎遙に手をつき、高綱「某方寸の謀を以て、時政公を城内へ引入れしも、御和睦を調へん爲。君御一人の御心にて、萬民塗炭の苦を遁る。御承引下さらば、敵對申せし我々、御刑罰にあふとても、聊か恨と存ぜず」と、詞をつくし理をせめて、命惜しまぬ三人が、忠義を感じて時政公、時政「ホヽ、適れなる忠臣義士、實朝公御許容の上は、某に何の野心、和睦は願ふ所ぞ」と、詞に三人飛立ち悅び勇立ちたる折からに、軍勢引連れ大江の入道、餘すまじとて追取卷く。「ヤア物々しや」と三人が、拔き放したる太刀風に、恐れて近寄る者もなく、入道一人を引挾み、是迄工みし惡の報い、思ひ知れと首打落し、悅び勇む和田、三浦、佐々木が家の四つ目結、その結び目は代々までも、解けず治まる秋津國、榮えの春ぞめでたけれ。

近江源氏先陣館 終

道成寺現在蛇鱗

專一ならざれば遂る事あたはず、象を圓にし機を庚磬に貫いて、思發々々濟事足んぬと、王洑雍子を諫めたる、喩を爰に日の本や、神と君との道直に、國を傳へて四十九代、光仁天皇の統御ある奈良の都ぞ豐なれ。比は寶龜八つの年、主上御惱によつて、皇太子を立てらるべき宣命に任せ、御連枝の御位定め、參議中の衞の大將藤原の百川、己が儲の一の宮、他戸の皇子を帝位に卽けんと、叡慮を恐れず公卿の評議も顧ず、只一人擢でて、儲位の一定を聞ずんば、宮殿を退かじと、日夜を分ぬ押奏聞、四十餘日が其間、またゝきもせず階下に坐し、魏々儼然たる粧ひは、たぐひ稀なる逗臣なり。既に其夜もほの〴〵と、明はなれたる雲井の御殿、御卽位の評議とて、第一の宮他戸の皇子、第二の宮山の部の親王、左右の褥につき給へば、つゞいて左大辨小野の兼實、右大辨紀の廣純、群臣諸卿綺羅星の、袖を連ねて參列あり。御階の下には舊臣和氣の前司濱成、嫡子藏人武國、其外禁庭守護の武士、威儀を正して相詰る。兼實卿仰出さるゝは、兼實「此度天皇御惱

によつて、御位譲あるべき所、兩宮の御諍ひ一決せざるに、百川の押奏一理有りといへ共、是をもかたよりて治定ならざれば、君宸襟を惱せ給ひ、彌御惱も治しがたし。去に依て前司濱成、汝は一たび官祿をさし上げ、今飛鳥の里に蟄居すれ共、老人といひ始終を存ぜし者なれば、兼て思ふ仔細もあらん、いづれか寶祚をつがせ給ふべき御器量や有る、憚なく申上げよ」とありければ、濱成謹んで、濱成「恐れながら此儀は御評議に及ばず、兄宮と申せ共他戸の皇子は、更衣の御腹に宿り給へば御次男も同然、山の部の親王は御若年と申せ共、后腹にて自然と傳はる天尊、此君に御卽位あらば、民萬歳を唱へ奉らん」と恐れも無げに言上有る。右大辨紀の廣純笏を上げ、廣純「ヤア嗚滸がましき一言、たとへ御腹はともあれ一の宮を差置き、二の宮へ御位とは、贔屓か但し賴れたか、山の部の親王は若年といひ、結構一遍の穩當、御卽位とは思ひもよらず、皇太子は他戸の皇子、諍ひに及ばず」と、云解せば濱成、濱成「イヤそりや無體の御評議、皇子は一の宮と申せ共、御心たけ〴〵しく、武勇を好ませ給へば君御心に叶はず、況や后腹を押退け、太子に立てる法や有る、御賢慮薄し」とやり込れば、此方の百川くわつとせき上げ、百川「ヤア舌長なる批判、母方を改るは愚臣のなす所、既に唐土の舜王は、賤しき鼓腰の子なれ共、堯王の讓を受け、始皇は呂不韋が胤なれ共、莊襄王の位をつぐ、其外禹王高祖の賤陋擧て數へ難し。なんと是でも母方の評議有るや否や」と、いはせも立ず、濱成「愚々〻、唐土は夷國賤しき民を天位と仰ぐ筋有らうが、日本は神國、天照神の御末ならで受つぎ給ふ理由なし。まつた后の御事は、天津兒屋根の命より、代々傳はる皇后、俗でいへば御本妻、上を學べば下々でも、本妻の子をさし置き妾腹につがす法はなし。其理を知らぬ汝にあらねど、忠臣顔に座をさらず、宮殿に突張るも合點々々。御邊が妻女は元來皇子を守育し乳母といひ、子息安珍と廣純卿の姪錦の前は勅諚の云號、蜘の巢程引ぱつた緣者、皇子に御位つがせたいも道理々々」と、いはせも立ず居丈高に成り、百川「ヤア案外なり濱成、緣に引れて道を忘れ、大切なる御卽位に贔たる評議をすべきか。今一言いうて見よ」と、面色筋をいら立れば、濱成「ホヽいはず共御邊が胸中、眼前に顯し見せん」と詰寄り〴〵諍ふ中、怒れる皇子の雷聲、皇子「ヤア默り居らう老ぼれめ、儕が麿に位をつがせぬ巧知るまいと思ふか、誠は神代より傳はる三種の寶の中、十握の寶劍紛失して、父帝の御物思ひ、夜の大殿に引籠らせ給ふ故、密に汝と兼實が心を合せ、紀州眞子の家に傳はつたる、雷鳴丸といふ劍を十握の代に立て、親王へ御卽位あれと奏聞し、家來葛城權頭に云付け、眞子新左衞門方へ取りに遣したる事、自然と知つたる皇子が賢德、忝くも三の寶は智仁勇の三德、其理にそむく汝等ゆゑ、寶劍は神上りし給ふと思ひしらぬか、なんと〴〵」と三人一所に席を打ち、言匂ればさしもの濱成はつと計、返答胸に

あぐみし體、嫡子藏人すゝみ出で、藏人「雷鳴丸の劍と申すは、鯉口をはなるゝ時、雷の音四方にひゞき、魍魎鬼神の障怪も叶はず、惣て一家の災を防ぐ名劍と傳聞き、帝御惱平愈の御爲に、權頭を使として、紀州眞子新左衞門方へ先達てつかはしたり。十握の寶劍紛失とはゆゝしき大事、皇子には又何として、委しく知召されうやらん、先此筋がいぶかしゝ、承らん」と詰かくれば、親王を始め兼實卿、百官百司も顏見合せ、奇異の思をなしにけり。鷲塚「ホ、其證據是に有り」としづ〳〵と立出る皇子の傅、鷲塚彈正國秀、あやしき死骸戸板にのせ、庭上に舁据させ、鷲塚「寶藏の守護職神祇官大江の友高、寶劍を奪はれし越度によつて生害すと、委細の書置明白たり」と、一通をさし上れば人々披見ある内に、藏人立寄り死骸を改め、藏人「コレサ鷲塚、此友高が腹の切樣、刀の血の付き樣迄、自身の業とは思はれず、胡亂な死骸を證據といふ、汝こそ詮議の手がかり、盜賊の筋、いへ聞かん」と反を打て立かゝれば、鷲塚「ヤア騷れそ藏人、御邊は現在此鷲塚が兄なれば、兼て胸中はよつく知られん。胡亂な物を大切なる證據に立てうか、切腹の吟味より、自筆の書置慥な證據を云ほぐす、御邊の心底呑込まぬ」藏人「ア、いふな〳〵、自筆やら贋物やら、友高が手跡ついに見ねば、死人に文言四も五もいらぬ、盜賊の筋聞う」鷲塚「ヤア親濱成殿さへ批判なきをいらざる御邊が出しやばり立ち、盜賊の筋聞うとは、此鷲塚を罪に落さん巧よな」藏人「云ふにや及ぶ、點合つた旁を一々に詮議する」「さういふ吾主を」「イヤ儕を」と兄弟柄に手をかけて、摺寄り〳〵龍虎と爭ふ詞戰ひ、皇子いらつて、皇子「ヤア鷲塚、汝が胸中くらしとは麿を疑ふ面當、兄弟とて容赦すな、そやつ急度糺明し、寶の有所詮議せよ、サア〳〵なんと」と三方論議、既に危く見えければ、兼實卿雙方を押しづめ、兼實「三軍の災は猶豫に生ず、彼等が諍ひに皇子の詞を添らるゝは大人氣なし、藏人は親王の雜掌、鷲塚は皇子の傅、兄弟といへども互に家を隔つれば、疑ふは理りながら、神寶を奪取る事一方ならぬ大望、所詮汝等が力に及ばざる謀計なれば、兩人共に疑念はない、盜賊外に有るは治定、草を分つて詮議すべし」と、理非明白なる一言に、各かへす詞もなく、詮議一途に極まれば、親王もやゝ御心を痛ましめ給ひ、親王「父帝御惱平愈の御爲に、春日明神へ兼て祈願をこめ置きしが、かゝる凶事の起りし事も、夜の大殿に引籠らせ給ひ、朝政怠らせ給ふ故、彌神慮をすゞしむるに若くはなし。麿は是より參籠せん、急いで用意有るべし」と、御座を立せ給ひければ、皇子は心に笑の眉、玉だれ深く入り給ふ。百川廣純したり顏、互に目と目を見合せて寬々と退出す。臣臣たらぬ勢ひに、誰か恐れはあらがねの、土も草木も君が代に、從ひ靡く時津風、吹傳へたる　三重比なれや。紀の路より、都に近き櫟の本、往來しげき道筋も、黃昏時の跡絕を待ち、供をもつれず只獨、右大辨廣純が郎等岩倉伴內、主の威光を鼻に

かけ、嚴にあゆむ向ふより、尾羽打枯せし浪人者、岩倉を見るよりも、編笠取て顏見合せ、浪人「エヱ伴内殿かお久しや」伴内「コレハ〳〵林專太夫殿、先御無事で」專太夫「貴公も堅固で、珍重々々、見れば供廻りもなく輕々敷體、何方へ御座るぞ」と、問はれて伴内邊を見まはし、伴内「サレバサレバ主人廣純公、貴殿をお賴なさるゝ一大事ある故、只今貴宅へ參る所、ちと急用なれば途中ながら」と小聲になり、伴内「此度帝御惱に付、紀州眞子新左衞門が家に傳はる、雷鳴丸といふ名劍を、御枕に置き給はど、御惱平愈あらんと濱成父子が計を以て、家來葛城權頭といふ者を眞子が元へ遣し、寶劍を所持して、則ち今日が歸國の日限、然るに他戸の皇子には、主人廣純公と御心を合され、かねて御謀反の御企あれば、彼の名劍を何とぞ奪取らん爲、先だつて味方の廻者を、權頭が供廻りに入置きたれば、此所を夜に入て通る手筈、貴殿に是を奪取て給はれとの御賴、首尾よく仕果せられなば望に任せ取立んと、則ち皇子の御墨付も持參せり」と、語る内より專太夫、生れ付たる强惡無道、打頷いて、專太夫「コレハ〳〵何事かと存じたれば、いと安き御賴、幸の此松生、最早暮るゝに間も有るまじ、爰に忍びて權頭を討止め名劍を奪取て御手に入れん、御心安く思召せ」と、事もなげに言ひければ、伴内「ホヽ、早速の領掌某も大慶、立歸つて此趣申さん」と、皇子よりの御墨付渡せば受取り、專太夫「御前はよろしく伴内殿賴存る」伴内「何が扨〳〵追付吉左右相待べし」と互の挨拶、約束かたき岩倉伴内、館をさして立歸る。跡見送つて專太夫、年來の望叶へりと、件の一通戴き〳〵懷中にしつかとをさめ、松影深く身を潛め、今や〳〵と待居たる。既に其日も暮過ぎて、廿日餘の宵闇の、山路を照す對の挑灯、葛城權頭兼政、劍の箱を自身に携へ、數多の下部前後にしたがひ、夜を日についで急ぎの道、紀の路も跡に遠ざかる、櫟の本にぞさしかゝる。權頭下部に向ひ、權頭「サテ〳〵其方達が道積が惡い故、まちつとに成て夜に入た、大切の物を所持したれば、汝等も跡先に心を配れ」と、氣を付けられ、結句怖がる下部が臆病、下部「イヽエ何にも出や致しませぬがどうやら俄に寒氣が來た」と、跡先見廻し胴震ひ。此方に忍ぶ專太夫折こそ好しとつゝと出で、前に進し對の挑灯一二の刀に切落せば、「そりやこそ出たは」と下部共、皆散り〴〵に逃去りける。思ひがけなき權頭、「コハ狼藉者何奴」といふ聲導に專太夫、物をもいはず切付れば、かつぱと轉ぶを起しも立ず、携へ持し劍の箱、とらんとすれば遣じと引く、機に箱を取落し、是はといふも眞暗がり、尋さがす權頭、油斷を窺ひ專太夫、刀振上げ切かくるを拔合してはつしと受止め、權頭「ヤア卑怯者、意趣あらば名乘かけ、なぜ尋常には討果さぬ、察する所盜賊な」と、刀を拂うて立上らんと、あせるも甲斐なき老人の、疊みかけて切付られ、あしらひ兼たる手負の受太刀、次第に弱る髑髏數ヶ所の深手、エヽ無念やといへ共こたへぬ相手

は無言、無残の切捨、向ふへ飛くる挑灯の、影に驚き専太夫、劔の箱を小脇にかい込み道引違へ馳かへる。下郎が報知に源藏兼連十八歳の角前髪、振亂しかけ來り、腰挑灯の火影に透せば、朱に伏したる父が體、見るよりはつと狂氣のごとく、早事きれしか悲しやと、見廻す骸は深疵ながら、いまだ止の跡はなし、せめての賴今一度呼生て見んものと、用意の氣付を口におし込み、聲をはかりに、源藏「親人樣、躬でござる、源藏が參りし」と、呼聲泣く聲通じけん、手負は息出で目を開き、「源藏なるか」といふに嬉しく、源藏「コレ〳〵氣を慥に持ち給へ」と、抱かゝゆれば權頭、權頭「エ無念な源藏、死ぬる命は惜まぬが、大切なる劔を奪はれたはいやい」源藏「ヤ、、、してそれは何者に」權頭「サア其名を知らぬが黄泉の障り」と、聞くより源藏、「エ、しなしたり、是は正しく欺討、イデ追駈て討とめん」と、駈出す向ふに落ちたる一通、取上て押開き、火影に透しつら〳〵と讀みも終らず、源藏「申し親人お悦びなされませ、敵の名が知れました」「ヤアどうして」と起直る、父が目先へ一通さし付け、權頭「寶劔を奪取られよと、賴人の名はなけれど、宛名は林專太夫」「アレ嬉しや」と只一聲、いふが此世の暇乞、笑ふが如く息たえたり。源藏は大聲上げ、源藏「エ、今一足早かりせば、斯くやみ〳〵とは討せじものを殘念な親人、去りながら、此一通が手に入るからは、やがて敵の首討て手向ませう」と、我を忘れて泣叫ぶ。件の一通尋ねんと引返す專太夫、伺ひ寄つて源藏が、持たる一通引たくれば、無念の拳に握つめ、中より二つに引裂いたり。南無三寶と專太夫、するりと拔いて切かくるを、さしつたりと拔合せ、丁ど受たる手練の早業、機に消る腰挑灯、闇はあやなし叶はじと、有合ふ松に驅のぼる。音を導に源藏が、振上る一念力、斜に切たる大木の、危き枝を飛下りて、飛ぶが如くに　三重驅り行く。神は人の敬ふによつて威を增せり、ましてや是はいや高き、當今第二の宮山の部の親王、御父帝の御惱平愈の祈とて、春日の社に參籠有り。供奉は參議藤原の百川の嫡子少將安珍、守護の武士には和氣の前司濱成が嫡子藏人武國、非常を戒しめ威儀を正し、事嚴重に備へ居る。爰に藤原の百川は、他戸の皇子の賴によつて、密に親王を奪取らんと、工む底意は深編笠、鳥居間近く歩みくる。此方の松の一村より、百川「暫し」と呼かけて、立出るは紀の廣純、ハツト驚き編笠取り近くさし寄り、百川「かねて申し談ぜし如く、兎角親王が在し〳〵ては、皇子御位に即き給ふ事叶はず、人知れず親王を奪取らんと存ずる所に、今日此社への參籠、則ち供奉は躬安珍と聟の藏人兩人なれば、よもや某が奪取るといふ思ひ懸は候まじ、彼等が油斷を窺ひ忍び入らんと、斯のごとく身をやつし參る所、廣純公にも是迄の御出は、何故なるぞ」と尋ぬれば、廣純「サレバ〳〵、兼て知らるゝ通り、兄道成遁世の節より、娘錦の前を伯父の某に賴むと有る故、引取て養ひおく所に、貴殿には何とやら

申惡い事ながら、錦の前と安珍は勅諚をもつて云號あれ共、皇子見ぬ戀にあこがれ、戀慕はせ給ふ故、道ならぬ事ながら姫を皇子へ差上げたく思ふ所に、幸ひ今日某が目を忍び、安珍を慕ひ此所へ來る由、婚禮もせぬ先に、忍び逢しを不義と云かけ、緣をきらせん爲」と、聞くより百川打點き、百川「それは何より安い事、躬安珍めは、日頃道立て吐して我が心に叶はず、一大事の砌なれば、是幸ひに錦の前と緣切てほつ拂はん、氣遣ひ有るな。此百川がひん丸めて呑込むからは、天皇をほつ下し親王を奪取て、一天四海を皇子の御手に入るゝはたつた今、とかく六ケ敷奴は濱成父子、折を窺ひ彼奴等も仕舞て取る合點」廣純「ホヽ、それ程に御邊の魂据れば、皇子は元より我等も大慶、またよき事は鷲塚彈正、兄弟なれ共藏人とは格別、かねて皇子の御心に叶ひ、金鐵の如く變ぜぬ根性、兄弟とて赦さぬ奴、揃ひも揃ひし皇子の味方、萬事手番上首尾上首尾。此上篤と諜し合す事有り、いざ此方へ」と打つれて、杉村深く立忍ぶ。斯共しらで戀衣、浮名も四方に橘の、道成卿の獨姫、錦の前と聞えしは、年もいざよふ月の顏、情の靨笑の眉、比類稀なる品形、父道成の逝世より、伯父廣純に養はれ、儘ならぬ身の憂戀に、窶るる世の習ひかや。お傍女中の其中に、氣も苅藻とて才發者、苅藻「申しお姫樣、向ふに見えるが親王樣の假御殿、戀君の安珍樣もあの幕の内にであろ、どうぞ首尾して逢せませう。顏見たが嬉しいとて、構へて此方からそゝるまいぞへ」錦の前「さればいなう、今日爰で安珍樣のお目にかかるも明神樣の引合せ、なんぼ嬉しいとて其辛抱は爲いぢやいの」と、戀の手筈の奥底も、柏口同士の媚し。和氣の藏人武國は御前を退き爰かしこ、勞をはらす幕の外、苅藻は目早く、苅藻「申し姫君、あれが藏人樣とて安珍樣のお妹聟、常々から大中好しぢやげな、何と彼方を賴んで、逢して貰ふぢや御座りますまいか」錦の前「ヲヽ、それ〳〵、幸ひのお方賴んで見や」と、差圖に苅藻は頓て立寄り、苅藻「申し藏人樣、ちとお賴申上たい事がござります、是へお供申たは、右大辨廣純公の姪君錦の前樣」藏人「ホウそりや聞くに及ばぬ知つてゐる、が先賴たいといふ筋は」と、問れて姫は面はゆげに、「申出すも恥かしながら、御存の通り安珍樣と自は勅諚の云號、まだ祝言もせぬ先に、マア大膽な者ぢやと思召うが、急に遇はねばならぬ事有るゆゑ、伯父樣の目を忍び爰迄慕ひ參りしなり。どうぞお前のお世話にて、ちよつと遇はして貰ひたさ、初對面から馴〻しう思召すも氣の毒ながら、何とぞお賴申ます」と、思入つて宣へば、藏人「ヲヽ、それは何より安い事、不義密通を取持つとは違ひ、勅諚の緣組なれば遇せるも安けれど、舅百川を始め、廣純公の心入呑込まぬ所有り、先づ今日はお歸り」と、云宥むれば錦の前、錦の前「互の爲を思召ての御意見を、聞入ぬではなけれ共、怖い伯父御の目を忍び、爰迄來ながら是がまあ、どう

遇はずに去なれうぞ、お顔なり共見せてたべ、賴む拜む」と苅藻と俱に袂にすがり賴むにぞ、岩木を結ばぬ藏人は、無情も云放さず、四邊を見廻し打點き、藏人「夫程思はるゝを達て留るも無得心、どうぞ首尾して逢せませうが、構へて密に顔見る計り、隙どつて人が見たら爲にならぬ、合點か」と、詞を和氣の藏人は、御假屋さして入りにけり。姫君嬉しげに、錦の前「藏人様が御座らずば、かうした首尾は出來まいもの、皆の衆も悅んでたも」姫共「ヲ、、姫君様の嬉しい筈、今日はお蔭で私等も目の正月、ほんに藏人様もよい殿御、先きから見とれて居た。此上に又安珍様、見たらてつきり目が腫う。お氣に入りの苅藻殿、獨殘して私等は、神主方で待ちませう。サア皆おぢや」と氣を通し、おつれてこそ急行く。藏人が知らせによつて立出る少將安珍、まだ青衿の身なれ共、親王社參の供奉として、衣紋美しく著なしたる、花奢風流の出立映、錦の前は飛立つ思、驅寄らんとし給ひしが、始めて交す言の葉に、身の上の憂さ辛さ、云ふも云はれずうぢ〳〵と、さし俯向いて在します。安珍心を察し給ひ、安珍「珍らしや錦の前、是迄慕ひ來り給うた、志は嬉しけれ共、既に伯父廣純公も合點の上、皇子へさし上んと有るよし、云號あればとて、我をしたはるゝは未練々々」錦の前「いへ〳〵何ほう未練でも、伯父様の合點でも、皇子様のお心に隨がふ事はわしやいや〳〵。是といふも父道成様が、此世に在さぬ故伯父様の爲たいがい、皇子様へ差上うの、安珍様とは緣切るのと、うるさい事の有る條、たとへ天上の榮花を極るとて、お前を除けて外の殿御に添ふ氣はない」苅藻「夫なら勅諚を背いても大事ないかへ」安珍「ホ、勅諚を背いてなり共、當時皇子の御心を宥るは親王の御爲、天下の爲」錦の前「スリヤどう有つても」安珍「くどいくどい」錦の前「ハア是非に及ぬ是迄」と、守刀をひらりと拔き、既に斯よと見えけるを、苅藻が縋止むる内、安珍はつと心付き、見捨て殺さば皇子の憤、彌〳〵募らん、慮し宥めて歸さんと、手を取て打笑み給ひ、安珍「ヲ、、左程切なる志何しに見捨てん様はなし、二世迄も變らじ」と、打て變りし情の詞、姫はあまりの嬉しさに、夢ではないか夢ならば、覺めな〳〵と現なく、互ひにひしと抱しめ、深き妹背となり給ふ。木陰に忍ぶ父百川、走出て二人を引分け、物をも言はず指添ぬいて安珍の、烏帽子髪根元よりふつつと切る。「こは狼藉」と振返れば父百川、はつと驚く姫諸共左右へ投のけはつたと眥付け、百川「ヤアいかに云號あれば迚、婚禮もせぬ先に忍び契るは不義徒、見さげ果たる兩人、躬勘當ぢや、嫁去つた」「エ、イ」と姫君興醒め顔、安珍ちつ共わるびれず、安珍「エ、情ない親人、度々御諫め申せ共承引なく、非道の皇子に與し給ひ、剩勅諚を背いて錦の前を離緣し、某が髪を切つて勘當とは、道ならぬ御仕方」と、いふを打消し杉村より、廣純「ヲヲ左程勅諚か重んずる安珍が、最前錦の前が口說きし時、勅諚を背いても皇子の心に從へと

は、どの安珍が云うたな」と、聲をかけて立出るは、右大辨紀の廣純、「マア〳〵伯父樣そこにどうして」と、姫の惚り安珍も、仰天あれば苅藻がさし出で、苅藻「イヤ廣純樣仰やんな、誰しも戀には意地の有る習ひ、ありや姫君樣のお心を引見る爲の戯事」と、言はせも立てず右大辨、廣純「マア默り居らう、姫に入性根する女郎め、隙くれた、立つてうせう。誰か有る、苅藻を親里へ追返せ」畏つたと下部共、「サア失せあがれ」と引立てれば、苅藻「申し姫君樣、心を盡した今日の首尾、忠は不忠と事顯れ、お前も私も此難儀、只今お別れ申します。どうぞ伯父御樣の御機嫌直し、安珍樣といく久しうお添遊せ、お名殘惜しや」と泣沈む。姫君も詮方なく、錦の前「今迄は其方を力、是から誰と問談合、便なき身を推量しや」と、互にすがり歎くにぞ、廣純「ヤア家來共、何をまだまだ、ソレぼつ立てよ、早く〳〵」とせり立られ、姫君は、錦の前「おさらば、もう往きやるか、隨分まめで」「御無事で」と、涙を殘し立歸る。廣純「イヤ何百川、御邊父子が得心にて、緣さへ切るれば皇子の御望は叶ふといふもの、出家さする迄には及ばぬ事を」百川「コハ廣純公の仰共覺えず、緣計切りたればとて女は輪廻汚く、たとひ皇子へ差上給ふ共、愛著の念止むまじ。さすれば御心に逆らう故、只今姫の目の前にて、躬を討放し畏へ共、世の人口も氣の毒、殊に彼めは熊野權現の巫子にて、あいだてなき母めが、三十三度の歩を運せられよと賴む、是幸ひ、非人坊主となし、憂目をさするがせめての腹癒。名も安珍の文字をすぐに、安珍と名乘り、陪堂を乞うて世を渡れ」と、聞くより姫は泣出し、錦の前「イヤ〳〵〳〵、たとひお姿はどの樣に變る共、思切る事はならぬ〳〵。不義の科は同じ事、自も髮切て、供に修行の道連」と、縋り給ふを右大辨、取て突退け、廣純「役にもたゝぬ世迷言聞たうない。ヤア〳〵廣純が家來乘物もて」はつと答て杉村より、立出る家來の大勢、乘物を舁据れば、此方も同じく、百川「ヤア〳〵百川が家來參れ、躬安珍を紀の路の堺へぼつ拂へ」はつと答へて立かゝる。「ナウ是しばし」と錦の前が寄り給ふを右大辨、引止めて乘物へ、乘せてぴつしやり戸を押閉て、廣純「家來共乘物やれ」百川「家來共安珍をぼつ立よ」と、中に二人が仁王立、何とせん方泣く〳〵も、別行く身ぞ哀なる。跡に二人は顏見合せ、百川「イヤなう廣純公、躬が事に隙どつて、親王を奪取る刻限延引いたしたれば、皇子にも嘸お待兼、貴公は是より御歸宅有つて、此趣を仰上られて下されまいか」廣純「いかにも〳〵、何方からなり共片付るが忠義なれば、錦の前をさし上たらば嘸御滿悅、貴殿は跡より親王を奪取て來れよ、後刻對面、先さらば」と、引別れて百川は、又杉村へ廣純は、館をさして歸りける。とは知らずして和氣の藏人、「親王のお召なり、安珍殿はおはせぬか」と、呼はり〳〵出來り、傍を見れ共影もなし。コハ訝しと立つたる所に、間近く聞ゆる數多の音、まつ先に岩倉伴内、他戸の皇

子の命に隨ひ、百川が遲參を苛ち、下部引つれ駈來り、伴内「コレ〳〵藏人、主人廣純、親王を饗應せんと、水屋の社に待受らる、御迎の爲來りし」と、しら〴〵しくも聲かけたり。藏人「イヤ其手は喰べぬ伴内、いつになき廣純の饗應、馳走を受けずと此方は還御を急がん、立歸つて宜くいへ」と、云捨て行くを伴内が、騙討に後より、はつしと切るを引ぱづし、扨こそ儕親王を、奪ひに來かと拔打に、はつし〳〵ちやう〳〵〳〵、戰ふ内に伴内は、二つに成つてぞ亡にける。殘る奴原餘さじと、拔きつれかゝるを無二無三、あたるを幸ひ切立れば、さしもの大勢こらへ兼、一度に逃るを勝に乘り、汚し返せと追うて行く。其際に百川人目を包む頰被、杉村傳ひに忍入り、親王を奪取り、小脇に掻込み駈出れば、すは狼藉と仕丁共、追駈け出るを事共せず、片手に提たる段半物、振廻し薙立てられ、近付く者もあらばこそ、爲濟したりと一散に、行方知らず落失ける。斯共知らず和氣の藏人、深入しては親王の御身の上も危しと、立かへつて御假屋を遙に見れば、南無三寶、幕も蔀も引亂し、親王は在しまさず。扨は敵の計略にて奪取りしか口惜や。いで追かけんと氣も狂亂、かけ出す向ふへ他戸の皇子、大勢引具し寄せかけ給ひ、皇子「コリヤ〳〵藏人、よくも麿が命に背き、伴内を殺したな。親王は何所に有る、渡せ〳〵」と有ければ、藏人「ヤア惚けまい、其方から忍びを入れ、奪取られた親王、たとひ金輪奈落へ隱し置き給ふ共、取かへさいで置かうか」と、齒噛をなせば扨は早、百川が奪取しと、思へど皇子はさあらぬ體、皇子「ヤア粗忽なり藏人、親王が見えねばとて、此皇子が知るべきか。儕こそよく知つらん、拷問して白狀さすか」藏人「イヤサ、いかに抗辨ひ給ふ共、御存じないとは云はせぬ〳〵。是非に御在所承らん」と、反を打つて詰よる所へ、皇子の傅鷲塚彈正遲れ馳に駈け來り、藏人を押し隔て、鷲塚「マア早まるまい兄者人、皇子御存なき上は、奪人は外にあらん。左程大切なる親王の、御在所も知れざるに、皇子へ敵對自滅がしたいか。相手がほしくば此鷲塚、兄弟とて用捨はせぬ、サアぬけ勝負」と罵しれば、藏人腹にする氣兼しが、待暫し、彼が詞も一理有り、此場で命を果さんより、身を全うして親王の、御行方を尋んと思ひ定めて、藏人「コリヤ鷲塚、兄に向つて舌長の雜言、赦されぬ奴なれ共、仔細有つて此場は引く。必其腮忘れなよ」鷲塚「ヲ、サ、主を奪はれた狼狽者、いらざる贅口きかんより、早く親王を尋出し、二度供奉し奉れ」藏人「ヲ、夫を汝に習はうか、土を穿つて尋出し、朝敵退治の御旗をあげん」皇子「ヤア存外なり藏人、諸卿は殘らず此皇子が味方に付けたれば、最早天位は心の儘、まだ此上にも生公卿原我に敵たふ者あらば、片端に駈立ぼつ立、禁獄さして憂目を見せ、麿は天子の位につかん」藏人「其時此藏人は官軍を引率し、皇子の卽位を妨げん」鷲塚「夫こそは鷲塚が、馳向つて追退け、武勇の譽を顯さん」と、挑む兄弟

いさめる皇子、「ヲヽ、頼もしゃ鷲塚、ゆゃしゃ藏人、早急げ」と、勇の足音谺に響きどう〳〵〳〵と踏みならすは、恰も八大跋難陀、緊那羅摩睺羅の勢ひやと、怖れぬ者こそなかりけれ。

第二

大慈大悲の御誓ひ、何所はあれど名も高き、壺坂寺の門前に、參り下向の息休め、煎茶あきなふ床几店、紅前垂の色に染み、花香に愛でる人心、思ひ〳〵に立寄つて、暫く息を繼煙管、疲を晴し通りける。跡に續きて門内より、一連なまめく旅姿、附々迄も當世の、はでな模様を紀の國や、室の郡に隠なき、眞子の庄司か祕藏娘、名も清姫とて透通る、玉にたとへし品形、年も二八の大振袖、誰にひかれん戀盛、娘自慢の母親が、大和廻りに打連れて、遊山片手の氣儘旅、茶みせのさきに立休らひ、母「ナウ娘、涼しさうな見世ではないか、今日は思はぬ道のはか、こんな所でちと休みや、皆も俱に」と腰かくれば、サアお茶煙草と持運ぶ、茶見世の噂が馳走振、噂「マアお前方は何方から何方へお通り遊す」母「イヤ我々は紀の國より、大和廻りを致す者」噂「ヲヽそんなら御存じはなされまい、高香山とて奥の院がございます、序に御見物なされいで、爰から纔十町計」と、咄半へ歩み來る、藤原の少將安珍は過し春日の一落より、父の勘氣を幸ひに、母の大願滿てん爲、熊野參詣三十三度の修驗者と樣をかへ、散切髪に輪袈裟をかけ、昔にかはる獨旅、殊勝にも又痛はしょ。暫し疲れを晴さんと、此方の床机に腰打かけ、休らひ給へば清姫は、跡の宿より跡先に見初めし戀の下紅葉、うつろふ色目をおし包み、清姫「申し母樣、其奥の院には五百羅漢の像も有り、結構な所ぢやげな。拜でお出なされぬか」母「ヲヽ、娘ようぞ氣が付いた。年寄は明日がしれぬ、そんなら今から參ろかい、其方もおぢや」と立上れば、清姫「イエ〳〵私も往てはお氣が張る、若者は重ても參られる、お前ばかり氣樂に拜んでお出遊せ。ソレ紅お供しや」母「イヤ〳〵二人ながら娘が傍に付いて居よ。俺が供にはコレ噂樣、案内がてら頼みたい」噂「ヲヽそれはお安い事、コレ〳〵お妙衆、跡の間に參りの衆が腰かけたら、お茶をさし出して下さりませ。イザお袋樣御出」と伴ひてこそ急ぎ行く。跡見送つて清姫は、飛立つ斗り思へ共、まだ初戀の恥しさ。如何云懸けたら可かろぞと、もぢ〳〵するを妙の白菊が引取て、白菊「コレサ修驗者樣、此姫君は私が御主人、手の筋が見てもらひたいと云兼てござります。御苦勞ながら頼みます」と、いふに安珍扨こそと、思へど態とさあらぬ體、安珍「コレ女中、見らるゝ通り新米山伏、手の筋は扨置いて、足の筋も見る術しらず。こりや許してもらひましよ」白菊「イエ〳〵喩にさへ怖いものは、山伏の樣なと云ひますれど、お前の樣な美しい山伏は又有るまい。なん

ほ下手でも大事ない、ナア姫君さうぢやないか」清姫「アノ紅の云やる事わいの、田舎育の不束な自が手の筋、何んの彼方が見て下さんしよ。もう頼まずと止にしや。見た所が都方のお方さうな、嘸お宿本には美しい御祕藏樣がござんしよ」と、うら問かけるも是幸ひ、戀を仕かける寄框、口に任せる出放題、安珍「ヲヽ、御推量の通り都の者、生拔の山伏でもござらぬ。稚馴染の妻に離れ、子細有つて此姿」と聞いて白菊、「ソレハまあ、生別か死別かへ」安珍「死別れ〳〵、しかも昨日が四十九日」白菊「サテハ左樣かお痛はしや、若い殿御の髪切て、廻國行脚し給ふは、御奇特と云はうか、心中と云はうか、嘸先き立たしやんしたお方とは、中が好かつたで有らうな」安珍「ヲヽよい段かいの、其有りしを思ひ出せば、天にあらば比翼の鳥、地にあらば連理の枝と云ひかはし、面白と云ふはいや早どうも口ではいはれぬ」白菊「ナニ其お方と添て居さんした間は、比翼連理と云交し、面白い事で有つたかへ、左樣ぢやあろ〳〵。迚の事に其初戀より別さんした時迄の次第、聞いておいたら後學にも成りそな事、幸ひお袋樣も爰にでなければ、互に旅の憂晴し、搔摘んでお咄し」とせがみ立つれば、安珍「イヤもうそれは此方から望む所、咄して成り共日頃の憂が忘れたい。さりながら外の事とは違ひ、まんざら聲高にもいはれぬ事、という て其床机へ腰掛けるも、どうやら人目が」白菊「大事ない〳〵、其處から咄してはあの茶釜の煮

える音で一つも耳へいらぬ。サア〳〵爰へ」と招きて、「然らば御免」と腰打かけ、安珍「いかさま懺悔に罪を亡せぢや、さらば咄を始めうか」白菊「さらば咄を聞かうか」と、簪ぬいて耳の垢、渫てこそは鎭まりける。安珍「先其初戀の發端といふは、去年の春の彌生半、吉野の山の花盛、柳櫻をこき交て、都ぞ春の錦と見ゆる幕の數、爰では琴の爪音の、彼處では三味線の鼓のと、歌ふか舞か面白さ如何も云れず、此處彼處と眺る所に、とある幕の内より出でし、二八斗の娘の顏、見初たが緣のはじめ、目元なら口元なら、思ひ出せばよう似た顏も有る物」と、話しながらに清姫を尻目にかけて思はせ振、妙共も氣をとられ、段々うまう成かゝると、現ぬかして摺寄ば、安珍「其時我等も娘の顏を、餘處ながらぢつと斯う見る樣で、又見ぬ樣で、互に心は通へども」白菊「アノ近付きでもないのにかへ」安珍「サア何が頻に可愛う成て來て、飛立つ如く思へ共、其日は人目の關をこえ兼て、立歸らんとせし所に、娘はやがて懷より、矢立短冊取出し、さら〳〵と一首を書付け、妙にもたせ密に我に送りし嬉しさ、取上げて開き見れば、其假名の美しさ」白菊「能書で有たかへ」安珍「能書しかも行成樣の散し書。サテ其歌は、見ずもあらず、見ずもあらず、見もせぬ人の戀しくば、ハア下の句は何んとやらとんと忘れた」腰元「ヲヽ、辛氣、大事の所を忘れて」と、妙が刎怪顏、清姫ふつと思ひ出し、清姫「申し其跡は、あやなく今日や眺め暮さんといふ下

の句ではなかつたかへ」安珍「ホンニそれぢや〳〵」腰元「シテ〳〵跡はどうさんした」安珍「其古歌の心の嬉しさに、シテ返事せんと思ふ内、早日もくるゝに心せき、彼娘も下部下婢に引立てられ、是非なくかへる後影、見るに堪へかね小者を走せ、名所を問せたれば」腰元「いうたかへ〳〵」安珍「イヤいはぬ〳〵、只北山里に結び搖たる柴の庵とのみ、心惜しと思へ共、其日は互に別れし」と、聞いて妙力を落し、腰元「ヱヽ、残多い咄ぢや」と、清姫諸共投首すれば、安珍「コレ滅多に力を落すまい、それから男の有らう事か、此壺坂の觀音へ、七日七夜の願參り、奇驗なお告が」腰元「有つたかへ〳〵」安珍「汝彼娘に遇んと思はど、供をも連ず只獨、雨のふる夜も風の夜も、徒歩や跣足で通ひなば、深き妹脊と成るべしと、聞くより嬉しく我家に歸り、夜更け人靜りて密に館を忍び出で、北山里に尋行き、枝折戸ほと〳〵打叩けば、彼娘出向ひ、扨も遲て待兼ねしと、此手を取て引立てられた其時は、身柱元から」腰元「ぞつ〳〵と爲たかへ」安珍「ヲヽ、何が寒う成り暑う成り、夢の心地に覺えしを、イヤ〳〵此處等が大事と辛抱し、ナンノ待兼たとへ、嘘斗と顏を背けりや、ヱヽ、何ぢやの、人にばつかり物思はせ、遲う來ながら胴慾と取付く袂をふり切て、罷歸ると立上るを、イヤ去なす事はならぬ、イヤ去んで見しよ、去なすまいが如何さんす」と、仕方咄に聞入る清姫妙も、相撲を見物するごとく、肩を捻り身を縅ば、安珍「イヤど

う有ても去ぬる〳〵。イヤ〳〵ならぬとしがみ付き、離さぬ所を振切て」と、咄の拍子に清姫は、床机の上より眞逆、こけ落つるを妙か、周章かけ寄り抱起せど、正氣つかねば、腰元「コレお姫様、御姫様、ヤレお山伏水を〳〵」おつと心得杓おつ取り、茶の水汲でさし付くれど、齒を喰ひ締り通らねば、詮方なくて安珍は、自身に含んで口から口、ずつと通つて人心地、腰元「さつても氣轉のきいたお方、お氣が付たぞ嬉しや〳〵。コレ申し清姫様、氣をはつたりと持ち給へ」と呼立つれば漸に、マアと答へて目を開き、清姫「白菊紅か、今自は床机の上から落て目が舞たの、何やらひいやりと咽喉を通ると思うたれば氣が付いた、其方衆が水でもくれたであろ」腰元「イヱ〳〵私等は狼狽て呼生るばつかり、あのお山伏が水を上げうとなさつても、齒を噛しめてござる故、彼方の口からお前の口へ」清姫「マア自が齒を噛みしめて居たゆゑに、口から口へホヽヽヽおゝ嬉し。そんなら大事の命の親、忝いといひたいが、もと此身を殺さうとなされたも彼方故、いつそ今ので死んだらよいに、生きて結句思ひの種、やつぱり死なせて給いの」と、現なければ妙共、腰元「お姫様の無理計り、私等ぢやとて如何せうぞ。コレお山伏、お前が御療治なされし故、却つて姫君の機嫌が損ねた。元の様にしてお返し、殺して御機嫌直して」と、無理からしかける仲人口、安珍「それは無體と逃廻るを、白菊、紅てん手に押伏せ、清姫の傍へ推遣押付れば、元より互に戀の淵、深き

戀路の始めなる。斯共しらず母親は、奥の院より立歸り、母「ナウ娘、嘸待ち兼たで有らうの」と、いへ共清姫應答なく、さし俯向いてうつかりは、瘧ふるひの大熱の、冷めたる跡のごとくなり。白菊が笑止がり、白菊「お姫様は如何した事やら、お腹が痛んで難儀遊ばし、あのお山伏のいかいお世話になされし」と、聞くより母は悔し、母「それはまあ何方かは存ませぬが、お世話の段忝うござります」と、一禮述て、母「コレ娘、もう痛は止つたか」清姫「アイお氣遣ひなされな。もう常の通りに成りました。マア結構なお藥を」とぢつと見やりし目の内へ、安珍も飛入る心地、母は何の氣もつかず、母「お山伏は清姫が命の親、是を御縁にお知人に成りませう。お國本は何處ぞ」と、いと懇に尋ぬれば、安珍「其は都の者、ちと願望有つて熊野參詣、三十三度を致すもの」母「それは幸我我は則ち紀州室の郡の者、重てからの御參詣にはお宿申しましよ。眞子の庄司が後家娘」と、打込じたる折こそあれ、里に名うての嗤者、鷺の四郎八、烏の九郎助、茶店の先に立ちはだかり、四郎九郎「コレ〳〵旅の女中、卒爾な事ぢやがあの娘御が貰たい」母「エ、イ」四郎、九郎「いや別に惡い所へやるのぢやない、忝くも他戸の皇子様より、何者によらずみめよき女は整へて差上げよ、褒美は望次第との御上意」母「マアそれはまあ思ひがけもない事、なんぼ皇子様の云付でも、たつた獨の祕藏娘、滅多に渡す事は成りませぬ」と、口にはいへど當惑の、色目を悟つて安珍も、

狼藉せば見遁しならずと、身繕ひして待ち給へば、四郎、九郎「ハアテ合點の惡いお袋、品によつたら此方衆も浮み上る事、四の五のなしに下あれ」と、せがみ立つれば母ははつと心付き、「どう仰つても成りませぬ」四郎、九郎「ソリヤなぜに」母「イヤあの娘には夫がある」清姫「エ、イ母様そりや何を」母「ハアテ其方にはあれ、ノあれ、あの山伏殿といふ夫が有るによつて、皇子様へさし上る事はならぬぢやないか。ほんにそれ〳〵、コレ申しお前も聟は俺ぢやと、つい云たがよいはいな」安珍「サアさういふは安けれど、彼等に一盃喰すつもり、サア皆汗が入つたらそろ〳〵先きへ往たがよかろ」と目眴で知せば母娘、姚共も頷き合ひ、足早にこそ急き行く。エ、一盃くはせた腹立やと、九郎助やがて安珍の胸倉に取かゝる、其間に四郎八茶店なる手桶引さげ、聟殿祝ふと投掛るを、安珍得たりと身をかはせば、先きに進みし九郎助が、ざんぶりいはされ濡烏、コリヤ何しをると飛びかゝる、仲間喧嘩の摑合、跡に見捨てて　三重急ぎけり。歸り行く月日計りは變れ共、變らぬは世の憂節や、竹の格子に井の字窓、荒し家居を假初に、宅替してまだ、昨日今日、浪浪の身の寄る年も、六十に鳴見郷右衛門が、娘相手に内繕ひ、走据たり棚釣たり、打つたり舞たり垂歪、無頂頽面直しても　足はぬ物で間に合す、素人細工ぞ不束なる。郷右衛門ほつと粉盡し、郷右「コリヤ苅藻、庭廻りの勝手がよくば、まあ是切りで置うぢやないか、人傭へば錢が出る、

それ出すまいと蹠いた代に、肩も腕もめり〳〵むり〳〵。ヤ、むり〳〵の次手に無理な男は、今迄ゐた在所の家主、浪人を見立てて半年づつ家賃を先取、ない物寄越に困つた故、道具屋の興市の世話で此奈良の町へ宿かへたりや、まあ此難儀を助かつたが、いかに貧乏すればとて、よい年して佛壇一つもたず、大事の祖師様を押入へ打込んで古蒲團と相住させまするは、いかにしても勿體ない。殊に今日は七月十三日、祖師様の日でも有り、聖靈祭がそこ〳〵になと仕たい。幸ひ興市の所に、よい頃な佛壇昨日ちよつと見て置た。俺あれが欲うて〳〵、如何も斯も堪まらぬ」　苅藻「サアそりや私もさう思へど、其銀の才覺が」　郷右「イヤならぬ所をほつ〳〵と、いらぬ物賣た銀が四拾目餘り、あれでどうぞ賣てくれりやよいが」　苅藻「ハテそれこそ興市殿にまあ談合して見さしやんせ」　郷右「ホンニそれ〳〵好う云うてくれたな、善は急げぢやちよつと往て來う。其間に其邊掃いておけ」　苅藻「つい居てござんせ」「合點」と、銀懐に押込んで、氣もわく雪駄はく拍子、轉たか打つたかあいたしこ、　苅藻「爺さん何んとさしやんした」　郷右「なんとは是見よ、古木の片に釘が有て親指をぐさと云はした」　苅藻「ドレ〳〵ほんに血塗ちんがい、なう情なや」と血止に煙草、付けるもはら〳〵目に涙、　郷右「ハテこな者はめろ〳〵と、申の年でもないが血を見ると泣程にの、なんの是式、俺痛うも痒もない。たとひ身打をきられて死んでも齢もない此親仁、

ちつ共惜うはおぢやらぬ」と、氣輕にいうて勇行く、後の哀と成りぬらん。娘は跡を取片付け、掃つ拭うつ急かしき、表へ息急馳け來る女、ずつとはいつて顔見合せ、　女「マアそなたは苅藻ぢやないか」　苅藻「コレハ〳〵錦の前様、徒歩や跣足で只お獨、何としてお出なされた、様子はどうぢや氣遣な」と、問れて涙にくれながら、　錦の前「知りやる通り安珍様に引別れ、悲しき中に伯父様が、是非自を皇子様へさしあげんと強意見、居るに居られず館を脱出で、何處に成共身を忍び、殿御の行方を尋ねん物と思ふから、其方の内とは夢にもしらず駈込だのも不思議の縁、追手の者が來ぬ内に、早う影を隠してたも、賴む〳〵」と氣を苛ち、そどろ顫うて在します。　苅藻「ヲヽ、それなればお道理〳〵、私もお前と安珍様の媒したが誤とて、隙の出るは此方も勝手、胴慾な伯父様に、ふツつりと飽珍らせ、今親の内へ戻つて居るこそ幸、命にかけてお隠匿申しませう、というてから何處に置きます所が」「ヲヽ、有るぞ〳〵、只一つの車長持、御窮屈に有らう共、まあ此内へ」と押開き忍ばす、内もうろ〳〵あぶ〳〵、あつた蓋して車鎖、手早にぴんと折こそあれ、いそ〳〵歸る郷右衛門、　郷右「娘悦んでくれ買たぞ〳〵、直打、安て結構な佛壇、今爰へ持つてくる筈、一時も早う尊聖殿へ果物が進ぜたい。ソレ暖簾にする素麺瓜茄子、何やかや取揃へて買うておぢや。今日の日が外れてはならぬ、早う〳〵」とせがまれて、往ね

ばならず跡も氣遣、不承々々の舌鼓、丹波笊に袖おほひ、足早にこそ出でて行く。エイ〳〵〳〵さつ〳〵さ、「サア〳〵妥ぢや」と佛壇もたせ、によつとはひる道具屋與市、與市「ホウ親仁様早かつたの。扨今もいふ通り鐚ひらなか、利とらず元直で寄越が六拾目、受取つた銀は四拾壹匁五分、引殘つて拾八匁五分の足らず。其代に何やら寄越道具が有るとは、どんな物か。マア見よかい」郷右「ヲヽ見せうとも〳〵、といつて替つた物でもない、それ見て下され」與市「それとは何を」郷右「ハテ其車長持、見掛は汚穢いやうなれど、昔物で第一木がよい、鐵物の見事さ、中の様子もとつくりと、ハアこりや猪口才な、娘が錠をおろして置いた。イヤ見せる迄もない、中に微塵も疵はござらぬ」與市「成程々々、至極丈夫な長持、マアなんぼ程なら賣らッつしやる」郷右「ハテそりや此方の目一ぱい」與市「付けませうか、ハヽアこりや丁ど拾八匁五分には高過ぎる」郷右「是は扨、おりやもつとせうと思うた、もう貳匁夘賞はれぬか」與市「けもない事、まだ五分たりませぬが」郷右「是非に及ばぬ何とせう、それでさつぱり濟して貰を」與市「ハテよござるわいの、念頃合ひに五分や七分、きつしにもいはれまい。そんなら是で算用なし」さらり〳〵と手を打つて、下人に長持引ずらせ、其内御座れ好う御座た、さらば〳〵と立歸る。郷右「ヤレ〳〵嬉しや、久振で祖師様佛壇へ直しましよ」と、押入より取出し、佛具とり〳〵香盛つて、題目唱ふる時こそあれ、娘がわくせき供物、買調へて戻るやいな、刈藻「コレ父様、爰に有つた長持は、何方へ直して置かしやんした」と、けどん顔見て親仁はうぢ〳〵、郷右「サアさう云はうと思うた。いつせき一つの入物なれど、佛壇の銀がたらぬ故、其代りにやつてのけた」刈藻「エヽ、そりや道具屋の與市殿へか」郷右「おうさ〳〵」刈藻「テモひよんな事さしやんした。コレあの長持の中にはな」郷右「ハテ何んにも無いてい」郷右「イヤお前は知らしやんすまいが、私が今迄勤て居たお館の姫君が、様子あつて家出なされ、追手がかゝる隱まうてくれと仰つたゆゑ、今の長持の中へ」郷右「ヤヽヽそりや大切な事、様子は知らねど其方を見込んで頼れた姫君、外へやつては一分立つまい。というて價の銀はなし、結句おれが與市に逢うては、四の五のいうて戻すまい。其方が往て云はうには、留守の間にやらしやつた長持は、私が大事の入物なれば、賣る事はならぬ。足らずの銀は近い内寄越さう程に、まあ戻して下されと品ようういうて取戻せ。與市が中を見ぬ内にちやつと〳〵」といふを聞捨て氣を揉み上げ、足も取次に駈り行く。郷右「ハレ忙しいに取まぜて、思ひもよらぬ難儀が出來た」と、吃ながら果物を、佛に供へ水手向け、唯我量無量と唱ふる内、如來寺の弟子他力坊、十方旦那を棚經廻り、表に立つて手帳を繰出し、ぬつと入つて親仁を押退け、持佛に向ひ大呪を唱へ、他力坊「光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨、なまいだ

まないだ〳〵なまいだ佛なまいだ」郷右「ア、是々、經宗の内へきて、念佛申て叩鉦、ぐわんぐわんと何ぢやぞいの」他力坊「願以此功德」郷右「コリヤきやうとい」他力坊「きやうとう施一切、同發菩提心」郷右「コレ坊様、爰は法華宗でござるはいの」他力坊「マアほんにさうぢや、デモ此内は此方の旦那に極つたが、どうやら御亭主の顔が、ヤアこなたは兄貴らやないか。俺や他力坊でござるわいの」郷右「マアどれ〳〵、成程弟坊ぢや。ヤレ〳〵久しや懐や、二十年も會はぬ間に老くろしうなつたで、とんと顔を見違へた」他力坊「イヤおれより此方の年がよつて、前の形はござらぬ」郷右「ヲヽさうで有らう〳〵、貧苦にせまれば一倍皺に皺のよる年、今日が日も知らねば、其方が事を明くれ案じて逢ひたかつたに、好う來てくれた。シテ今は何處にゐるぞ」他力坊「何處というたら前の如來寺に勤てゐますが、此方は何時爰へござつた」郷右「サレバ漸昨日宿替」他力坊「エヽそれでよめた。此家に是迄居た人は林專太夫というて、此方の旦那、表の家札かやつぱり有るゆゑ、麁相しました」郷右「イヤそりや此方にまくらぬが大きな無念」他力坊「イヤ其無念と麁相が合うたで、兄弟もべつたりあうて嬉しい。扨姪の苅藻は息才で居ますか」郷右「サア娘も今は奉公引いて内にゐるが、様子有つて主人の姫君が家出なされ、隱し置いた長持を、留守の間に道具屋へ賣つた故、それ取返しに今出ていた　追付け戻らう逢うて去にや」と、積る咄を遣羽子に、突掛とつ掛稍時うつる折こそあれ、はんらや合羽に三度笠、旅人と思しき侍が、うそ〳〵邊を見廻して、用有りげに立つたりしが、笠取捨て身繕ひ、ずつと入つて、侍「御亭主に御意得たい」と、聲かけられて郷右衛門、郷右「此家の主は某、何方より御出」と、云はせも立てず、「親の敵、遁さぬ」と、引拔いて郷右衛門が、弓手の髀ずつぱと切れば、郷右「ヤレ粗忽して後悔すな、敵と呼ばるゝ覺はない」侍「ヤア覺ないとは卑怯者」と、無二無三に切付け〳〵、蹌ふ所を疊み掛け、諸脛はつしと薙倒せば、「コリヤ待て〳〵」と他力坊、取付く腕先引摑み、戸口を打こし五六間、大道遙かに取つて投げ、ふりかへれば郷右衛門、數ヶ所の痛手老の身の、うんと計りに息絶ゆれば、ハア〳〵はつと驅寄て髻引上げ侍「是は扨、大切なる劒の在所詮議せんと思ふ間に、早斃ばつたる殘念や」と、死骸にどつかと打跨り、親の敵思ひしれと、留の刀一抉、突立ち上れば他力坊、手並に懲て怖々ながら、大事の所と氣を取直し、そつと寄つて、他力坊「コレサ前髪、此親仁は愚僧が兄、生得正直慈悲深く、無益の殺生せぬ者なれば、滅多に人を切りやせまい。其上今の一言、敵と呼るゝ覺はないと、いうたを無體に切りちやゝくり、留迄好うぐしやとやつたなア、粗忽で有らう、人違とは思へども、腕力が強さに困つて居た。マア其方何者、何の遺恨で親を討れた、慥に兄を敵といふ、證據が有るか。それ見たい、仔細

が聞きたい、サアなんと」と、顫ひ〳〵も腕捲り、弱味を見せずちつく〳〵、詰寄り〳〵振廻す、坊主頭ぞ健氣なり。侍「ホヽ、其仔細は一天下に隱なき敵討、某は葛城源藏兼連といふ者、去年の秋當國櫟の本に於て、我が親權頭を討つて、雷鳴丸の劒を奪取つたる林專太夫、某が斯く付狙ふともしらず、表の家札に名を記したは天命」と、半分聞いて、他力坊「そりやこそ大きな人違。コレ其專太夫が事は、疾く宿替したる由、漸〳〵昨日此所へ、家移りした我兄は、鳴見郷右衞門といふ者、察する所專太夫、儕が科を人に讓らんため、家札を殘し置いたと見えたり。それを其儘置いたも誤、討つた此方は猶誤り、誤といふ誤によい誤りはなけれども、是はあんまり慘しい、取返のならぬ誤り、ヱヽ是非もなや殘念や」と、目を摺こする淚顏、色もかはつて靑柿が、熟柿弔ふ如くなり。源藏大きに仰天し、源藏「何、此人は鄕右衞門、專太夫ではなかりしか、南無三寶しなしたり、ハヽヽヽヽ」はつと我れながら、あまり惘れて詞も出ず、たゞ茫然と立ちたる所へ、又間違て姫君を、道々尋ぬる娘の苅藻、駈戻つて、苅藻「アこりや父樣は誰が切つた、何者の所爲ぞ」と、狂氣のごとくうろ〳〵淚、死骸にひしと抱き付き、泣くより外の事ぞなき。他力坊「ホヽ、思ひがけなき父が最後、驚きは尤々、久しう逢はねば見忘れつらん、愚僧は叔父の他力坊、家札を證據に敵と心得、兄鄕右衞門を手にかけしは、ソレ其處に居る源藏」と、聞くよりはつと身繕ひ、苅藻「ヱヽ腑甲斐ない叔父樣、いかに出家の身なればとて、それ程樣子を知りながら、兄の敵を傍に置き、なぜきよろりとして居さしやんす。人違でも麁相でも、目の前の親の敵、一討延ばせば一時の不孝、女でこそ有らうけれ、物の見事に討て見せう切つて見せう。サア尋常に勝負しや」と、父が刀をおつ取つて、早打かけんと立ちかゝれば、他力坊「チツト助太刀他力坊、氣遣するな」と尻引きからげ、有合ふ擂粉木しやにかまへ、後に突張坊主の腕立、危くも又潔し。ちつ共騷ず源藏兼連、大小摑んでからりと投出し、源藏「コレ此通り手向ひせぬ、相手にならぬ」と云はせも立てず、苅藻「ソリヤ何んの眞似。此期に及んで手向ひせぬは、ムヽ聞えた、迚も我々に叶ふまじと、命惜さの降參か、詫ても泣いても遁しやせぬ」他力坊「ぐづかはせずと、サアきり〳〵とやりかけうてい」源藏「ハヽヽヽ、事をかしや腹の皮、生付いて此源藏、力量人に勝れたれば、汝等が五人七人、片腕にも足らね共、誠の敵專太夫を討ざれば、父が孝養にもならず、誰が身の上も敵を討ち度き志は同じ事、いかに我身を遁れんとて、今兩人を返討にせば、情なきとや云はん、武士たる者の本意にあらず、爰が互の了簡づく、たとへば敵專太夫、逃隱るゝ其天地の間、足手限りに探し出し、本望遂げなば其後は、旁に此源藏、潔く討たるべし。それ迄何卒此勝負、さし延ばして給はらば、雙方共に本意を達し、互に亡父の手向とならし。

ん。此詞僞あらば諸神諸佛の御罰を受け、二度刀を手に取るまじ。了簡あつて給はれ」と詞を盡し理を盡し、わりなく賴むぞ誠なる。理聞いて他力坊、實尤と得心顏、いつかな聞かぬ苅藻が若氣、苅藻「コレ誓言立聞きたうない。よし其詞が誠にもせよ、專太夫とやらいふ敵に、何時廻り遭うやら、べん〳〵だらりと當處も切もない穿鑿、一寸の間も待たれぬ〳〵。討ち討たるゝは互の運づく、サア其方から切りかけるか、此方から討たうか。ヲヽ、何と勝負々々」と、ふり上げる刀をしつかと他力坊、腕首返し拠取つて、他力坊「コリヤまて苅藻早まるな。エヽいかに女なればとて、理非明らかなる源藏の詞、聞入れねば今返討、それを是非にと身を跪くは、鼠が猫に楯突く道理、近年の無分別、但むざ〳〵犬死して、父鄕右衞門が手向に成るか、手柄に成るか、却つて修羅の苦患の上塗、不孝の罪科恐しうは思はぬか。其上最前樣子をきけば、隱い置いたる主人の姫君、間違つて道具屋へ渡せし由、そりや如何した」と、問はれてはつと心付き、苅藻「なう情なや其姫君は、何處の者やら長持共に、買うて去んだと亭主が咄、それから戻る道すがら、彼方此方と尋ねても、何處へ往たやら行方が知れぬ。ひよんな事しました」と、涙ぐめば、他力坊「ソレ〳〵〳〵其樣な大事を抱へ、此場でやみ〳〵切殺され、どの命で姫君を取返へす。其方も武士の娘でないか、義を立て道を辨へて、源藏の詞に隨ひ、時節を待つて專太夫に廻合ひ、潔く本望遂げさせ、其上で源藏を討ち姫君を尋出す、性根はないか狼狽者。エヽ緩しや、齒痒うてならぬはい。なぜ其樣に愚癡なぞ」と或ひは叱り或ひは宥め、息筋張つて呑込ます、理窟理解のたら〳〵〳〵。汗を流して制するにぞ、苅藻は漸〳〵氣を取直し、苅藻「合點しました伯父樣、成程仰に隨うて、敵打は延しませう。コレ〳〵源藏樣、言ふに及ばぬ事ながら、契約違へずいつ〳〵でも、專太夫を討ち給はゞ、早速知らせて下さりませ、その便りを聞く迄私は爰に獨住。おいとしや父樣が、思ひ寄らぬ此災難、今日を限りに死なしやんせう端か、俄に佛壇ほしがつて、足らはぬ銀でわくせきと、行さまの怪我といひ、氣にかゝる物のいひ樣、斬られて死んでも大事ないの、今日の日が外れてはならぬのと、聖靈祭の供物、手向の水も香花も、我身の上とは知らずして、氣を苛だてて世話やいて、果は憂目に新尊聖、祭らるゝ身とならしやんしたは、味氣ない共悲しいとも、あるにあられぬ我が思ひ、推量あつて今一聲、娘よ子よと呼んで給べ。父樣なう」と亡骸に、すがりつき押動かし、涙の限り聲限り、泣き口說くこそ道理なれ。當前の理に他力坊、張詰めし氣も打萎れ、他力坊「ヲヽ、悲しいは尤々、我迚も廿年來逢はざる兄、今日思はずも間違つて、對面したも血筋の緣、兄貴ぢやないか、他力坊でござるというたりや、年寄つて今日が日も知らず、遇ひたかつたに好う來てくれたと、地獄で地藏見た樣に、

取付いて悦ばしやつたを見る樣な。死ぬる者は人懷しく、知音近付まで尋ね暴ふといふに、まして兄弟遇ひたうなうて何とせう。人は知らねど自然天然、急げ〳〵と心せく、冥土の旅の暇乞、語るも問ふも今生の、別れで有つたか悲しや」と、我を忘れて大聲上げ、わつと叫べば源藏も、思ひを察して貰ひ泣、防かねてぞ見えけるが、やゝあつて氣色を正し、源藏「御歎きは去る事ながら、時刻うつさば却て亡者の爲にもならず、某とても御了簡の上、長居は無益。一刻も早く敵の行方尋ねたし、お暇申す」と立出づる。他力坊「待つたまづ暫く、見らるゝ通り我は出家、殊に師匠に仕ゆれば、何事も心に任せず、便なき此女、敵討の賀否を聞くまで、安閑と待居る心も定かなるまじ。日本國を尋廻る敵の次手、おのづから姫君の行方も知れまい物でなし、面倒ながら行くさきぐ〳〵、召つれて給はらば、彼も我も彌〳〵安堵。偏に頼み存ずる」と、餘儀なき詞に打點き、源藏「それこそ此方に望む處、迯隱せぬ此源藏、行住坐臥にも心を付け、附け添ひ給はど旁の、疑念も有るまじ其も、心にかゝる雲もなく、敵を尋ね行先は、東に奥州外が濱、南は紀伊の三熊野山、西は九州壹岐對馬、北は越後の荒海まで、千里も飛び、萬里も追駈け追廻り、速に討ちおほせ、父の尊靈に手向なば、其場を去らず首さし延へ、本望遂げさせ申すべし。いざ打立たれよ苅藻殿」他力坊「チ、潔し頼もしゝ。それ〳〵用意」「合點」と、小褄きりゝと帶引締め、刀を流石武士の、娘質氣も立派なる、取形凛々しく引そうて、苅藻「伯父樣さらば。諸事萬事跡はお前を頼みます、隨分お健康で」他力坊「そつちも無事で跡は氣遣なき人の、菩提を弔ふは出家の役、我は淨土、彼は法花、兄弟宗旨は變れども、八宗九宗の心をよめば、峯は雪、麓は雹、里は雨、解れば同じ谷川の、水溜らねば宿らず去らぬ眞如の月、迷はぬ道に引攝せん」と、死骸に合掌手向の水、揭ぐる火影は則ち光明、十方世界の雲晴れて、普くてらす本願力、誓に任す他力坊が、教に別れ出でて行く。

第三

鞠場の四方は花楓、柳腰なる女房の、ハリヤ恐れの聲するは、沓は離れず冠を、遁れて隱居飛鳥の里、和氣の前司淺成卿の隱家も、お留守の内の鞠遊び、蹴ると踏むとで笑ふやら、「好う搦うて」と譽るやら、姉の八重垣妹も、同じ嫁菜の齒を染めて、肩で流して妙へ、渡せば横に蹴飛ばかす、附々までも鞠稽古、かゝりの内の色めくは、ませた樣でも好もしゝ。熊野より、下向の道の戀風に、揉まれて頭巾篠懸も、絹になしたる綾の袈裟、首に纏うて安珍は、齋料乞うて通りしが、ふつと見上げて、安珍「ハア、是はたしか濱成の隱居屋敷、舅御に仕へ、妹どもはま

めで居るか。久しう逢ぬが何としたぞ」と、思ひ廻する折からに、かゞりを越て外れる鞠、塀の外面へ飛來れば、安珍「コリヤよき物を下されし」と、安珍やがてひろふ内、妙ともが取りに出て、腰元「惡洒落な山伏さん、戻して〳〵、もらかして」と、縋れば拂ひ一曲と、昔忘れず蹴る鞠は、草鞋脱とて捨られず。内に待かね妹の檜垣、物見に上つて表の方。見越す外面に鞠蹴るは、ありや慥兄様、檜垣「安珍様ではないかいな」と、いふに八重垣かけ上り、八重垣「ホンニ兄さん、なつかしや。ナアまあ爰へ」と、招くにぞ、此方も見上げ久しやと、裏門よりも走入り、安珍「珍らしの妹達、變り果たる安珍が、姿を見せるも耻かし」と、打しをれるれば八重垣も、八重垣「其お姿の變りし事、聞いて檜垣と云出して、一泣いてばつかり居りました。まあ息才なお顔を見て、お嬉しいと申さうやら、おいとしいと申さうやら、皆父上のなす業と、思へば恨むる力もなし。いかに御苦勞遊ばすか、前よりお顔もナウ妹」「疲たはいの」と涙ぐむ。檜垣「お顔の疲より此袈裟や、錫杖は私や悲しい」と取付いて、わつとばかりに泣しづむ。安珍も俱涙、壓へかねしが氣を取直し、思ひをかけじとしらぐしく、安珍「イヤもう、今はいつそ氣散じ、母人の大願の、三十三度の熊野參りを始めて、もう四五度も參つた。扨先づ問はう、八重垣の連合、和氣の藏人は、日頃身共とは懇切、かはらず親王様に附き、宮仕して居らるゝか」八重垣「ムウそんな

らお前は何にも知らずか、何時ぞや春日へ御參詣の折から、何者とも知れず、親王様を奪取つて、お行方が知れず」安珍「ヒヤ」八重垣「お供した我夫は、取返さねば館へは歸らぬと、二月に餘れども、今に音もさなりも致しませぬ」安珍「ホイ。して、檜垣の連合蹴塚彈正は、何としてぞ」八重垣「是はやつぱり皇子様に附き添うて、御位讓の相談で、是もすつかり館へは戻られず、私等兄弟の物思ひ、推量して下さんせ」安珍「スリヤまだ御位讓の評議が濟まぬか。俺も濱成卿のお目にかゝり、次手に勘當の詫願ひたい。鞠遊したが御隱居か」檜垣「否へ〳〵、姉様や私等が、若しお相手とある時の、遊びかてらの下稽古、ほんに勘當の願は、舅御様がよい手懸り、逢せましたいものぢやが、ナア姉さん」八重垣「それいなう、折わるう都左大辨兼實公より密のお召、今日は大方お戻りあらう待つてお逢なされぬか」安珍「待たうとも〳〵、たとへ五年が百年でも、齎料さへ貰へばやさが馬、三里乘つたで草臥た、一間へ參つて休息いたそ」八重垣「ヲヽ、それ、妹案内しや」檜垣「サアまあ此方へ」と妹が、つれて一間へ入りにける。何がな馳走と八重垣が、妙よんで云付る。折を構はぬ取次番、取次番「申上げます、紀州室の郡の者、母娘と相見え、濱成卿へ直訴と申す、お留守と申せば奥方でも、お逢ひなされて下されと、お次に控へて居りまする」と訴へ出づれば、八重垣「ナニ紀の路の者が、お留守ならば奥方へ會はうとな、女とあれば苦しうな

し、是へ通せ」と云付けやる。座を改めて松に梅、老木と花の親子連れ、眞子の後家と娘とか、田舍育も場うてせず、會釋こぼれて立出づる。八重垣も只ならぬ人と見込んでしとやかに、八重垣「舅濱成樣には、今御隱居の御身でも、折節事のおり登り、其お留守へ來かゝりて、嘸本意なく思されん、自は八重垣とて則ち嫁、仰おかるゝ事あらば、御遠慮なう」と懇に、挨拶あれば笑顏をつくり、母「コレハ〳〵下司近いお詞、妾は紀州室の郡眞子の庄司が後家、是なるは淸姫と申して娘。大和廻りの序ながら、同道して參りし仔細、日外お貸し申した、雷鳴丸の劍の事」といふ内よりも、いや其劍は紛失と、云はんと爲しがおし默り、八重垣「ハテナウ遠くの所を好うこそ〳〵。娘御は大和廻り始めてか、爰も飛鳥の變る瀨と、歌にも讀みし都跡、名所古跡を敎へうか」と、機嫌取かけ催促の、劍の事を紛らかす。淸姫も目馴せぬ、所咄の聞きたさに、淸姫「是は有がたいお詞。七瀨の淀と萬葉に、讀みし名所は爰なりと、聞けど白齒の振の身で、問歩かれず家苞に、ちとお咄し」と摺寄れば、子に絆されて母親も、母「それ〳〵序に雲の上咄、承つて土産にしや。妾はちつと御勝手のお茶荒しましよ、お免し」と立てば茶の間に案内させ、劍の返事をくろめると、此方は主濱成の、お歸り暫し松木燒く、勝手の方へぞ入りにける。跡に八重垣淸姫の、手を取り南に指ざして、金峯山より敎かけ、「西に葛城當麻寺、二上が嶽のすんとして、殿御にしては揉上の、厚鬢繁りに繁つたは、どうもいはれぬ山の風、あつたものではないぞや」と、敎へ給へば、「實誠、しやんとして、凛として、わけて戀しき峯の松、人で云をなら散切の、いとしらしいを見る樣で、どうやら傍へ行きとなる。あの松とんとはづめかし、ならぬ事か」と眺めいる。折節安珍鞠手にする、ひよこ〳〵出でて、安珍「コレ〳〵八重垣、我等も昔を思ひ出し、沓裝束で蹴て見たい、相手が無い、詰めてたも」と、いふ聲娘がちらと見て、淸姫「ヤアお前は」と驅寄れば、ホンニこなたは壺坂でと、言はんとせしが妹の傍、疵持つ足で口籠り、安珍「さつてもよう似たく」と、云紛せば八重垣は、それと悟つて氣を廻し、八重垣「幸ひ鞠のお相手に、此娘御を貸しませう。そもじも彼方に名所を訪ひ、邊に誰れも目なし川、耳なし川の流をば、見て樂しんでお歸り」と、知つて其場をしらけずに、奥へ行くこそ粹ならん。跡に安珍嬉しさも、胸にせかれてどきついて、安珍「壺坂でのお女中は、何として、マアようお出」と、差詰つたる挨拶に、淸姫は猶うぢ〳〵と、淸姫「私は母樣同道で、願の事で好う來たが、お前はどうして、ようお出」と心餘りて詞なく、遠慮深いは下紐の、解けぬ業とぞ聞えける。安珍も頭から仕懸やうなく仲人なく、はづます思案で鞠ひねくり、安珍「我等が來たは此鞠に、又逢ふ事もあらうかと、引れてふつと參つたが、見懸の樣にむつちりと、手當りのよい心なら、

肌に抱きしめ寢て見たい。口先ばかりのかい摘み、紫皮になる程な、深い心はあるまい」と、氣を持たすれば氣を持つて、清姫「ナアニよい手な事ばつかり。此方は疾うから鞠になり、早う蹴られて見たけれど、先のお力が厭かして、教へてくれる氣がない」と、戀のいろはの帆掛舟、漕付られて安珍は、安珍「習ふ氣ならば教へうか、傳授祕傳がある事」と、戯れ寄れば清姫も、清姫「そんなら教へて下んすか」安珍「教へいで何とせう」清姫「ヲ嬉しや」と取付いて、糾合ひたる折からに、「旦那お歸り〳〵」と、呼ばはる聲と足音に、二人は恟り狼狽へて、其處よ、爰よと駈け廻り、忍ぶ力なく鞠場の内、二人は暫しと身を隱す。程なく主和氣の前司、年を欺く身の達者、頭に雪は戴けど、心は花の都より、歸り足なみしと〳〵と、座敷へ通る跡よりも、眞子の後家がしたひ出て、母「申し濱成卿と見受け奉り、申上たい事あつて、待受けて居りませし」と云ひかけられ振かへり、濱成「ムウついに見馴ぬ老女、身に用事とは何の用、何處の人ぞ」とありければ、母「妾は紀州室の郡眞子の新左衛門が母でござりまする」濱成「コレハ〳〵去ぬる頃は、わりなき無心、それより音信も怠りし、近頃無沙汰」とあしらひに、母「コハ有がたい御上意、濱成樣の仰とあるゆゑ、お渡し申した其劍は、雷鳴丸と申して、家の重寶、御用立てしまうたら、お戻しも有らうが、幸ひ娘が大和廻りの序、立寄りお尋ね申すのでござりまする」と、述へければ、濱成當惑の顏色にて、濱成「誠に其劍恩借の砌は、公の御用とばかり云遣し、仔細云はせなんだも、祕する大事。何を隱さん日本の神寶、十握の寶劍紛失して、有所知れず、某奏して曰く、眞子の家の、雷鳴丸と申す劍は、神代三振の寶劍、是を假の十握となし、御卽位あらば、何か恐れ候はんと奏聞し、扨こそ劍を、無心申しにつかはせし氣の毒は、此末の物語。其使者に行きし身共が家來、葛城權頭といふ者、林專太夫といふ者に討たれ、其劍を奪はれたり」母「エヽ」濱成「まつた其後、春日の社にて、山の部の親王を奪取る、これも何者の業とも知れざりしが、天命遁がれず藤原の百川が計ひにて、己が館に土の牢を拵へ、押込め置しと慥な評議。さるによつて此劍も、百川が計ひと思しめす其仔細は、躰安珍といふ者を、術なくして勘當し、行方隱す。正しく此躰に二振の寶劍を持たせ、逐電させしに極つたり。急ぎ安珍めを捕へ、天秤鉛責にもせよと、評議一圖に極りし」と、聞て安珍鞠場より、出んとすれば清姫が、引止め〳〵、餘處の事よと安珍が、今身の上とも白縫の、小紬の内に抱しむる。眞子の後家は樣子を聞き、母「テモそれは思ひ寄らぬお咄、手前の劍は數ならず、マア大切な十握の御劍御詮議が肝要、大力其安珍とやらが、親と一味でござりましよ」と、安珍を安珍と知らぬ母親濱成も、鞠場に居るとも知り給はず、濱成「兎角詮議は彼の躰、見付け次第に搦取らん。老母は立歸り新左衛門へ詳

しく語り、貴殿の方の劍の詮議、倶々賴むといいておくりやれ。寶劍の見えざる事、必々沙汰無用」と、仰あれば、母「何が扨、假初ならぬ一大事、手前の劍は手前から、詮議いたすがお上へ奉公、一時も早く國へ歸り、躬に委細申し聞かさんもうお暇」と立ちけるが、娘つれんと邊を見廻し、母「清姫其處にか、清姫」と、呼たけられて妥にとも、いうて出られぬ鞠場の内。母は猶しもそこ爰と、尋廻れば濱成卿、濱成「ナニ尋召るゝは、同道の娘か。奥にがな遊びつらん、序に呼出しおません」と、座敷を立ち一間へ悠々と、入る間もひやい冷汗を、身内に流し遁れける。跡に母親うろ〳〵と、若しやと思ひ勝手の方、「娘々」とよぶ内に、首尾見て清姫走り出て、清姫「嘸母様お待兼ね、嫁御さん方とおりは打、隙が入つた」と聞を合す、母は何の氣もつかず、母「ナニ嫁御さん方と雙六打つて居た。ヲヽ、出來しやつた〳〵、能く〳〵深い御縁と有難う思やゝ。彼方方は雲の上人も同前、又こんな首尾ないぞや」と、思合する一言は、正直過て氣味惡し。娘も心に勿體ない、親を騙すと思へども、しらけて云はれぬ暇乞、奥へいふ顔鞠場へさし當て、清姫「申し〳〵、もうお暇申します。不思議な縁で雙六の、簾目合せてお嬉しや。互に四の二と打つた目を、必々お忘れなされな、田舍娘は氣が堅い、外の女と乞目と聞くと、六さき塞いで動かさぬ。熊野參にお宿して、又の逢ふ日を待ちまする。お名殘をしの別れや」と、涙まじりの暇乞、心づきしか母親は、母「いつ迄いうても名殘は盡きぬ。暮るに近い、サアおぢや」と、無理に引立て押立てゝ、歸る時節のよき折羽、娘は重一打出せし、其甲斐もなうすご〳〵と。胸は涙のさゝ波や、しがを隱して立歸る、跡より安珍走り出で、安珍「其志いつ迄も忘れはおかぬ。約束の熊野參の度毎に、逢ふを互の樂みと、思うて暮して居てたも」と、影見ゆる迄獨言、後は涙の別れ水、岩にせかれし思ひなり。かゝる折節奥よりも、足音高く二人の妹、互に一腰ぼつ込で、諍ひかけくる音に驚き、安珍やがて立塞がり、安珍「コリヤけたゝましや何事」と、尋に八重垣、「コレ兄さん、今舅濱成樣の仰には、其方達が親參議百川、かねて皇子と心を合せ、親王樣を奪ひ土の牢に押込置く、いはゞ朝敵の娘、藏人にも鷲塚にも添はして置かれず、夫の代りに暇をやる。若何れでも、親王を奪ひかへさば其時嫁、さもなくば是切と、暇の印の此一腰、親の内へかけ込んで、有無を糺す、其處退いて」と、行かんとすれば、安珍「ヤレ待て兩人、さう息切て逼出しても、六里七里の道の法、走り通しに成りもせまい、心を鎭め兄がいふ事一通り聞いてくれ。最前物蔭にて聞けば、安よしこそ、親百川と一味して、寶劍を奪ひ逐電せしと、難題を受けたれども、言譯せうにも出られぬ仕儀、所詮某に成りかはり、親と一味でない言譯、濱成卿へ倶に取成してくれまいか」と、いふ内よりも二人の妹、「お笑止なれども、

其言譯して上げまする暇がない。邪魔せずとも其處退いた〳〵」安珍「ヲ、尤なれども兄弟の誼み、賴む」といふを妹の檜垣、「イヤ兄さん、一味でないといふ證據、何をもつて何でなさるゝ」安珍「サアそれは」檜垣「ナント」はつと安珍胸は板、詮方もなく妹が脇指、ぬき取り自害と見えければ、二人驚き縋りとめ、妹二人「詞荒いは銘々が身の上が切なさ、お果なされて言譯が立つかいなう」と取付て、泣しほるれば、ともに目をすり、安珍「言譯せうにも證據はなし。濱成公の疑は、則ち天子の御不審、是晴さいでは生きても死んでも。せめて御恩に腹搔き切り、安珍が曇なき胸の鏡をお目にかける。退いてくれ、放してくれ」と、押退け突退けあらそふ體を濱成嘲、見るより駈出で中を引きわけ、濱成「ヤア〳〵安珍、まこと親と一味でなくば、コリヤ是を蹴れ。是こそは汝が親の首成るぞ」と、面體書いたる鞠さし出し、「君は天なり親は地なり。天につくや、地につくや、心底見たし」と件の鞠、突き付け給へば安珍はつと、是ぞ正しく父の顔、惡人なれど勿體なし、如何と心は七轉八倒、濱成「猶豫は一味か、君を捨つるか。主の爲には親の首、性根を据ゑてサア蹴れ」と、催促せられ苦しさ切なさ、八逆五逆の罪受けても、十善天子へ御味方、免させ給へ親人と、走りかゝつてぱつしりと、蹴上る鞠の手を引れ、尻居にどうど。濱成「出來した安珍、蹴るに及ばぬ疑晴れた。後日に參内取次致さん。嫁達兩人早くお往きやれ」「はつ」と答て八重垣檜垣、「兄さんさらばと云捨て、飛がごとくに、三重。

道行　塗分鞘

萩の露、こぼれやすきに月は澄む、誓ひし人も徒に、世に住みながらまゝならぬ、夫にもあはず、舅御に、去られて人目恥かしの、森の烏と諸共に、飛烏の里を立出づる、姉の八重垣妹の、檜垣も俱に一腰を、見るも恨めし、暇の印、朱鞘黑鞘ぬり分けて、望は一つ二上の、山を見捨てて行くさきは、八重九重や古鄕の空、春日の里へ迷ひ行く、情なき身の、父とへば、惡人とて世の人に、しがをいはせの森つゞき、天の香具山隱れなき、衣ほしける御製も有る、其御方も姫御前の、幾夜を假の旅枕、つひに女帝と成り給ひ、袖振る山の滴も、凝固りて御子をば、淸見が原にて生み給ふ、其御產屋を啼澤と、鳴立澤も及びなき、夕暮ごとに來て見たや、見せたや栗毛、駒の岡、「叶堂とは吉左右のよいではないか姉さん」と、勇み進んで見せければ、「愚の事をいふ人や、親王樣を奪ふとは、其方や私が女の身で、根深い父の巧のもと、どう取返して歸られう、賴に思ふ母樣も、他戸の皇子へ緣深し、願ひ叶はざどうせうぞ」「ナウ其案じは館をば、出る時よりかた心、母樣賴み叶はずば、直に其場が最期ぞと、思ひあきらめ給はれ」

と、手に手を取りて兄弟が、歎く涙は秋篠や、外山の里に時雨して、幾田川にや流すらん。流に慕ひ水に沿ひ、夫と夫との心根を、どうした縁に氏神の、儘にもならぬ事かいな。肱を枕に假寐の夢も、鴛鴦の思ひは離れじと、二世を結びし男帶、外にわる氣は有まいけれど、悪所らしいがなんよへ、思ひつゞけて行先は、杖突の里高山の、八幡宮の御社、遙に拜し親達の、心柔らぎ我我が、願ひも叶ひ妹と背の、縁を結ばせ給はれと、祈る印を松尾寺、佛の御足殘されし、佛足石は是とかや。敵にあうては勝間田の、池の彼方は生駒山、入日にうつる紅の、秋の照葉が風含み、はらりはら〳〵ちら〳〵と、飛ぶは小蝶か小雀か、いや木の葉ぞや、槇の原、西の大寺招提寺、暮れぬ内にと道急げば、行きかふ人の口の端に、なんぼ其樣にせきやつても、願ひかなよと思やつても、命にかけてと思やつても、日本に一人の大事の夫、思ひ切る事ならぬぞと、謳ふ唱歌は戀なれど、二人が身には大安寺、ア、まゝよ眞野の里、賣間の池も水越えて、哀浮世に川がな二瀬、思ひ切る瀬と切らぬ瀬と、いふもつらさのます鏡、野守の池も、早過ぎて、奈良の京へぞ　三重急ぎ行く。諸鳥は高山を高しとせずして、高木に巣を造る、參議藤原の百川は親王を奪ひしより、己が館を二重三重、八重九重の御末をば、洞穴に押込しと、聞くに宮方せんかたも、なき名を呼で毒蟲の、苦百川と云ひ囃す。其張本の斑猫は、御腹替の兄宮他戸の皇子、俄の入來は穩便の、御沙汰有りとの知せによつて、出迎ふ女は幾瀬とて、元は皇子へ乳を上げて、誼も深く今の身は、參議の家の御臺とも、奥と口との間のまに、五十の花の闌をば、衣紋繕ひ待受ける、二品式部卿他戸の皇子、胤は王位の御末でも、賤しき腹の乳を受けて、邪智に固まる嚴つの相、濁尖として入り給へば、重くもてなし上座へ通し、幾瀬「夫は聖天の行にこもり、饗應遲はるにより取敢へず自がお迎ひ、俄の御光駕心元なし」と申上ぐれば、他戸の皇子、皇子「ホ、珍しや幾瀬、其方事は麿に乳房をあたへ、傅り育てたる誼を思ひ切々の意見狀、役にたゝねど奇特々々、此度父天皇の愛子、山の部の親王を奪ひ土の牢におし込めし由、百川が忠節是も奇特、誠に彼奴は、弟ながら后腹とてもつちやうし、我は母方いやしきとて、兄ながら位を省かれ、既に弟へ卽位あらんとせしを、寶劍の見えざると、百川が四十餘日眠らぬ眼に睨み立てられ、其場を延した父天皇、たやすく位を讓らうや。山の部さへ殺すれば厭でも位は麿が物、いで捻り殺してくれんず」と、行かんとするを引止めて、幾瀬「コレ申し、乳母が惡い事は申さぬ、お心を持直し天皇樣へ御孝行、諸人を憐み給ひなば、此乳母が念願でもお前を位につけねばおかぬ、何の因果で其樣に、短氣にお生れなされたぞ」と、泣いては諫め諫めては、涙を拂ふ眞實の、母にまさりし教訓に、遺の皇子も進み得ず、暫し佇みおはせしが、

皇子「ホウ是迄某に對し左程の事いふ者あらず、遺は皇子が乳の親出來たく。其方が詞に隨ひ、我手にはかけまじ。何事も百川に任さん、何處に居る對面せん」と、振切り奥へ入り給へば、幾瀬「ナウ其夫が猶不詳なし、逢はずとお歸り遊せ」と、いふ間も隔つ襖戸の、陰に御臺は佇みて、案じに胸をいため居る。折から來る二人の娘、願望が叶はずば、倶に死なんと言合す、心細さと悲しさと、此身は何と奈良の京、春日の里に立歸る。それと見るより母の幾瀬、幾瀬「ヤレ珍しの兄弟や、いざ先是へ」とあしらひに、心せきたつ用無心、云出しかねしを妹の檜垣、檜垣「申し姉さん、何かの咄をさし置いて、今の願ひの一通り言出してお覽じませ」八重垣「マアこなたから」檜垣「イヤお前」と、互の辭儀も物らしく、心おかれて、幾瀬「ハテ改まつた二人の挨拶、聟殿達や舅御の機嫌はよいか變らずか」と、問も案じの一つかや。姉の八重垣打萎れ、八重垣「其機嫌の悪いに付き、兄弟ともに舅去、追出されて歸りし」と聞いて惱り、幾瀬「ソリヤどうして、何仕損」と詞の中より妹の檜垣、檜垣「コレ母様、仕損じは父の邪、皇子様と一味して親王様を囚にし、押込有ると聞き及び、兄弟の内何方でも、奪かへして來らば嫁、さもなくば是限りと夫々の留守ともいはず、濱成様の舅去、邪な爺様に言うたとて聞き入れは有るまい、どうぞお前の了簡で、親王様を自へお渡しなされて下さんせ」と、賴めば姉も倶々に、八重垣「妹は格別私は姉がひ、つい漏かして下さんせ」と、いふ内よりも、檜垣「コレ姉さん、妹は格別姉がひといソリヤ身勝手な仰り方、お前ばかりが受取つて此方には鼻あき手振で去なうか」八重垣「イヤ妹、親王様を受取つても其方へは得渡さぬ」檜垣「ソリヤ何故な」八重垣「ハテ知れた事、此方の連合鷲塚殿は、皇子様の御附人、其女房へ若宮を渡して自ら夫へ立うか」檜垣「イヤそりや以てはは同じ事、御大切な親王様を奪はるゝ様な侍の、お内義さんは得やるまい、母様私に」「イヤ俺に」と、諍ひせがめば母親は、辛さ果なく突きのけく、幾瀬「ヤイ其處な白癡ども、まだ遣らうとも遣るまいとも、言はぬ内から我物喧嘩は、ホ、、、、をかしやく、奥に皇子もお入なり、連合の居間も近い、疾つとと去んだらよからう。思ひも寄らぬ賴や」と取つてもつかぬ心根の、底意も知らず妹の檜垣、檜垣「そんなら願ひは叶はぬかへ」幾瀬「くどいく」檜垣「ヘエ、もう是非がござんせぬ。コレ姉さん、願叶はざ此脇指、暇の印が命の暇の印ぞと、云合せたは爰の事、用意してサアゝごんせ」と、立上れば、八重垣「ヲ、それよ、無情い親の目の前で潔よう、サアおぢや」と、互に白刃を拔放し差違へんとする所に、百川「ヤレ待て兩人、親王を渡してくれう、早まるな」と聲かけ出るは父の百川、「エ、そりや本か眞か」と、悅ぶ二人が傍に立寄り、拔身を拐取りえせ笑ひ、百川「舅濱成が子に迷ふ親心と、己が性根に引き較べ、云ひ付け越たは、ハ

ハ、、、小賢しき謀、憎しと思へど親王を、渡して二人に悦さう」八重垣「アイ〳〵〳〵有難う
て嬉うてナウ妹、それ〳〵父の恩は須彌山より高いといなあ、母の恩は泉水より浅いといなう、
親持つならば爺親」と、追従いうて勇みゐる。百川「ヲ、悦ぶ體を見て我も滿足、シテ親王を受取
るに、兄弟互に諍ふ體、姉へ渡さば妹が恨み、妹へやらば姉が恨まん、互の異論も氣の毒なれば、
父が一つの計ひ有り」と、持たる抜身を二腰さし出し、百川「こりや此姉が刃物を鞘へをさめて
見よ。又妹が此抜身を、姉が鞘へ、納めて見よ、かう後家寡と振違はせ、渡す劔が何方でも塡
つた方へ親王わたそ、鯉口に瑕付けな、きつと申渡したぞ」と、刃物を投げ付け女房を、引立
て一間へ入りにけり。許に兄弟、何の氣も、つか〳〵よつて抜身を取上げ、槍垣「姉さん是はち
やちな謎、お前も脇指私も脇指、身が替つたとて合そな物。何方もこつぽりはまつたら、結句
に跡でをかしかろ、サアごんせはめて見よ。抜た時よりさす時があぶない物」と兄弟が、さいて
見れども平身と細身、反の違か切先のあたるは芥か埃かと、抜いて叩いて吹いては覗き、八重垣「妹
どうぢやはまつたか　槍垣「アイ　大方でアア三寸、鞘の譬が細いかして、問へた様で鹽梅悪い」
八重垣「サア私がのも二寸だけ、切先折るとついはまる、後家鞘でも、ヲ、辛氣、又詰つた」と振
廻し、捻廻して思はずも、ふつと吹出す許なり、八重垣「コレ妹笑ふ程猶さよれぬ、其方も私も公家

育、手馴ぬ刃物の謎かけられ、はまらぬ時は何とせう」槍垣「ハテ氣の弱ひ、はまらざ無理にお
し込むか、叩き込んでも間を合そ」八重垣「ホンニいつそ叩き込も、それもよかろ」と縁先の、柱
をあてと立かゝるを、襖を明けて母の幾瀬「ヤレまて兄弟、はまらぬ身をば無理やりに、叩き
込むと鞘がわれる、まつ其ごとく兄弟が、無理に宮樣貰をというと、親王樣のお命の、鞘がわ
れるが合點か」二人「ヒエイ」幾瀬「それ知たゆゑ自が、ならぬといふを恨みつらみ、あまい爺
御の渡そと有るは、御首打つて渡す氣と、知らぬ二人の愚さよ、忠が不忠となる時は、猶も舅に
見限られ、夫婦の縁も絶果てん、合點の悪い娘や」と、教訓せられ兄弟は、合點しながら立歸り、
何んと云はうぞ如何せうぞと、案じに胸も痛むる折から、庭の繁の内よりも、藏人「ヤア〳〵女、
眞忠義の心ならば、其親鮫を打割つて、親王を受取れ」と、聲かけ出るを、八重垣「ヤア我夫の藏
人樣か」と、姉が叫べば妹も俱に、槍垣「どうしてあれにはお忍び」と、尋ねよれば上張脱捨て、
藏人「某親王を奪はれしより、皇子廣純が館其外、心懸の御館を尋廻るに、思ひの外百川の業
と聞き、十日餘りも窺へども、門戸嚴しく、忍び入らん便なく、今朝曉轟の細川より漸〳〵
と忍び込み、繁みに隱れて最前より仔細はとつくと聞屆けた、後楯には此藏人、親鮫割つて受
取らずば、親王のお命危し、但しは親を庇ふか」と、制せられて兄弟はつと、「實忠人の父の首

討つて言譯、妹合點か」「ヲヽ、合點」と身繕ひ、駈け行く所を母親が、向ふへ廻つて、幾瀬「待つた待つた、今奥には他戸の皇子、夫百川評議の最中、それと悟らば親王を、害せんも計らず、今夜八聲の鳥を相圖、手引を爲うが何と聟殿、思案して待つ氣はないか。大事の前の小事ぢやが」と、さし止られて藏人も、藏人「いか樣時分は悪しからん、必ず夜更けて奪はす氣か」八重垣「母樣手引あそばすか」幾瀬「シィ聲が高い」「然らば後程、合點」、と、點頭き囁き、三人は、間遠に隔つ勝手口、母は此方の一間へと、引別れてぞ歩行く。痛はしや親王は、急難のがれ走り出で、逃もやせん、隱れやせんと狼狽へ給ふを、主の百川見付けてかけ出で、取て引据ゑ觀念あれ」と拔放す、手本へ駈くる妻の幾瀬、「ナウ是待つて」と中に隔り、幾瀬「尤皇子を御位に付けたうは思へども、親王樣を殺すとは、思ひも寄らぬ悪逆、早まつて下さるな」と覆ひになれば取つて突退け、百川「ヤア狼狽者、其皇子の御位の、妨となる此親王、今殺さぬと藏人夫婦、奪取らんと忍入り、汝を手引の相圖も知つたり、手早く首を討落し、聟や娘に鼻あかす」と、立ちまふ後へ二人の娘、和氣藏人窺寄り、「大悪人め」と拔打に、はつしと斬れば、丁と受けたる百川が、蹌ぼふ所を疊みかけ、「冥加知らずの國賊め」と、ふり上げる太刀の下、手向ひせじと刃物拔出し、百川「ヤレまて藏人いふ事あり、誠それなる親王は、種腹卑しき賤物ぞ」と、いふに恟り人々は、血迷うてか、狼狽て、狂氣したかと藏人も、忙れて顔をさし覗く。百川「ホヽ、斯うばかりでは合點行くまじ。何を隱さうあの山の部の親王といふは、某が妾腹の躰」藏人「ヤアヽ」百川「年をいへば十四年以前、后御男子を御誕生、御悦び限りなき所に、七夜の内に雲隱し給ひ、密に帝へ奏せし所、后女が産後の歎きも不便、參議以上の子があらば、入替へおけとの綸言、折ふし某がめかけし女男子を産む、先當分の涙押へと思ひ差上置きしが、爰をおきゃやれ、鳶が鷹とて生れ上り、后女は元より天皇の御寵愛、餘て零るゃ窃の勅には、他戸の皇子は悪黨故、位に卽けては民の歎き、汝が躰と人知らぬこそ幸、山の部の親王に位を讓らんと、有難過ぎて恐しき詔、ぞんじもよらず、兎角く皇子へ御位と、四十餘日眠をさらせど、天皇許容ましまさず、所詮躰を討つて捨て、腹掻き切て御位の、評議を一圖に定めさせんと、覺悟極めて斯の仕合、死後に賴むは皇子の事、悪黨といへども、皆廣純がなす業、御意見を加へ、天子の位につけて給べ。正しき胤はあなた一人、我子は果報に道過ぎて、不便な最後を遂さする、ヤレ女房そこ退け」と、心强も突立つて、拔身引提げ立かゃる、皇子「ヤレまて殺すなしばしく」と聲かけて、立出給ふ他戸の皇子、面をつくる柔和の相、御詞も穩に、皇子「扨は親王は汝が躰よな。麿を位に卽けん爲、殺さんとは過分々々。さすれば天子の御胤なく、我ならで御位を

つぐ者なし。是迄の積惡改めん、父天皇へ奏聞し、早く位につく樣に、汝等宜計ひくれよ。善心に立返りし證據には、渡す物有り是見よ」と、御懷中より錦の袋、皇子「コリヤ是こそは、紛失せし。三種の寶の內十握の寶劍、是を戻すからは、父天皇も疑有まじ、急いで卽位の奏聞せよ」と、渡し給へば百川が、膝行して押載き、取納むれば妻の幾瀨、「天下の父母と成るお方の、お生性はそれ程に、打つて變る物かいの、乳母が育たお子程有る」と、悅び勇めば二人の娘、御代は長久々々と、藏人共に祝しける。百川勇んで、「一時も早く御歸館、それ〳〵御迎の官人」と呼立つれば、皇子も歡喜の色顯し、皇子「是より麿が心をかけし錦の前を尋出し、后となして樂まん。旁祝義」と云ひ殘し、還御あれば人々は、倶に千秋萬歲の聲で見送り奉る。親王跡に身の上を、聞いて悲しや恥かしやと、有合ふ脇指おつ取つて自害と見えしを、百川慌て刃物拐ぎ取り、上座へ直して聲張り上げ、百川「御位讓は山の部親王、御卽位成るぞ」と呼はるにぞ、藏人驚き、藏人「ヤア手の裏返す一言、汝が躰へ卽位とは、逆心成るか」といはせも立たず、百川「ホヽ誠は此寶劍を取返さん爲樣々と計略、正しく皇子が隱し給ひしと見込たれども、取りかへすべき術もなく、親王まで奪取つて見すれども、中々寶劍は出し給はず、惡人でも賢きに、ほつと困り、親王を我子と僞り殺さんとせば、外に太子の無きに安堵し、出し給はる事も有らうかと、廻遠き計略も、君の聖德厚きにより、まんまと奪返したり、皇子の發氣も本心ならず、數萬の軍勢集め給へば、かく謀し事、洩ては忽天下の亂、祕すべし〳〵一大事、サア何方も此聖天の間へ金打」と、勸に從ひ藏人夫婦、檜垣も倶に神罰明罰、洩さば受けんと誓の詞、何思ひけん女房幾瀨、有合ふ刃物追取つて、ぐつとさし込む心下、ナウ悲しや」と二人の娘、走り寄れば藏人も、「コハ何ゆゑ」と驅けよるを、「ヤレ寄るまい」と手負は起立ち、幾瀨「何故とは自は、現在皇子のお乳めのと、洩さで義理が立つべきか、彼方の影で此家へ嫁入、御臺樣よ、奧樣よと敬れるも皆御恩、其恩忘れ大切な、御身のひしに成る事を洩すまいとの金打が、どう成る物ぞ我夫、たとへ提婆を育てても、乳母たる者の習にて、養君が惡いとも、思はぬ癖に氣も僻み、后のお子に負けさせまい、二番と下ゞまい御位に、卽う〳〵と稚より、我慢自慢で育てたる、附子の烏の科人は自にてさむらふぞや。お腹の內から惡人の、氣質も備り給ふまい、御意見加へ我夫、親王樣の後見とも、お願ひなされて下され」と、思ひ餘りし涙の體詮方もなく見えければ、藏人差寄り、藏人「ヲヽ、天晴貞女。是非なく最期いとしや」と、目を摺りこすれば二人の娘、娘二人「皇子樣も天子のお胤お心さへ直らうなら、何の如才がござんせう。何にも心に思はずとも、稱名唱へて下さんせ。私等二人が身の上も、苦にせずとも」

と云ひさして、はつとばかりに泣きしづむ。手負は猶もしやくり上げ、幾潮「子に別行く親の身が、どう苦にせずに死れうぞ、分て迷ひは安珍事、親の勘當流浪して、長の旅路の熊野道、今に通ふか參るかと、夜は終夜案じ寐の、枕より外我涙、泣けど知るもの無きぞとよ、せめて末來の手向には勘當赦して下され」と、賴む詞の息遣ひ消入る如く見えたれば、百川悲歎の涙ながら、百川「元勘當も當座の計略、追付け赦して呼返さん、必々心にかけな。皇子へ因緣の深き身は、外より洩れても疑かゝる、生きて其罪受けうより、出來した覺悟をよう極めた、極樂淨土の導は、六字の名號忘れな」と、勸るに功德俱々に、唱へとなふる南無阿彌陀、佛の一字に息止り、眠が如く絶え果たり。「ナウ是しばしと二人の娘、縋る甲斐なく兩人も、涙に咽ぶ折柄に、表に響く攻太鼓、関をどつとぞ上げにける。はつと人々歎をとめ、「コハ何者」と見る所に、右大辨紀廣純、馬上に跨り手綱搔繰り、廣純「ヤア心得ぬ百川、今日内裏を炎上し、天皇を尋ねる所に在所知れず、扨は汝が隱したに極つたり、其上最前皇子を賺し寶劍を奪取つたるは、正しく一心、急いで寶劍天皇を渡せ、異議に及ぶとコリヤ是を見よ。神代より傳はる、日月の籏眼前に引裂き捨て、官兵集る便を切うや。如何に〳〵」と御籏をば、兩手に引張見せかけたり。百川「ヤレそれ裂は天下の凶事、天命をしれ廣純」と、いへども聞ず、廣純「ナニ天命、あたる罰は汝等が身の上返答せいサアどうぢや」と、引裂かねぬ面魂。詮方つきて見えたる所に、山の部の親王は、長押にかけし弓矢おつ取り、切て放せば誤たず、廣純が大推より咽吭かけて射落され、眞逆に落るを、藏人かけよつて、首打落し御籏を奪ひ、藏人「コレ〳〵百川殿、天皇玉座にましまさぬと、廣純が一言心許なし、イデ御行方を尋ねん」と、驅出すを、百川「ヤア待て藏人、玉體危く某が、夜前密に、愚妻にも隱し忍せ奉る。御尊顏を拜せよ」と、聖天の襖戸さつと開けば、御簾卷上げて御父天皇高座に悠々と、四方に立たる御籏は、玄武朱雀青龍白虎、風に翻翻人々は、魂恟り飜り、はつとばかりに平伏す。天皇御聲麗はしく、天皇「絶えて久しき寶劍を、奪返せし百川が計略感ずるに餘り有り。妻の最期山の部が弓勢、驚き入りし」と詔り、親王はつと奏て曰く、親王「今廣純が禁庭を放火せしと申すは重疊、元此國は、四神相應の地にあらず、急ぎ都を山城に御遷し候へかし。それ山州遷都の地は、南北行程百里に餘り、山河四方に麗はしく、此地に新都を造營し、皇居と定むる物ならば、敵の恐も候まじ、山の部の親王が小智の願ひに候」と、年に似合ぬ江帥名智、げに理りや此親王奈良の都を今の京、平安城へ遷れし桓武天皇、是とかや。心任と勅下り遷都の土地の御祓せんと、玄武の旗をおつ取りて進み給へば藏人は朱雀の旗を、預りて八重垣、檜垣青龍白虎、てん手に携へ御供に、月の都を立出づる、日の御神の御末人、

御子見送り賜は、六十餘州を御餞別、娘二人は母親の死骸を殘し稱名を、胸に唱へて未來へ餞別、行は神道戻るは佛道、中を隔つる藏人は、忠義の道の道直に、先長岡の花の地へ、宮を、供奉して立出づる。

第四

義士は交りを絶つとも惡聲を出さず、忠臣は國を去れども、舊恩を忘れずとかや。名にし熊野の山疊む、室の郡に富榮え、世々に續し眞子の家、新左衞門の尉俊綱、美若の比は公に仕へし身の、父庄司歿して後、二度館に歸り花、幾春秋を置く霜の、老母に孝行妹を寵み、主持ぬ身は野邊の雲、心は塵の亂なく、寢覺を樂と暮せしが、近曾より妹の淸姫が病氣とて、館の内は密々と妙どもが立ちかはり入替り、爰を煎湯とりぐに量る水さへ澄かへり、ついの物音兎も、心を付て立ち振舞ふ、家の行義ぞ格別なる。實病女より見る母の傍で氣遣安からず、娘をつれて一間よりしづくと立出て、母「ナウ淸姫、心持はちとよいか、百病も氣からと、寢てばかり居やる程痞も下らず、齒の痛も募る道理 庭に折咲く花をも眺め、皆の者が世間咄聞くも慰則ち養生、心を晴しや」と有りければ、淸姫「イヤなう母樣氣遣うて下さりますな、私が此病には、慰より藥よりよい事があれども、それがどうも儘ならぬ」母「マアよい事とは」淸姫「サレバイナいつもお宿を申します熊野行者のお山伏、安珍樣が覺えてござる、奇妙な加持を賴だら早速に直らう物、どうしてお出なされぬぞい」母「サア此人は熊野權現へ、三十三度の願有るとて毎月參詣、此方を定宿に賴み、最早今一度で願も滿ると云はしやつたに、何としてか跡月も見えなんだは、若氣色でも惡いか、便せうにも確乎りと所は知らず」淸姫「サア其所を知つたらば私がつい尋ていて、此病も直して貰ひ御無事な樣子を直に見て案ずる胸が休めたい」と、思ひ積し戀病を、包に餘る詞の端、母は悟れどそ知らぬ顏、母「ソレくに其樣に深う苦にせいでもよい事を、假初にもくしくと物思やる故、齒の痛も一倍强い。昨日も齒醫者の元隆樣が樣子を見て、どうで此齒は一枚拔かねば治るまいと云はしやつた。今にも見えたら意地むぢ云はずと拔てもらや」淸姫「チ、母樣の譯もない事言はしやんせ、大事の揃うた此齒をぬいてよい物か、あた見苦るしい恥かしい、そんな事假にも云うて下さんすな」母「ハテでも病の直る事、醫者殿が惡い事は仰しやるまい」淸姫「アレまだいの、私なんぼでも拔事いや。聞もうるさい面倒」と、生付たるやう腹立、顏を振袖ぴんしやんと、寢所にこそは入りにけり。跡打眺め母親は氣の毒顏に、母「テモ扨も片意地な者では有るぞ。とは云ふものの若時は誰しも有る事、十六七になると早前後見て、よい

上にもたしなむ最中、厭といふも無理ではない」と、了簡付ける親心分別なきは習慣なり。折節つか〳〵入り來るは、齒醫者大橋元隆、母「コレハ〳〵御苦勞にようこそお出で。姐ども煙草盆お茶持てこい」元隆「イヤ何もお構なさるゝな。扨昨日もちよと申す通り、惣じて三十三枚齒を生ぜし女は、必ず物妬强く執著深きと、世上の噂に申す如く、娘御の病氣は物思ひより起つて、齒を痛め癪氣を上せば、迚も本有の藥は浴せても驗はない筈、兎角あの齒を一枚ぬけば忽病氣の根を絶ども、ぬかす事は扨置悍馬のはねる樣に、ぴん〳〵しやん〳〵寄付けぬには困り物、今日はどうぞ騙かけ、拔て進ぜる工面がござらう」母「サア今もそれを申す事、お世話ながら何とぞ御療治賴上げます、いざ先奥へお通り」と、伴ひ皆々入りにけり。時しも一間の障子押明け、あるじ新左衞門尉俊綱、調へ置きし長持の蓋押開き、錦の前を出し參らせ、新左「不思議に奈良の町の道具屋にて此長持を買取り御目にかゝるも主從の奇緣、大切の御身なれば家内の者にも深く包み、長々御窮屈なる御住居察しやられて痛はしゝ。暫く是にて御氣を晴させ給へ」と、恭しく手をつけば、錦の前は世を忍び日影見ぬ目の面痩て、麗かならぬ聲をひそめ、錦の前「昔の誼を忘れず、身にかへて段々の介抱、何時の世に忘れうぞ。惜からぬ自が命永へて、憂目をしのぐも夫故、此上ながら、何とぞ安珍樣の行方を尋ね一度廻あふ樣に賴む」とばかり打しをれ、跡は涙にあやぞなき。新左「コレハ〳〵又よしなき事仰出されて御歎き、それでは猶お氣の痛となる御病氣が出まする。誠に某、御館に勤しは若年の時、親庄司相果て家を繼ぐべき者なければ、暇を申し此所へ歸りしが、其後御父道成公には御遁世遊し、叔御廣純卿御家督相續ありて、此度皇子の謀反に組し剩へ、姫君を差上げんとの事、某館に有るならば、かく御流浪はさせませぬに、性根据りし御家來なき故、國土の亂れ御身の御難儀殘念さよ去りながら、御云號の安珍公、尋出して御夫婦となし二度御代に出すべし。御心安く思召せ」と世に賴もしき詞の末、錦の前「ヲ、兎にも角にも其方を力、よきに賴む」と仰の内、表へ人音。はつと驚き、先御忍と一間の障子、ひつしやり引立て勝手へ出づれば、熊野行者の獨旅、通ひ馴たる山伏姿、安珍は定宿に案内もいらず笠取つて、によつとはいれば新左衞門、新左「テモ珍しや安珍、面妖毎月見える人が何としてか二月餘も參詣ないは、若氣色でも惡いかと、家内が毎日云ひ出し氣遣ひ致て居た」安珍「コレハ扨御親切忝い。我等も今度が三十三度の參り納め、大願成就いたせば是程嬉しい事はござらぬ。又何時もながらお宿の御無心賴まする」と草鞋の紐、解間おそしと錦の前、聲聞付けて走出で、錦の前「ナウなつかしの安珍樣、お前に逢はん爲ばかり、館を拔出で彼方此方と流浪の内、不思議に此家へ廻り來て、新左衞門の世話に成り、お目にかゝるも盡せぬ緣、

御無事なお顔を見參らせ嬉き中にも安からぬ、修行の旅の御艱難痛しさよ」とばかりにて、思ひこがれし溜涙すがり付いて泣き給ふ。安珍「ヲ、我とても添ねばならぬおことの身の上、心には懸かれども誰に尋ねん便もなし、先新左衛門の世話とあれば祝著々々、シテ此家へは何として來られしぞ」新左「イヤそのお咄は新左衛門が追て申上げん。扨はお前が少將安珍樣かや。いか樣某以前道成公に仕し時見覺し面差、御父百川公に其儘、存ぜぬ事とて是迄平懐に申せし段眞平御免、此上は御兩所ともに我家に忍せ奉り、時節をうかゞひ御代に出さんさりながら、皇子の方より姫君の有所、草を分けて尋ぬる由、壁に耳有り爰は端近、姫君は一間へお出で、安珍樣は旅の垢付風呂に召し御休足、いざ此方へ」と勝手口、伴ひてこそ入りにけり。元隆「いやもうお暇申します、それにござれ」と中の間の、襖押明け立ち出づる大橋元隆、妙の白菊がおくり出づれば、元隆「コレ女中、又今日も素手ふつて戻ります、去りとは片意地な娘御、お袋が甘いからやんちやいうて齒をぬかさぬは」白菊「サア私等なら術ない目をせうより、つい抜てもらひませうに」元隆「ヲ、それ〳〵、惣體齒には限らぬ、十六七の血氣盛、ぬく時分に堪忍すれば、陰氣が凝て病に成る。其處を直すは此元隆が得物、何時でも賴しやれ、ついちよこ〳〵と抜てやろ。ハア南無三寶、ぬけいでも大事ない、履物の鼻緒がすつぽり、コレちよつと借ります」

と、雪踏かたしに拔捨し草鞋引きかけたち歸る。白菊は跡見送り、奥へ入らんとする所へ、ばつたばつたと廻は、何事やらんと驚く内、安珍の胸倉取り引き立ち出づる淸姫が、急に急いたる恨のしやな聲、淸姫「コレ大嘘つき人でなし、エツエお前はの、此美い顔をして、ようもようもぬけ〳〵と騙された事ぢや、ヤレ私とお前が約束は假初の事ぢやない。抑大和の壺坂寺、茶屋の床机で互に見初しより、鞠場の中の云堅め、それより月々の熊野詣に、此家が定宿馴染程愚ひも增り、母樣や兄樣に譯咄して、早う夫婦に成りたいといへば、まちつと待て、三十三度も今暫く大願成就した上では、女房に持う、一生添はうと、日本の神佛を誓ひに立て、外の女子は目もかけまいと、コレ此口で云はしやんしたぢやないか。それに何ぢや、錦の前に添はねばならぬと、濃てりとした挨拶、すりや彼方からも厭らしい、お前に逢ふ爲ばかり、館を拔たの走つたのと、あた舌たるいしこなし振、あんな女房持ちながら、なぜ騙しやつた、たらしやつた、今迄命も絶る程、思ひこがれた此胸を、元の通りに直して貰を。償うて返しや」と武者振付き、抓りつ叩いつ髑に、齒形喰ひ入る戀の意地、身を顫はして泣き叫ぶ。安珍ほつと持あぐみ、安珍「今の樣子を聞れては、成程腹立尤もさりながら、全く其方を僞りたらす所存でなし、錦の前は稚き時より、勅諚を以て親々が云號け、一度添はねば父百川は、違勅の科に落つ

る事、默し難き一大事、たとへ夫婦の語をなすとも、アリヤ畢竟立物、其方を思ふは眞實の戀路」清姫「アヽ是言ふまいく、そんな間似合聞く耳持たぬ。たとへそれが誠でも、假にも煩さい女房穿鑿、外の女子にお前の顏、見せる事も嫌ぢや、厭ぢや。今目の前で錦の前と緣切て下さんせ」安珍「ハテ扨それは聞譯ない。マア氣を鎭めて」清姫「イヤ〳〵〳〵聞ぬく〳〵」と競あふ聲。聞かねて母立出で、母「コレく〳〵娘はしたない、そりや何事、マア爰放しや」と引分けて、母「如終は彼處で聞きました。安珍樣の餘儀ない言譯、聞入れぬは片意地と云はうか、我儘千萬嗜みやく〳〵」清姫「イヤお前までが其樣に、叱しやんすりや猶腹が立つ、私が無理か片意地か、打明けていふ聞かしやせん」安珍「アヽ是お袋、それでは結句氣が逆立つ、却つて此安珍が難儀に成る」母「イヤ大事ござりませぬ、お前が爰にござつては、物に遠慮が有つて惡い、構はずと奥へござれ。後で合點の行樣に、母がとつくと申ましよ、サアく〳〵お出」と押やられ、安珍「然らば宜う賴入る。コレ清姫、たつた今も言通り何々の誓文、其方を騙さう樣はない、堅い約束未來までも違はぬ程に、必短氣起しやんな」と、いひつゝ立つて後や先、思ひ廻して氣の毒さ、しほく〳〵として入り給ふ。母は娘の膝に摺寄り、母「親甲斐に無理無體叩き付ると思はずとも、物の道理を合點しや。安珍樣は誰有ふ。參議百川樣の御子息と、聞いて驚く其上に、姫君は新左衞門が以前のお主とあれば、母や其方も俱々に、恐敬ふお身の上、其方に緣切らそとは、慮外といはうか、勿體ないといはうか、道も法も辨へぬといふ物、其方が思ひ初たは、かうした事を知らぬ昔、所詮無い緣とあきらめて、さつぱりと思ひ切つて」清姫「イヤ成ませぬ」母「サア其ならぬ所を」清姫「コレはしたり、同事をくどく〳〵と、そして何ぢやの、恐敬へ、兄樣の爲にこそ御主人で有らうけれ、私は終に奉公せねば、お主でも杭でもない。まして戀路に高い低いの隔があらうか、高位皇妃の姫宮でも、大事の男を添せはせぬ、思ひ切る事如何ならぬ」母「コレハ扨爰な子よ、能加減に情張れ、是非々々ならぬと云ひ募れば、姫君も女子の意地、よもや負けてはござるまい、時には安珍樣の御難儀、コリヤ新左衞門が强い目に遭はすぞよ。とはいへ思ひ込だ殿御、此儘に打捨て殘多いも尤も、よいく〳〵母が思案が有る。姫君に事譯いうて、安珍樣と契約の通り、夫婦の盃取かはさせ、其上で思ひきらそ。暫く待や」と立て行く。障子押明け新左衞門、つゝと出で、新左「ならぬく〳〵、母の詞が甘ければ、附上つて樣々の存外、主人に恨有る女、不時の災有まじき物でなし。只今よりきつと改め、御兩所の傍近く參る事堅うならぬぞ。コレサ母人何をくどく〳〵。ソレ引立て部屋へござれさ」清姫「イヤ是兄樣、いかに妹なれば迚云たいがいなそりや慘い、男の傍へ女房が行くに、怖い事も何にもない、さう胴慾に出さしやんすお前方を相手

にやせぬ。微塵も構つて貰まい、此上は安珍様に直々〳〵、錦の前と此清姫、何方が女房に成か成ぬかたつた今譯立てる。其處退かしやんせ」と駈込むを、母は悲しく取縋り、「ア、疎ましや」と制すれども、生付たる嫉妬の萌、突退け跳除け駈行くを、飛かゝつて新左衛門、がんづか摑で引戻し、閨の戸明けて打込めば、聞えぬ〳〵と又駈出づるを止むる母親諸共に、突遣り押込み新左衛門、戸をはたと鎖し樞下せば、一間の内より錦の前、安珍伴ひ走出で、錦の前「今の様子を聞からに、能々思ひ詰た清姫、心根もいぢらしゝ、添て進ぜて下さんせ。自は是迄」と守刀を取出し、既に自害と見えければ、安珍驚き押止め、安珍「それは一興、清姫が志無下にもならねど、其方が死では我のみならず、父百川が言譯たゝず、兩人共に見捨ぬ思案は某が胸に有り、恨妬は日頃に似合ぬ未練々々」と制し給へば、錦の前「イヤなう恨妬で死るではなけれども、自は皇子より詮議つよく、行く先々を捜さるればたとへ何處に忍ぶ共、中々思ふ様に添ふ事は成まいと、得心して生害。放して死せて下さんせ」と、取附給ふを新左衛門、引分けて刀椀取り、新左「御大切な姫君過有りては某が忠義が立ぬ。お身の上に恙なく、是非彼方へ添せまする仕様模様は追ての事、先さし當つて皇子方の詮議強ければ心ならず、幸道成寺の住僧は、御父道成入道教海公の御弟子なれば、御兩所に是へお出で、暫く御忍び有べし去ながら、いかに所縁あれば迚女中を寺に忍せ置く事、氣毒に思されんも計れず、先安珍様御一人、先だつて御立越し、仔細を語り御頼み有り、苦しからずば早速おしらせ有るべし」と、氣をいら立れど安珍は、進もやらぬ後髪引別行く憂思ひ、さし俯向いてましませば、又縋り寄る錦の前、聞分なしと新左衛門引放して安珍の、髏摑んで突飛せば、すつくと立つて、安珍「コリヤ何とする」新左「何とゝは未練千萬、姫君は此新左衛門が預つた。氣遣せずと道成寺へ疾ととござれさ」おつと心得徒歩跣足、日脚も早き暮紛れ、急ぎてこそは。

清姫日高川之段

行空の道もあやなき戀路の闇、安珍立退給ふと聞き、はつと驚く清姫が、胸も張裂く瞋恚の炎、焦れ焦るゝ我思ひ、心強くも儚りて、捨行く夫の面憎や、何處迄もおつかけて、恨を言はで置うかと、寢所を忍び立出づる。姿しどなき振袖の、裏吹かへす夜嵐も、身にしむ野邊の霜深き、草踏分けて只獨、呼ど叫べど其人の、影も形も鳴く蟲の、聲も恨めしちりりん〳〵、蚤は我戀を、思ひきれとの辻占か、うるさや厭やと聞捨て、走り躓く小石原、小笹萱原打過ぎて、天田堤にさしかゝれば、向ふへちよこ〳〵小挑灯、提げた男の急ぎ足、間近くなれば聲をかけ、清姫「コ

レ申し物問ましよ、廿許の山伏姿、器量の好いが先へ行かずや。お逢なされはせなんだか」と、問はれて、男「成程逢うたく〳〵。それは餘程跡の事、宵闇で道筋が知れにくい、道成寺へは斯う行くか、と問うた顔付うぢ〳〵きよろ〳〵、それを尋ぬるこなたの素振、エ、聞えた、コリヤ色ぢやの〳〵、しかも荅の花の色、移にけりな徒も、添ふに添はれぬ事が有つて、一思ひに死んでしまひ、未來で添はうと思はしやろが、ソリヤ大な無分別、是迄其手が幾もあれど、先で逢ふやら逢はぬやら、どうやらかうやら便りがない。殊に彼山伏殿には、たんと道が」清姫「おくれたか」男「おくれた段か、なんぼ急いても女子の足、追つく間にや夜が明る。引返して去んだがよかろ、去なうやれ、我古里へ歸ろやれ、我れも宿へ歸らん」と、足も取次に行過ぐる。「ハア遲れたり口惜しや、いで追つかん」と氣をいらち、小褄引上げ帶引締め、駈出す先はせい〳〵と、一村しゆる藪疊、右手の田の面に打續く、井路の懸橋、さゝやきの、橋も恨めし何時の世に、誰が忍びあふ薄の岡、跡に見捨てゝ行先へ、狀箱かたげた早飛脚、行きあたつて「あいたしこ、鼻柱がくわんと云うた。コレ目を明て通りやいの」と、叱ちらして行過ぐるを、清姫「コレコレ待つて」と引留め、清姫「ちと尋ねたい事が有る。二十許な山伏の」飛脚「チツト皆迄聞くに及ばぬ、たつた今跡で逢うたが、其山伏の咄には」清姫「どう云うたえ」飛脚「鼻柱がぐわんという

た」清姫「ハテぢやら〳〵と戯談云はずと有樣いうて下さんせ」飛脚「サア有樣は定めて此方の事であろ。十六七な娘が見えたら、おれに逢うたこと、いうてくれなと頼みやつての」清姫「サアその跡は」飛脚「イヤそれ云うて居る隙がない」清姫「無うても有つても問はにやならぬ、譯聞いて追付きたい。サア〳〵ちやつと行きたいわいの」飛脚「イヤ其方より此方が行きたい、急用ぢや其處退いた」清姫「イヤ〳〵聞ねば通さぬ〳〵」飛脚「ハテ扨邪魔なわろに出合た、時が切れうか知らねども、かい摘んで話さざ成るまい。ハテ高が此方をほつと飽て、夜拔けするというたわいの」清姫「さうして如何ぢやへ」飛脚「さつてもくどし問殺すは、コレ是から跡は大事の咄、熟乎と云はねばならぬ。ドレ耳爰へ持てござれ」清姫「其跡はへ」飛脚「耳つ遠」恂りする間に摺拔けて、飛ぶが如くに急行く。声嫉妬つと急上し、「扨こそ我を出しぬいて、錦の前にそはん爲、逃隱るゝは汚し憎し、命限り根限り、追驅け追詰め、今に思ひしらせん」と急けば、せく程足本は習はぬ道に疲るゝを、踏しめ〳〵行先に、鉦打鳴しひよつこく、無縁法界七墓を、毎夜さ廻る修行者が、行違ひさま、清姫「コレ申しちと頼みたい事が有る」と、聲かけられてわつと飛退き。修行者「アア寄るまい〳〵。どうやら今夜は氣塞なと思うたが、案の定出た程にの」清姫「ハアテ苦しうない物ぢやわいの」修行者「其方がなうても此方がくるしい。坊主を見かけて頼みたいと云やるは、

家札を捲つてくれで有らうが、此邊に家は一軒もない、近頃龜相千萬な。そして見ればびらしやらと、色よい著物、コレ惣體幽靈といふ者は、白無垢著て出る物ぢやわいの、いとしや其樣な迂濶者では、極樂淨土の道も知るまい。ドリャ迷はぬ樣お念佛で、十萬億土へやつてくりよ。なまいだ〳〵〳〵」清姫「アヽ是々そんな者ぢやないわいの。私は先へ往た人に、追著かねばならぬ者、何處元で逢しやんした。それが聞きたい、ちやつと〳〵」修行者「ハレ又滅相な事ばかり、形恰好も云はいで、エヽ合點々々。そりや跡の松原で逢つた、山伏の事であろ。コレ其わろが云うたはの、若い女子が此道を來るならば、俺は川へ身を投げて、死んだと云うて騙してくれ。逢うては強う難儀する。どうぞ跡へ戻してくれと、頼みやつたれど此坊主、嘘ついては未來が怖さに、眞直に言ふぞや。アヽ是々其氣相は何事。ナウ怖や恐しや、おらが知つたる事ぢやない知らぬが佛、南無阿彌陀赦し給へお女郎、助給へ御誓願。なまいだ〳〵南無阿彌陀」ぶつ共這々逃足は、行方知らず成りにけり。「なう是それが眞かいの。エヽ腹立や胸苦しや、それ程いやな自を、女房に持たうと何故云うた、男傾城人でなし恨しや妬しや。嚙付ぞ取付くぞ」と、怒る顏朱を注ぐ、色も嫉妬に迷の煙、眩む眼に涙の雨、ばら〳〵ばつと、裾を蹴はらし砂を飛し、駈け行く道も心から、果しも流の音凄き、日高川の渡し場に、漸辿り著けるが早月代もさしのぼり、隈なく見ゆる向ふの岸、小舟もようて舟長が、笠傾けて眠居る。嬉しや此川越え行けば、道成寺へは一足と、聲をはかりに、清姫「ナウ〳〵其舟渡してたべ。早う〳〵」と呼はれば、寐耳に獨り舟長が、目を摺りこする佛頂頰、舟長「あた喧しい何ぢやいの。旦う〳〵と仰山さうに、たつた惱の舟賃取ろとて、彼方此方と舟廻しては肩も堪らず。第一ねむたい、夜が明けたら渡してやろ。エヽうまい最中を、けたゝましう起された、あた歩が惡い」と呟けば、清姫「イヤなう夜明の事は置いて、一寸間も待たれぬ急用、道成寺迄早う行きたい。情ぢや何卒渡して下されー」舟長「何ぢや道成寺へ行くと言やれば、背に渡した山伏の、跡追うてきた女子ぢやな。それなれば猶ならぬ。彼山伏の頼には、樣子有つて某は道成寺へ逃行く者、十六七な女が來らば、必ず舟を渡してくれな、逢うては忽ち命づくにも及ぶ事、若し渡さば、其方共に難儀せう。くれぐれ頼むと云やつたりや、何時迄も渡しやせぬならぬ〳〵」と冷酷なり。清姫「コレなうそれは胴慾ぢや、たとへ渡して下さつても、此方に科も難儀もかけまい。思ふ男を人に寢取られ、私は行ねば焦れ死、捨る命は惜まねども、たつた一言恨がいひたい。つらい悲しい身の上を、不便と思ひ其舟に、載せて下され渡してたべ。慈悲ぢや情ぢや功德ぢやはいの、是ぢや〳〵」と手を合せ、拜つ侘つ身を悶え泣きさけぶこそ道理なる。舟長「ハテあつた執拗いとうばり女郎、

叫はぬ事をぐづかはと、とこ吠たり喋づたり、息筋張るので寢られぬわい。足本の明い内とつとゝ去ないでな、但し渡さにや死ぬる氣か、俺此れ迄、焦れ死といふ者終に見た事がない。さらは寢ながら見物せうか」と、舟梁に脚踏ん反し苦口いふも川向ひ、喧嘩じかけと見えにける。今は詮方泣く目をはらひ、清姫「ヲヽ、渡さぬ迚爰迄來て、やみ〳〵と歸らうか、恨言はずに濟さうか。此水底に沈まば沈め死なば死ね、念力通さで置くべきか。百尋千尋も何の物かは、渡つて見せん」と身繕ひ、川へざんぶと飛込んで、逆卷く浪をかき分け〳〵、左手に沈み右手に浮き、抜手を切つてさつ〳〵さ、さつと飛びちる水煙、雲をさそへる蛟龍の、巨海を渡るごとくにて、跳ね立て、蹴立てゝ泳しが、瞋恚の猛火五體を焦し、口より吐く息炎々たる、炎を吹きかけ目を瞋らし、髪逆に振亂し、一念凝つたる勢に、舟長惘りわなゝき聲、舟長「ヤレ恐しや冷じや、鬼に成つた蛇に成つた。そりやもう來るはヤレ上るは、喰殺されては成るまい」と、舟を乘捨て駈上り、堤の原を横切に、命からゞ〳〵逃げて行く。清姫は一筋の、瞋恚强勢弛まず去らず、難なく岸根に泳ぎ付き、照る月顔を水鏡、見れば額に角生立ち、髪も形も我ながら、冷じや恐しやと、しばし忙れて立つたりしが、「もう此姿に成るからは、迚も連添ふ望は絶えた。我添はぬから人も厭、錦の前にのめ〳〵と、何の添はせう寢させうぞ。可愛さ餘つて憎さが百倍、取殺さいで置かうか」と、又駈出す草履塚、松原過ぎて行先は、間近く見ゆる森林、棟門高塀白々と、甍竝べし道成寺、嬉しや爰ぞと走付き、門の戸險しく打叩けど、答も嵐の音ばかり、寺内ひつそと靜つたり。清姫「ムヽ、扨こそ〳〵、我追來る事疾く知つて、人を隱ひ置くからは、明けぬ筈通さぬ筈、こは何として入るべきぞ。ホウ究竟の事こそあれ、是よ〳〵」と門前の、一木の松に蔦葛、取るより早く飛上り、梢遙に傳ひ行く。裳裾は自然と蛇形の尾先、頭は憤怒の鬼女にひとしく、角をふり立て齒を鳴し、鱗を逆立てくる〳〵〳〵、枝を卷立て卷登り、塀を打越し眞逆樣、どうど落つると見えけるが、寺中俄に震動し、鐘樓の撞鐘鳴りわたり、響渡れる有樣は、百千の雷も一度に落來るごとくにて、凄じなんども愚なり。わつと戰慄く同宿共、門の戸開き飛んで出で、同宿共「ナウ怖や恐しや、安珍樣のお頼故、鐘の中へ隱したりや、清姫が追うて來て忽ち蛇身に成るや否、鐘を纏うて熱鐵にし、いとしなげに安珍樣を、蒸殺にし居つた。サアヽおぢや地頭へ此樣子注進せう」と裾端折り、かけ出す空も曉の、鳥のなく音や鐘の聲、跡に響くも三重魂呼ひ、閨の中より清姫は、魘怯え走出で、邊見廻しうろ〳〵きよろ〳〵、額を撫つ身をさすり、忙然として立ちたりしが、心づく程怖しさ、「扨は今のは夢で有つたか」ハアはつと計に伏轉び、泣くより外の事ぞなき。妙共興醒め顔、妙共「ソレ見やの白菊、先にからふ

んすんとお聲が高いは、魘れなさるゝ物であろ。起しませうと云うたれば、イヤありや甘い夢見なさるのぢや。其儘おけと猪口才ばつかり、ヲヽ、おいとしほや、能々怖い夢で有つたか。此お汗の出た事わい、幸お藥も煎上げた、一口上つてお心を鎭めなされ。夢は五臟の業と申して、氣の草臥で恐しい事も見る物、それを咄すが懺悔とやら、又逆夢とて好い事も有る物、マアどんな夢御覽うじた、ちよつとお聞しなされませ。サア〳〵どうぢやと」口々に、問へど答もない嗾、「それが何のむづかる事、お氣の弱い」と、とりぐ〵に、諫めつ賺しつ氣の毒さ、背撫でさする計なり。折柄表に下部が聲、「他戸の皇子の雜掌、鷲塚彈正殿御出なり」と呼はれば、「それまあ姫君お部屋へやりましや。お袋樣へ使者の樣子申上げん」と立騷ぎ、皆々奥へ入りにける。程なく立入る鷲塚彈正國秀、底意地惡き面癖も、主の威光をはゐ袴、肩肘怒らしのつさのつさ、對客の間へ打通り、上座に就けば母は立出で手をつかへ、母「先以て遠路の所御苦勞千萬、何事かは存ぜねども、お使者とあれば、躬新左衞門が承る筈なれども、用事有つて今朝より他行いたす、苦しからぬ事ならば、憚ながら此母へ仰置かれて下さりませ」鷲塚「ヲヽ、同姓の老母へ申渡すは、新左衞門も同然、よく聞れよ、使者の趣餘の儀にあらず、定めて聞きも及ばれん、主君他戸の皇子御尋の錦の前、安珍諸共此家に隱ひ置かれし由、言語同斷不屈なれども、

其儀は御容赦、急ぎ兩人の首打て渡さるべしとの仰、イヤサ驚き召れな、委細は齒醫者元隆が身が旅宿へ注進遁はない。陳じ立召さるゝと踏込んで家搜、サア目通りへ引出し召され。ヤア家來共首桶持て、早く〳〵」と迫立てゝ、退引させぬ歪み頰、はつと思へどさあらぬ體、母「仰の通り安珍殿は、昨日ちよと立寄られしが、熊野權現へ參詣するとて、此家は直樣出られましたりや、それから先は存ぜぬ事、又錦の前樣とやらは、此母にも深く隱し、躬新左衞門が隱ひ置きたれば、留守の内に首打つて渡す事」鷲塚「ならぬといふのか」母「イヤ左樣ではござりませぬが、私は何にも樣子を存ぜず、姫君には、何の科で首打てと仰るな」鷲塚「ハテそりや知れた事さ、今一天四海を掌握有る他戸の皇子、色好を能知つて御心に隨へんと、諸國の人民我一に美女を選つてさし上ぐれば、御所はもや〳〵おし合ひへし合ひ、女が集んで爪もたゝぬ。其大勢の美女をさし置きうつ惚給ふ錦の前、有難しと尻もつ立てあつちから拜膳する筈、安珍と腐れ合ひつゝ走る徒者、首切るは理の當然、新左衞門は留守で有らうが、紙子著て川へ打投められうがそりや構はぬ。今打放すきり〳〵出しやれさ」母「ハアヽそれでさらりと樣子が知れた、高いも低いも男が女に嫌れては、一分たゝねばお腹立は御尤、そんなら是非に彼方の首を」鷲塚「たつた今ころりと云はす」母「ホウそれもお使者の役なれば御尤、去ながら、親子の中でも遠慮も有り義理も有

り、留守の間にころりはあんまり爲たいがいなと、此母を恨ませう、願はくは直々に仰渡され、如何樣共お心任と申します内にも歸りませう、御苦勞ながら今暫、何卒お待ち下さるべし」と、餘儀なさ、詞に眉をしはめ、鷲塚「ハテどう云へば斯う云ふと面倒い困つた物、尺寸の間も猶豫ならぬ、主命なれども爰は身が了簡、高が首さへ受取れば御前は濟む、エイハ新左衞門がお歸りやる迄待つてくれう」母「ハア、是は近頃忝ひ御了簡、然らば一間へ、ソレ女子共御案内申せ、御家來衆後程迎ひに、コリヤ白菊、お使者が退屈なされぬ樣、お氣晴に酒一つ、隨分と御馳走申してくれ」鷲塚「何さ〳〵酒所望にない馳走いらぬ、それ共に兩人が首今討放さば、それを肴に一盃呑う、女郎どもどしめかずと案内せい」と睨み散して入りにける。時も移さず立歸る新左衞門尉俊綱、常に替りし屈託顏、諸手を組んで眉に皺、母も心を揉む最中、母「よい所へ戻りやつた、今皇子の使者として、鷲塚彈正が來ていふには、錦の前安珍兩人共に此家に居る事、元隆の注進、首打て出せと有るゆゑ、安珍は熊野權現へ參詣と言譯立て共、姫君はどうも遁ず、新左衞門が歸る迄暫くお控へ下されと、一寸遁に云延し、一と間に待たせ置いたり。どうぞお命助けまする分別は有るまいか」と、氣をいら立つれば、新左「さこそ〳〵、隱すより顯るゝはなしと、姫君是にまします事、元隆が注進せず共、草を分つて詮議すれば、洩聞えん事疾より察し、たとひ乞食非人でも、似合しき者あらば、代りを立て、御命を救はんものと、日々に心懸れども、只今に至るまで、左樣の者も出合はぬは、御運の極め是非もなし、痛はしくは存ずれども、御首打つて鷲塚へ」母「イヤ是急きやんな、早まるまい。此瀨戸際に身代とまで思ひ付きながら、御首を渡さんとは、日頃に似合はぬ粗忽々々」新左「とは又何故な」母「ハテ身代があるわいの」新左「シテそりや何處に」母「イヤ外でもない、娘清姫」新左「譯もない事、尤彼が面體よく似たれば、某も疾に心付きながら、討つ事ならぬ仔細は、此新左衞門は先腹の子、妹清姫はお前の實子、一腹ならぬ兄ゆゑに、情なくも手にかけしと、未來永々恨まん事不便なれば、此儀に於てはなりませぬ」母「イヤそりや以ては同じ事、幸ひな身代有りながら、實子の命惜んで、なさぬ中の兄が忠義を立てさせぬと、世間の人に云はれては、此母が立たぬ。それはともあれ、現在實の親が指圖して首討すに、娘が其方を何の恨まう、隙取つては爲にならぬ、ドレ清姫を呼出さう」と、立つを引止め、新左「コレ母人、どうあつてもそりやなるまい」「イヤ〳〵是非に」と爭ふ所へ、間近く聞ゆる鍔音刃音、こは何事と騷ぐ内、錦の前と清姫が、雙方薄手負ひながら、打合ひ切合ひ切結び、追つ捲つ驅出づれば、はつと二人が中に入り、押分け新左衞門、清姫をはつたと睨付け、新左「エ、エ憎くい女郎め、此兄が心を碎く始終の樣子を知りながら、數度の意見を用ひず、儕

が望を叶へんと、我儘働くのみならず、大切なる姫君に、かすり手負ふせる天罰知らず、もう義理も情もない、生置いては主人の妨げ、打放さん」と、手を懸くる柄に取付き　母「待つた〳〵、全く此母が娘を庇ひ、止るではない、たつた一言いふ事あり」と押鎮め、母「コリヤやい娘、今も今、親子の義理づく、諍ふも皆忠義、其中で此樣な大それた事仕出し、母が顔まで、好う汚すなあ。ほんに〳〵姫君は、元より新右衞門の手前も面目ない、昨日の樣子を見るからに、如何なる過あらうかと、此母が胸は板、手も口もだるい程、意見折檻色品かへても聞入れず、執著深い心から、此恥さらし業さらし、どうした因果な生性、憎うて〳〵何と云はう樣がない。コリヤとても助け置かれぬ命、今兄の手にかゝるとも、せめて一言御赦されて下されませと、姫君にお侘を申し、潔う死んでくれ、是程の事辨へぬは、鳥獸にも劣つた根性、エッエ淺ましや悲しや」と、口說き歎けば清姫は、顏ふりあげて、清姫「ナウ母樣、お腹立も憎しみも、重重尤去りながら、全く錦の前樣を恨妬で手は負はせぬ。最前からお前方の切ない諍ひ、陰ながら聞く悲しさ、血を分けた兄弟なれば、何程お勸めなされても、兄樣が義理を立て、とても身代に立て給はじ、何とぞ錦の前樣のお命に代つて死なんものと、態と戀の意趣に取りなし、無體を云ひかけ拔刀、此方から先に打廻れば、姫君もこらへかね、切付け給ふを受けつ流しつ、戰ふ振も皆手投、殊に我身をさし付けて、切らるゝ覺悟でせし事ぞや。心ばかりははやれども、かよわき女の刀業、一思ひに切れはせで、却てあなたに手を負せた、勿體なさ恐しさ、今更悔むに其甲斐なし。とは云へ今まで安珍樣を戀ひこがれた我なれば、是も誠とし給ふまじ、死んだ跡での言譯と、認めおきし此書置、見て疑を晴してたべ」と、懷より取出す一通、母は取上げ押開き、母「コレ〳〵、姫君、新左衞門も見てたもれ、今の詞に違はない、それでこそ我子なれ、出來した〳〵けなげ者」と、さし寄つて撫さすり、褒美の詞も心は不便さ、目にもる涙おし包み、笑顏つくれば錦の前、錦の前「其心とは知らずして、非道の刃にむざ〳〵と、切らるゝ事の口惜さに、あしらふ刀もならはぬ業、ついねがそれて此樣な、むごたらしい事してのけた、こらへてたも、赦してたも。如何した緣かかほどまで、揃ひも揃ふ親子の忠節、身代と立てるも自ゆゑ、先だつてもいふ通り、皇子方の詮議强ければ、とても遁れぬ我が命、今手にかけて使者へ渡し、清姫を助けてたも、賴む〳〵」と手を合せ、首さしのべて、待ち給へば、新左衞門押退けて、聲あらゝげ、新左「ヤア聞分なし姫君、妹が健氣の言譯、得心で立つ御身代無下になさるゝは、ソリヤお情ない。何事も我々次第に打任せ、サア構はずと一間へござれさ」錦の前「イヤなんぼでも清姫は、殺さす事ならぬ〳〵」　新左「是はどうした御合點」と、制する内に清姫が、

刀逆手に取直し、吭の鎖を搔切れば、覺悟しながら新左衞門、母も驚きうろ〳〵涙、錦の前は猶悲しく、錦の前「其方を殺すまい爲に、兎や角いふを聞きながら、早まつた事仕やつた。情なや悲しや」と、絶り付いて泣き給へば、清姫くるしき息をつぎ、清姫「お志は嬉しいが、私はお前の身代に、今たゞずともどうで死なねばならぬ譯、恥しながら聞いてたべ、宿世如何なる因果にや、安珍樣を思ひそめ、身も世もあられず、戀ひこがるゝ心から、今朝曉見た夢に、我身を捨置き、お前にそはんと、逃行く男の恨めしく、生ながら蛇身となり、道成寺へ追駈け行き、鐘を纏うて炎に焦し、安珍樣を取殺したと見たはまざ〳〵正夢の、覺て悲しさ恐しさ、我身ながら愛憎か盡き、直に髪切り、菩提の道に入る合點それともに、迷ひ安きは人心、たとひ姿を墨に染めても、安珍樣の顔を見ば、忽ち瞋恚の角も生え、身中は鱗炎を吐き、苦患に苦患を積むは必定、生ながら畜生道、地獄の種を蒔ん悲しさ、今本心になりし時、早う冥土へ旅立つて、此世の業を果さんと、思ふ折節お身がはり、お役に立つて死ぬると思へばせめても本望、私はなんぼう嬉しいぞや。とに角此身は先生より、廻る因果に責められて、恨に恨、仇に仇、數も限らぬ罪科を、背負て歸る未來の闇、不便と思ひ何事も、御赦されて下さりませ、安珍樣へも此通り、お傳へなされて何時までも、仲好う添うて下さりませ。云置く事も是ばかり、もう目も見えず、耳も聞えぬ、お別れ申す姫君樣、兄樣母樣もうさらば、南無阿彌陀佛」、彌陀佛の、聲も此世の名殘の霜、消えて果敢なくなりにけり。ハア〳〵はつと錦の前正體涙にくれ給へば、母も堪へかね聲を上げ、母「禍德に勝たずといふに、家に傳はる雷鳴丸、守となる劍が無きゆゑ、大事が出來、ふと案じたも斯うした憂目を見やう端、いかなる惡事災難も、此母が身にかゝりはせで、末賴ある娘に祟り、非業の死をすると思へば、一倍可愛さいぢらしさ、義理も恥辱も忍ばれぬ悲しうござる」と繰言も、甲斐なき死骸に抱き付き、前後不覺に取亂す、倶に不便さ新左衞門、目に持つ涙打拂ひ、新左「コレ〳〵母人未練々々、隙取て驚塚に、氣取れては一大事、奥へ心を付けられよ」と、引のけ押退け妹が首、はつしと切れば母親は泣く〳〵一間をさし覗き、母「コレ氣遣ない、急きやるな〳〵、使者は酒に醉臥して、前後も知らぬ高鼾」新左「マそれは重疊、よい首尾」と、首取をさむる時こそあれ、土砂踏み散し駈來る安珍、緣先にすた〳〵息、安珍「某夜前此家を出で、道成寺へ赴きしを、嫉妬深き清姫、捨置き逃ると心得しか跡を慕うて追驅くる、形は眼前大蛇となり、我が隱れたる鐘を卷き既に燒死ぬべき處、日比信ずる熊野權現の御名を唱へしかば、不思議に命助かりしと、思へば忽ち夢さめしが、果して鐘は鐘樓よりおちて熱鐵となり、いまだほとぼり冷めず、訝きは清姫、身の上恙なかりしか、心元なし、樣

子はいかに」と、色をかへて語らるれば、人々奇異の思ひをなし、割符を合す夢物語、敢なき最期の次第まで、語るも涙聞く涙、安珍大きに仰天あり、安珍「ナニ清姫は死したるとや、扨こそ胸にこたへし變怪、恨妬も一筋に、思ひ込んだる眞實心、はかなき緣とも知らずして、一生我を戀ひこがれ、苦に苦みを重るのみか、錦の前が代りに立ち、命を捨てる心根を思ひやるさへいぢらしや。今一足早からば、せめて末期に詞も交し、心よう往生させんに、不便の者の身の果や」と、人目も恥ず聲を上げ、歎き沈ませ給ふにぞ、猶も涙は止め得ぬ、姫君母も諸共に、又咽かへるばかりなり。新左衛門はつと心付き「マア泣いて居る所でなし、御兩所の首受取らんと、一間に控へし鷲塚に、見付られては叶ふまじ、安珍樣には姫君を伴つて、疾く何方へも落ち給へ、早く〳〵」と氣を苛てば、心得たりと身繕ひ、「サア姫おぢや」と手を取つて、既に出でんとし給ふ處へ、襖蹴放し駈出る鷲塚彈正、飛かゝつて安珍姫君、兩手に摑んでぐつと引寄せ、鷲塚「馬鹿つくすな新左衛門、呑まぬ酒に醉うた面して窺つたは、甘い方便を見やう爲、身替り古い贋物喰ぬ、サア我目通で此兩人、首打て渡せばよし、獸といふと鷲塚が、摑挫に雜作はない、返答せい新左衛門、なんと〳〵」と、憎ざうなる面魂は天の邪鬼、多門天の加護ならで遁れんべうは見えざりけり。新左「案外なり鷲塚、愚者に向つて此新左衛門、まだ〳〵と返答ないい、斯く顯るゝ上は破かぶれ、天地は覆くり返るとも、御兩所を渡さうか、いらざる無駄骨折らんより、素手振つて疾とゝ歸れさ、意地張ると首が飛ぞ」鷲塚「ハヽヽヽヽ、此鷲塚が首骨は金輪際より生拔し鐵石同前、汝如きの刀が立うか」新左「チヽ、立つかたゝぬか、覺の刀受けて見よ」とずばと拔き、打かくれば、まつかせと、兩手に摑し二人を突出で、「サア左か所望か右から切るか、ヤレうて、ソレきれサア〳〵」と、劒の下にさし付ける。二人の心は消入るばかり、母も傍から、アレあぶ〳〵、さしもに猛き新左衛門、人質にあぐみはて、進みもやらずうろ〳〵と、詮方盡て見えたる所に、思ひがけなき大橋元隆、忍び入りたる床の下、疊はね上げ飛で出で、元隆「ホヽ、出來されたり鷲塚、貴殿仰を承はり、此家へ向はるゝといへども、若二心もあらんかと、忍びて樣子を窺ひしに、天晴々々鷲き入つたる忠心、早く二人の首討れよ、妨する新左衛門は某が受取た、眞二ツにしてこます」と、切付るを、はつしと受け、二打三打闘ううち、鷲塚すかさず後より、すらりとぬいて元隆が、肩腰かけて大袈裟切ばらりずんと打放せば、人々是はと一度恟り　鷲塚「ヤア騷ぐまい〳〵」と飛びすさつて兩手をつき、鷲塚「某元來濱成が胤なれば、御兩所ともに疎略に致さう樣はなし、其上先年蹴鞠御會の節酒狂によつて傍輩を過ち切腹に極りしを、姫君の御父道成公の御憐愍をもつて命助りし御恩、片時も忘るゝ事なく、

道ならぬ皇子に仕へ、數度の諫言用ひなければ、折をもつて身退かんと存ずる折柄、御兩所の首受取との役目は幸、何とぞお命助けんと思慮を廻らす所に、此元隆が忍び居る事、最前熟と見付し故態と無情く計ふたり、此上は少も御氣遣あるまじ、御兩所の身替は某が受取て主人の手前首尾能せん」と、忽天地と立替る鷲塚忠心に、二かたの御悅び、新左衞門も安堵の思ひ、新左「先は祝著さりながら、妹が首を姫君のかはりに立るは似寄し事、安珍樣の身替には何れをもつて」鷲塚「ハテそりや此元隆が首さ」新左「イヤ〳〵是は雪と墨、似ても似付かぬ面體」鷲塚「サア其似付ぬ首をもつて、身替に立樣は、まづ此通り」と首搔落し傍に沸れる藥鍋、おつ取て打かくれば、忽ち熱湯せんりうと、濺ぎ爛れてあやめもなき首さし出して、鷲塚「コレ見られたか、此安珍は淸姫が所爲によつて、道成寺の鐘の中にて燒爛れしと、ナ眞直に申上ぐれば御前は濟む、元より蛇身と成つたる淸姫、雲に跨り失せたれば顏も形もない筈、ナ合點か、といふが大事の方便、國々末世末代まで淸姫は、現在大蛇と成つて安珍を取殺したと、世上へ廣く沙汰するやう、披露あるが肝要、御兩所は山城の國葛野郡にまします、親王(ハ)御方へ急ぎ落させ給へと、敎はせぬ勝手に召れ。ナニ老母新左衞門、コレサ何をうろ〳〵、久し振で不時の對面祝著々々、緣あらば重て逢ふ罷歸る。ござらうか、さらば〳〵」と首桶携へしづ〳〵と、立いづる情の禮はなまなかに、云はぬが云ふにましくる恩愛、娘よ我子と昨夜まで、呼れし姿も曉は、きえて行方もなき魂を、こがるゝも夢迷ふも夢、夢と見するも後の世に、夢といふべき言の葉も、なく〳〵別れ行く空も、心もくれてさめ〴〵と、降は涙か村雨か、濡れぬ袂はなかりけり。

第五

鐘は一魚千頭の苦身一聽鐘聲の所に離れ、永く菩提の因種を成すとかや。往昔右大臣橘道成卿の御建立、紀州日高の道成寺淸姫が所爲によつて、久しく撞鐘退轉せしを、御弟子行海再び鐘鑄の志願を立て、既に成就してければ、庭に折咲く櫻木を假の鐘樓と鐘をかけ、今日ぞ供養の道場に老若貴賤の參詣も、女人を堅く制するは、不時の鐘碍を隔の高塀、尊き寺は門からと實も殊勝に見えにけり。當時他戸の皇子の命によつて、供養の役人熊川玄蕃、相役眞子の新左衞門尉後綱、しづ〳〵と入り來れば、住持行海和尙出向ひ、行海「先づ以て御兩所ともに御苦勞千萬絕て久き當寺の撞鐘、信心の輩助力を加へし故、此度あらたに鑄立て愚僧が大願成就いたせば、いか許り大慶」と挨拶あれば、熊川玄蕃、玄蕃「誠に當寺は、文武天皇の勅願所道成の

建立、最上の鐘も有りしを、是なる新左衛門の妹清姫が所爲によつて、熱鐵となし失せたれば、他力を頼まず新左衛門、自ら寄進召るゝ筈、しらぬ顔で奉加さするは蟲強い穿鑿」と、例の雜言耳にもかけず新左衛門、新左「手前は鐘樓寄進の契約、鐘の奉加は和尙の望」行海「いかにもいかにも愚僧が願望、惣じて鐘鑄と申すは有緣無緣の衆生を勸め、無數の罪障を消滅さする爲なれば、他力を主と致すが法義、在俗の御存なき事。ヤアとかふ申す內午の上刻、鐘供養の時至れり、いで〳〵用意いたさん」と力丈さして三重

今樣亂拍子

つくりし罪も消えぬべし〳〵、鐘の供養に參らん。是は此國の傍に住む白拍子にて候。扨も道成寺と申す御寺に、鐘の供養の御入り候よし申し候程に、只今參らばやと思ひ候。月はほどなく入り潮の〳〵、煙みちくる小松原、急ぐ心かまだ暮ぬ、日高の寺に著にけり〳〵。櫻子「いかに申し候、是は此國の傍に、と云うては堅い。定てお前方も聞及んでござんせう。私櫻子といふ白拍子、鐘の供養と聞て拜たさに來たわいな。其處へ通してくれなさんせ」と、いふも媚く姿の花、玄蕃も暫し見とれしが、玄蕃「コリヤ〳〵女、此寺は子細有つて、鐘供養の場へ女人禁制、其處立て早歸れ」と、苦り切つたる我は顏叱り付れば、櫻子「サア其子細は聞及ぶ、清姫の恨殘て、又もや仇をなさんかと、恐ての事で有うが、女子も女子によりけり、私隱もない白拍子、胡散な者ぢやないわいな。斯した場につらなれば、五障三從とやら女の罪を遁るゝため供養を拜んだ代には、お望み次第何成と、舞てお目にかけふがな」玄蕃「イヤサ舞謠も見たうない、禁制なれば何時迄も通す事ならぬ、邪魔ひろがば家來に云ひ付け、引ずり出すが歸らぬか」と、きめ付れば新左衛門、新左「イヤ先待れよ玄蕃殿、すべて佛事に舞樂を以て供養する事、歌舞の菩薩の員數にして、三國傳來是を學べば、斯かる砌に白拍子が來るは幸、殊に櫻子は今樣に名を得し事聞及ぶ。苦うない一曲奏でい、それ〳〵早う」と勸れば、はつと答も柔かに姿の立木若楓、はでな模樣も今樣の、扇開いて聲をあけ、櫻子「先青陽の朝には、谷の戶出る鶯の、聲なかりせば雪きえぬ、山里如何に、春を知らまし、絲遊に柳櫻をこきまぜて、都の人の行き交も、花に誘はれ招かれて、思ひ〳〵の晴小袖、伊達とじみとを染分けて數も限らぬ幕の內、音締を高く引く糸の、梅は咲かねど鶯の、折々通ふ心意氣、さうぢやといな、花の盛はちらちらちら、散來る我思ひ、眞實さうぢやいな、さうぢやそれかと夕間暮、蚊遣ふすぶる賤家の軒を、ほと〳〵叩く水鷄の烏、卯の花菖蒲かほよ花、咲いたか〳〵盃の、廻る月日も夏過て、秋

は名にあふ更科や、月にうつらふ萩桔梗、尾花尾車女郎花、影に妻戀ふ小鹿の聲、かいろと鳴くと知らせたや。紫蘭芙蓉の花よりも、紅葉よりも戀しき人は、見たい物ぢや、見えつ見られつ水の面、流の身にはうき事も、又よき事も荒海に、帆かけし舟の風次第、揉れて我も身をづくし、心づくしの數々を、いはでの森か松原の、葉越に見ゆる鎗印、對のお道具飾り馬、臺笠立傘大鳥毛、行列揃へてほつ立てろ。宿入り下馬先玄關先、けんがくはりかけぶつかけろ、合點か、合點だ、踵をぶん付、頤突出し、手先を揃へてすつすのす、振好や見よやな今降つもる雪の暮、峯も尾上もおしなべて、皆白妙やしろ〳〵と、明行くも鐘暮るも鐘、思ひ有る身は聞くたびに、つらやうるさや腹立や、此方にもなり彼方にも、鳴か響くぞアレごん〳〵、鐘に恨は數々ござる、先初夜の鐘を撞く時は、諸行無常と響くなり。後夜の鐘を聞く時は、是生滅法とひどくなり。晨鐘の響は生滅滅已、入相は寂滅爲樂と響けども、我は五障の雲晴れて、眞如の月をながめ明さん」眺も盡きせぬ四季の景色、玄蕃も思はず聲を上げやつちや〳〵。玄蕃「イヤ何新左殿、最前は胡亂なるかと疑つて叱つたが、紛もない白拍子、櫻子と名を取りし程有つて扇の手の開山、迚もの事に今一曲、面白き事所望々々」櫻子「あら嬉しや涯分舞を舞ひ候べし。嬉しやさらば舞はん」とて、あれにまします宮人の、烏帽子を暫し假に著て、既に拍子をすゝめけり。「花の外には松ばかり〳〵、暮れ初て鐘や響くらん。道成喇は承り、始めて伽藍橘の、道成興行の寺なればとて、道成寺とは名付たりや山寺のや、春の夕暮きて見れば、入相の鐘に花ぞ散りける、花ぞ散りける〳〵」謠ひ返し舞ひ返し、祕曲を盡す今樣に、二人の役人參詣の、老若貴賤諸共に、暫く興に入りにけり。櫻子は人々の油斷を窮ひ折よしと、立舞ふ樣に狙ひ寄つて、玄蕃が髑髏只一打と、切付くるを抜合せて丁と受けとめ、玄蕃「扨こそ〳〵、供養を守護する我々に、仇なす女疑ひもなき清姫が怨靈よな。如何なる惡鬼惡龍も、玄蕃が刀に切りしたがへ、永く障碍の根を絶たん」と、開いて付込み打合ひ切合ひ、たゞかふ内に玄蕃が刀、疊みかけて打落され、指添ずばと抜放せば、忽ち鳴出す雷の音、天地も裂くる計なり。膽にこたへ我ながら、南無三寶一大事と、袖に隱しうろつく内、新左衞門立廻り、櫻にかけたる鐘の釣綱切落し、邪魔な女と鐘に入れ、玄蕃が髑髏取て引伏せ、新左「コリヤ此劍は某が、家に傳はる雷鳴丸、是を所持した俺が本名、林專太夫で有らうがな。眞直に白狀」とひしぎ付くれば、玄蕃「成程劍は雷鳴丸、皇子より預り置いた此玄蕃を、專太夫とやう名を聞いた事もない。粗忽して後悔せられな」玄蕃「ヤアまだ論爭ふは比怯奴、頭上より脚下迄切きざんで白狀させん」と、刀さし付せ違ふ所に、鐘の中より「暫く〳〵待つた〳〵」と聲をかけ、撞鐘摑んでぐつとさし上げ、

顯れ出づる白拍子、女姿を引きかへて、緑の角髪ふり亂し、肌に腹巻小手肱當、嶽然と立つたるは、摩利支天の前髪立、今見るごとき勢なり。源藏「ヤア〳〵新左衛門、其奴詮議に及ばず、雷鳴丸を所持するからは專太夫に極つたり。我こそ權頭兼政が躬、同名源藏兼連、親の敵を討たん爲樣々に身をやつし、廻り合ひたる今月今日、貴殿がかすり手負ふせても、某が本望ならず、尋常に勝負せん、そこ退れよ俊綱」と鐘投捨て立向へば、實尤と新左衛門、腕先取つて引立つれば、遁ぬ所と專太夫、飛退いてつき上り「推量に違はず、汝が親を手にかけた林專太夫とは我事、敵で有らうが仇で有らうが、當時皇子の家來に對し、慮外働く命しらず、皇子は熊野詣を幸、親王方の者を搦めん爲、此麓に御在宿、いで〳〵手配見せ付けん」と、合圖の呼子を吹立つれば、森蔭樹間に忍びし大勢、拔きつれ〳〵打つてかゝる其隙に、逃げんとうろつく專太夫、遁さじ遣らじと新左衛門、寺中をさして追うて行く。源藏兼連事ともせず、四方に寄來る多勢を相手、ヤア東方から御座んせ、南方にぐんにやりめら、西方に大いかずとも、北方蜻蛉蜻蜓めら、中に揃に大小えらばず、腦鉢碎いてぼんさらば、來い〳〵〳〵」と小踊して、當るを幸人碎、ばらり〳〵と打付けはね付け打みしやげば、さしもの大勢大半討れ、殘る奴原足腰かゝへ、皆散々に逃失せけり。玄蕃は寺中を追廻され、度を失つて逃出れば、跡に續いて新左衛門、「ソレ遁すな」「合點」と、向ふに突立つ源藏兼連、その首摑んでどうどのめらせ踏付れば、群集の中を押分けかき分けかけくる苅藻が聲をかけ、苅藻「コレ〳〵葛城源藏樣、本望お遂げなされたら、約束の敵討勝負々々〳〵」と立ちかゝる。源藏「ヲヽ、合點、今暫く我から先へ本望遂げん、專太夫恨の刃受けとれ」と、振上れば新左衛門、新左「待つた〳〵、契約なれば討てば討るゝ筈なれども、源藏が粗忽にて鄕右衛門を討たるも此專太夫、儕が命遁れん爲、方々へ宿替して、家札を殘し取違へさする巧、皆是彼がなす業なれば、强ち源藏を敵と討て本意でなし。鄕右衛門を討せし重罪、苅藻が討で叶はぬ敵、ソレ〳〵よつて一の太刀、二の太刀は源藏兩人共に本望遂げた」と、事を分たる一言に、實尤と拔放し、苅藻「親鄕右衛門を討つたる敵、思ひ知れ」と切付れば、つゞいて源藏、源藏「父權頭を討つたる恨報ぜん」と、切付け〳〵、二人一所に留の刀、さしも健氣に心地よき。時しも駈來る他力坊、始終を聞いて、他力坊「出來た出來た便なき此苅藻身の片付を賴みたし、此後互に遺恨なきやう、源藏殿の婦妻にせば、親々の追善是にましたる供養はあらじ、偏に願ふ兼連殿、源藏「イヤ〳〵それは互に心好からず、敵を首尾能く打た上恨はない」と辭退も會釋、新左衛門も立寄つて、是非に〳〵と手を取りて、勸むる功德俱々に、結び合する二世の妻、不思議の緣により糸の、長き妹脊と成りにけり。折

節麓に鬨の聲、どつと寄來る他戸の皇子、山も崩るゝ大聲にて、皇子「雷鳴丸を奪ひ取り、玄蕃を討つたる奴原、一々に引裂かん」と、飛びかゝるを新左衛門、源藏諸共兩方より、むんづと組めば事共せず、「シヤ小賢しき蛆蟲奴等」と、兩手に摑んで引寄すれば、二人も負けじと五臟を揉み、組合ひ捻合ひ根競、しばし勝負もつかざる所に、和氣の藏人かけ來り、思ひかけなく後より、諸足薙いで皇子を押伏せ、「勅諚なり」と呼はつて、既に斯うよと見えける時、鷲塚彈正駈け來り、鷲塚「コレ〳〵藏人、惡人とは言ひながら、三公だにも死罪の例なし、況や天孫、劍を當つるは恐れあり、しばらく我に預けよ」といへども聞かず、藏人「ならぬ〳〵、萬民を苦しむる大罪、助け置いては天下の歎」と、爭ふ所へ駈け來る百川、百川「ヤレ早まるな暫く〳〵、皇子へかける繩こそあれ」と、神の岩戸の御注連繩、躰に確乎と纏ひ付け、「佐渡の配所へ御移り、鷲塚彈正供せよ」と、引立て申せばさすが又、神の御末の德有りて、張切もせず打萎れ、引れ出づるも神國の、直なる處に安々と、治り靡く竹の末、豐なる代の例ぞと、世々に傳へて書きしるす。

傾城阿波の鳴門

第一

唐の七賢、嵇廣、既籍、元咸、尙秀、王戎、山濤、列伶、思ひ〳〵に出立つて、離山の麓、長林竹に會合あり、種々の遊宴たのしけれ。嵇廣各〻に打ちむかひ　嵇「誠や琴詩酒の三ツの友、あら面白の氣色やな」竹の林に猛虎住み、池中は龍の住家といへども、此七賢は事かはり、竹中に酒を愛して蛇呑といふ、異名も殊にこつぷの盃、酌かはしたる不老不死、さいつ、押へつ盃の、間の手元を見ての間、廻る酒宴に、唐歌の、ちやんほんりんとん、すべろんちや、ぶくすい、べい〳〵、ぴん〳〵ろじつ〳〵、ぱい〳〵すべい、ろんびん〳〵、ゑい〳〵さ、諷ふ唱歌のあやもなき。「サ是からは拳酒」と、又つぎかけて、呑めや諷へや絲竹の、緣に雀の一踊、拳を拍子の踊ぶり、ムテ、チエイ、ロマ、ヤツトセイヨイ、ヤツトセイヨイ〳〵、ウ、キウ、ムテ、ヤツトセイヨイ〳〵、ゴウ、チエイ、ハマ、ヤツトセイヨイ〳〵、こんな踊が日本にあろか、有るは既籍が懷中と、一卷を取出せば、六人立寄りさら〳〵さつと押披き、立別れ讀む有樣は、屏風襖の繪そら言、虛八百の

文言と笑ふに、太夫引舟禿、ばら〳〵と走寄り、太夫「愁廣す、エ、憎」と、捻り擲かれあいたしこ、「是は七賢けんによもない、赦せ〳〵」と逃廻れば、亭主九八押へだて、九八「ア、申し高雄様、お恨は御尤、是は一番我等が貰ひ」と、いへども太夫は、太夫「イエ〳〵、此間から心のたけを書いた文、一ッに繼いで虚八百のと今のしだら、わたしや腹が立つわいなア」九八「ヲヲ太夫すのが皆道理、私とてもナウ三彌」三彌「アイ私も俱に」と立かゝれば　愁廣「アヽコリヤ待て〳〵、わしは眞實に思へども、此末社の賢人共が、おだてかけての口拍子、祭の俄、下稽古、もう七賢人取置いて、中直しに奥座敷で酒にせう、堪忍仕や」といふに太夫は嬉しさの、笑顔に取付く牽頭持、牽頭持「サア御機嫌が直つたぞ九八様」九八「いかにも〳〵、東助、西助、佐渡七、辨助、大助、合點か」牽頭持「合點ぢや〳〵。旦那太夫すお先へ〳〵」手を引合ひて先に立つ。跡に皆々聲揃へ、「七賢人ぢや、西樂人ぢや、俄ぢや〳〵〳〵」と騒ぎ立ててぞ奥座敷、廓賑はふ大紋日、機嫌も吉原巴屋に、居續遊びの大名客、玉木衛門之助が大騒、美麗輝く燭臺の、火影まばゆき有様は喜見城ともいひつべし。大名風も打碎け、姿衛門もしどけなく、太夫末社を引連れて皆々座敷に入來り、衛門「サア〳〵是から酒にせう」ソレお銚子お盃、中居の政が會釋こぼしてつぎかくれば、衛門「チットこりや強い酌、にくさも憎し、助けてくれ」「ソレヤ大將の御無理が出た、したが憎けれど、助けて上げい」と、無息にずつと呑自慢、「テモけなやつ」と引受けて、衛門「サア太夫、中直りの盃」と、さらりと呑んで指す盃、高尾取上げ下戸の氣さんじ、ちよつと受け、太夫「中直りの盃は濟んだれど、堅けれどもお慮外ながら」と指しかゝれば次の間より、團八「しばらく〳〵、其間を仕らう」と、襖押し明けいか物作り一腰ぼつ込み、胸に一物邪面、のつさ〳〵と入來れば、たいこ持もじ氣味悪く、座敷の興も覺めにけり。衛門之助身繕ひ、衛門「ムンついに見馴ぬ男、太夫が間を好むは様子あらん、マア其方は何者なるぞ」團八「アイ此野郎めは、蛇河の團八といふ者でゐんす」衛門「ムンシテ此座敷へは何用あつて踏込んだ、サア〳〵仔細を語れ」と、氣色鋭く見えければ、團八は猶強付き、團八「イヤコレ、怖い顔さんすないの、阿州の大名玉木衛門之助殿でも、此廓へ入込めば、わしらと同じ客、揚屋の座敷酒間をする事は、成らぬ法でごんすかな」と、物工なる詞の端、衛門之助推量し、じつとおさへる胸の中、こらへず中居が引取つて、仲居「コレ申し、お近付でもないお方、頼みもせぬに問せうとは、チヽすかん、お前はほんに梶原平次、間をせうとはそりや無理ぢや。横間から指出ずと、だまつて去んで下ださんせ」團八「エヽあたやかましう嘲るまい、そもじにや構はぬ、今の跡をいうて聞かさう高がかうぢや。此高尾を見切めてから、我等首尺は愚、四五尺をまだ

其上、登詰めた梯子の曲が、呆れて居るぢやけれども、こなんが晝夜の揚詰、おれが手に廻らぬ故、けふ此座敷へしかけたは、太夫を貰ひに來たのぢや、かう團八が云出すからは、金輪際貰ひぬく。衛門殿、下あれ〳〵貰うた」と、腕まくりする堅横縞、竝居る者もあぶ〳〵と、手に汗握るばかりなり。衛門之助詞を和らげ、「ハテ思ひ寄らぬ事を聞く、成程太夫に夫程執心ならば、其方に遣さうといひたいが、マアならぬ。身が寵愛の此女、殊に身受も今日相濟み、今晩身が屋敷へ連歸る、夫に何ぞや、下郎の分際で、身が座敷へ踏込む慮外者、生置かぬ奴なれども、遊興の妨にもなれば今は赦す。叶はぬ願ひ早歸れ」と、きつと答ふる鸚鵡返し。團八「イヤ歸るまい、是非太夫を貰はにやいなぬ」と、聞くより中居はむしやくしや腹、仲居「コレ夫は餘り長であらう、あなたのお慈悲有難いと思うて、早ういなんせ。あたいやらしいあの顏わい」と、恥しめられても蛙の面、團八「さういへばもう腕づく、サア衛門、くれる氣か今一言いへ聞かう」と、場所のあしきを付込んで、喧嘩じかけの面魂。たいこの佐渡七押隔て、佐渡七「ア、申し〳〵團八樣、最前から旦那のおつしやる事を、打消しておつしやるは、きつい御無理、かう座敷がしらけては、私が商賣たいこ持も上つたり、御機嫌直して一つ上つて、お歸りなされて下さりませ」と、詫る程猶付上り、團八「そりや何ほざく、うぬらが知つた事でない、似合た樣にすつ込んでけつかれ」と、立蹴にかゝる足首捕へ、佐渡七「ハテ聞分のないお方、何ぼたいこ持ぢやとて同じ人間、お前のお脚でけらうとは、そりや餘りお胴欲、足元のあかい内、此お脚の滿足な中に、早うお歸りなされませ」と、足首しつかと痛むれば、顏を顰めて、團八「アイタ、、、こりや痛いがな〳〵、おのりやコリヤ手向ひをひろぐな」佐渡七「イヤ手向ひぢやない、足向ひぢや」團八「アイタ、、、、たいこ持に似合ぬ、こりや手ひどいめに合しをつた、モウ堪忍がならぬは」と、ずはと拔いて切懸ける、腕首摑んで捻上げる。佐渡七「最前から詞甘い中に歸れば、こんな病いめに合さぬ、御名を出されぬ遊里のお慈悲、腰骨に覺えたか」と、蹴飛す早業向ふへ輕業、間拍子もよいたいこ持、頓作もよき男なり。團八漸起上り、腰をかゝへて、團八「アイタ、、、、こりや又ふくりんかけたな、云分の有るやつなれど、了簡して去んでこますは。おのれ腰骨に、よう覺えたぞ、必ず覺えてけつかれ」と、ちんが〳〵、達者な物は口目玉、痛み〳〵もにらみ付け、足を引きずり歸りける。衛門「ヲ、佐渡七出かした〳〵。たいこ持に似合ぬ働き、そちは見上げた者ぢやなァ」佐渡七「ハイいやもう二才の時からの、ほで轉業が過ぎての此身分、今のお役に立つと申すも、藝は身を助くる程な不仕合と、申す樣なものでござりまする」衛門「いかにも〳〵。コリヤ當座の褒美」と山吹色を投出す。「エ、有難し」と戴けば、衛門「エ、埒もない奴がうせを

つて、興がさめた、氣をかへて離座敷で呑直さう」九八「そりやこそ旦那の御出ぢや、中居衆賴むぞ」ヒンヨイ〳〵、亭主がしやべるは、ヒンヨイ〳〵、打連れてこそ入りにけり。既に其日も黄昏に、人顔闇き樹木のかげ、切戸をそつと押開けて、忍び來るは以前の團八、跡に續いて定九郎、内の樣子を見廻す所に、時分を窺ひ奥よりそつと佐渡七が、傍に氣配立出でて、三人見合せ點頭き指足、庭の邊に立止り、定九郎小聲になり、定九郎「コリヤ佐渡七、そちも知る通り、小野田郡兵衛殿に賴まれて、衛門之助殿を殺す契約、然る所此間より此廓に居續の大騷、聞くを幸ひ其方を賴み置いたれども、吉左右心元なく、此團八を最前入込ましたが、何として殺して仕舞はぬ。樣子いかゞ」と尋ぬれば、佐渡七も摺寄つて、佐渡七「成程御賴み故昨日より座敷を勤め、仕果せたれば大金、殺すに油斷は致さねども、晝夜共に末社を集めて大騷、附々が多ければ只今までも延引。したか、又どして衛門之助殿を殺してお仕舞ひなさるよ、樣子が篤と承りたう存じます」定九郎「ヲヽ、成程不審尤、殿衛門之助一國の主として、酒宴遊興に長じ身持放埒、妾は其數知れず、夫のみならず國中の妹娘をかり集め、或は後家狩なんどと金銀を費し、樣樣と奢を極め、所詮生置いては我々が望も叶はず、郡兵衛殿と申合せ、密に殺す思案、仔細といふは此通り」と、我身の欲を尤に、云ひならべてぞ物がたる。佐渡七は打點き、佐渡七「ムン夫で樣子が知れました。したが最前團八樣見えたれども、あの手ぢやいかぬと思ふた故、實事仕を見しらかしたりや呑込んで、投げられさんした其ぎばの甘さ、イヤモウ芝居の敵役にしても金ぢやく〳〵」と、譽めれば團に乘り、團八「イヤ下地が有る、宮島の芝居も一年働いたて。ハヽヽ」佐渡七「さて衛門之助も今夜中にいぬる樣子、殺して仕舞ふ思案はないか」團八「サア、いつその事呼出して、コレ此合口でぐつさりいはして」定九郎「シイ聲が高い。此定九郎が極上々の思案有つて忍び入つた」佐渡七「ムヽシテ、其御思案はな」定九郎「ヲヽ、其思案は」と夕月夜、泉水の金魚をすくひ、手水鉢にうつし入れ、定九郎「コリヤ此樣に勢ひ能き金魚なれども、殺す思案はコレかう」と、懷中より藥取出し、水にそよげばこはいかに、働く魚も忽ちに色を變じて死てけり。二人の者は呆顔、團八「ハア奇妙」佐渡七「シテ此藥は」定九郎「ヲヽ、是こそ唐の著玉が傳ふる毒藥、此藥を酒に入れ、衛門之助に呑ませ、殺して仕舞へば手間隙入らず、併し仕損じまいものでもなし、團八は大門口に待伏して、衛門之助が歸るを待つて只一打、爰で逃がさば出口で討取る、兩方遁さぬ鎹思案」と、聞くより團八、團八「できたく〳〵。然らば佐渡七能い吉左右を待つて居る」ハツトばかりに團八は、大門口へと出でて行く。定九郎「コリヤ佐渡七、此妙藥はそちが氣轉で、ナ合點か」と、渡せば受取り、佐渡七「お氣遣なされますな、今宵の中に」定九郎「ヲヽ、でかした。身共

が顔を合しては後日の邪魔、身は屋敷へ罷歸る。隨分ぬかるな」おさらば、さらばと、手筈を極め定九郎、切戸口より立歸る。跡に佐渡七一工夫、奥を窺ふ其折柄、爰へ來るは衞門之助是幸ひと佐渡七は、勝手へ急ぎ行く跡へ、奥に末社を留め置いて、高雄伴ひ、衞門之助は立出でて、衞門「コレ太夫、今奥でとつくりと咄した通り、そなたと肌ふれ寐られぬといふ譯は、肌身を放さず所持してゐやる大切な一品、其譯さへ納らば、ハテ其時はどうなりとも、合點がいたか」大夫「アイ、とつくりと合點が參りました、忝うござんす」と、何か二人がしめやかに、話す間に佐渡七が、銚子盃持つて出で、佐渡七「コリヤ旦那手が悪い、私等をおまきのかばやき、太夫すとお二人甘いな〳〵。甘い次手に何と爰で、一つ上りませぬか」と、口は諸白心の悪酒、醉はしかけてぞ進むれば、衞門「ヲヽ是はようぞ氣が付いた、サア一つ呑まうかい。サア一つ注げ」さらばお酌と注ぎかくれば一つ受け、何か思案し、衞門「イヤ〳〵〳〵素直に呑んでは面白ない。サア一拳せう」佐渡七「ハテマア一つ上つてから、跡で一拳致しませう」衞門「イヤ〳〵どうやら呑むに拍子がない。サア〳〵是非に一拳」と、いふに違背も何のその、追付けて呑まさんと、佐渡七「サア參りませう」衞門「ロマ、チエイ、ハマ、おつと三拳サア勝ちぢや、佐渡七呑め」といはれて悔り、佐渡七「エヽ、アノ、此酒を私に」衞門「ヲ拳に負たりや知れた事」「アヽイエ〳〵めつさうな、是を呑んでたまるものでござりますか」衞門「ムン、すりやよう呑まぬぢやまで其筈々々。コリヤ佐渡七、此酒には毒藥が入れて有らうがな」と、星をさゝれて」佐渡七「何と」衞門「イヤ知るまいと思ふか、最前の物語皆聞いた、遁れぬ所覺悟せい」佐渡七「エヽ仕舞うた、見顯はしたれば百年目モウ是非に及ばぬ」と相口引拔き突きかくれば、衞門之助身をかはし、刃物もぎ取り緣より下へ蹴落せば、「コリヤかなはぬ」と佐渡七は、息も切戸にかけ出て、逸散にこそ逃げて行く。此物音に亭主末社ばら〳〵と走り出で、樣子を聞くより廓の見せしめと、追駈け行くを、衞門「コリヤ待て〳〵、詮議の有る奴なれども、身が存ずる旨有れば逃げば逃がせ、何もかもおれが心に取つてゐる〳〵、併し太夫が身受は日中に相濟み、此所に長居は無用、ナニ亭主、太夫を連れてモウ歸らう」と、いふに九八罷り出で九八「夫はお名殘惜う存じまする去ながら、此間からの大騒、世上での取さた、申し管領の御耳へもはいつた樣な噂、いか樣もうお歸りなされたもようございまする」衞門「ヲヽさうなうてもいぬる心、サア太夫おぢや」と立上れば、大夢「そんなら旦那、又近々に御來臨を、松の位太夫樣、サア隨分おまめで〳〵」と、たいこ中居も口々に、名殘を惜む暇乞、高尾も俱に盡せぬ思ひ、太夫「お前方も御無事で」と剛染涙の袖の露、衞門之助氣をかへて、衞門「皆も隨分まめで居い、又月見には、太夫を連れて大騒」と、大風にはい〳〵はい

と亭主がそゝり、九八「コレ〳〵たいこ衆、大門口まで七賢人の、はやしでお供はコリヤよからう。サア〳〵お立ち」と浮れ立つ、皆々打連れ騒ぎ行く。所は名におふ大門口、出口の柳夜の風、亂れ騒ぎし折からに、團八は宵よりも、佐渡七が知らせをば、今や〳〵と待つ所に、息を切つて佐渡七は、命からゞ〳〵逃げ來れば、團八「ヤア佐渡七か、宵からほつと待つ退屈、首尾はどうぢや」佐渡七「ア、イヤモ首尾さんゞ〳〵、思ひの外手強いやつ、まだ其上に客に刃向ふ大それた狼藉者、廓中への見せしめと、私が宿を叩き上げ、方々と詮議する。モウ爰には居られぬ、こなんの宿に隠れて居る、あとは貴樣のお働き頼む〳〵」と云ひ捨て、足早にこそ走り行く。團八「エ、埒もない、よい〳〵何でもおれが一手柄」と、肩唾を呑んで大門の、傍に忍び待居たり。斯とも知らずうてんつてん、唐樂の音の囃子物、先にしづ〳〵舁き出す、俄練物七賢人、待設けたる團八が、駕を目充の手練の手裏劍、目充違へず打込めば、「スハ狼藉者遁すな」と、呼はる聲に團八は、しすましたりと逸散に、跡をも見ずして逃げ失たり。かくと聞より高尾はあわて走り寄り、高尾「ナウかなしやな衛門樣、お心はいかがぞ」と、駕の左右を引き上げて、見れば内には著替の風呂敷、是はと驚く後より、衛門「衛門之助は爰に居る」と、七賢人の出立にて、ぬつと出れば又恟り、高尾「ヤアお前はそこにござつたか」と、悦ぶ中にも不審顔、衛門「チヲ合點の行かぬは尤も〳〵、宵に來りし團八と佐渡七兩人云ひ合せ、我を討ん面魂、我が歸るを待伏し、かゝる狼藉あらんと思ひ、そなたをあとから、駕の中なは我等が身代り」漢の紀信が計略、今は憚る人もなし、我身は駕に打乗つて、太夫を先に道中や、廓をぬけし籠の鳥、跡に殘りし友千鳥、大鳥大名大門口、別れてこそは、三重歸りけれ。

第二

櫻井主膳と表札を打たねど其名隠れなき、阿波の一城主玉木衛門之助殿譜代の侍、主從ともに武藏野の月も忠義に目もふれぬ、堅い屋敷の内庭に、掃除は得手のやつこらさ、打つ水玉の露程も、陰日向なく見えにける。立切る一間、音ないて、立出る女房闘の戸、華美を好まぬ襠の、姿心もしとやかに、闘の戸「ヲ、庭の掃除は又平鐵内、日番の勤怠りなく二人共大義々々、殊に夫は昨日より管領職の御召にて、今において歸りもなく、御用の筋は知らねども、さのみ氣遣ふ事も有るまい、歸られ次第用事もあらん、せめてしばしの内なりとも、部屋へ行て休息しや、早う〳〵」といたはる下部、「然らば御免」と兩人は、勝手へこそは立つて行く。取次役の婢どもばら〳〵と走り出で、腰元「申し〳〵奥樣、前方お館に勤られし中間の十郎兵衛殿、何やらお

願の筋有るとて、お次にひかへて居られます」闕の戸「ム、なに十郎兵衛がわしに逢ひたいとな、何はともあれ爰へ呼びや。早う〳〵」に婢ども、其儘立つて入り來る。館の住居かはらねど、かはる姿の十郎兵衛、勘當の身の幅もなき、身すぼらしげに蹞る。闕の戸「ヲ、珍らしや十郎兵衛、歩中間とは云ひながら主膳殿の心にかなひ、立つにも居るにも十郎兵衛と、情が怨と成る世の中、連合の氣に背き國を出やつてもう六年、顔は見ずとも便でも聞きたいとは思へども、夫の氣質を計りかね、案じ暮せしそなたの身の上、お弓も無事で出來た子も、息災でゐるかいの」と、殘る方なき闕の戸が、尋ねも深き三世の緣、身にしみ渡る十郎兵衛、涙とともに兩手をつき、十郎「奥樣の仰の如く、見る影もなき私を人らしく思召し、重々厚き旦那の御恩、報ぜん事もあさましや、酒に犯され、郡兵衛殿の家來と口論の上、手疵負し拙者があやまり、縛首にもあふべき所、喧嘩兩成敗と有つて兩人ともに御追放、己やれ今一度、何卒旦那のお爲になり、御勘當の詫せんと、思へど叶はぬ足手纏ひ、三つに成る娘をば國元の母に預け、女房連て大阪の、知己を求め五六年、うき世渡りは致せども、御主人のお身の上拜まぬ日とてはござりませぬ。女房めが申すには、お赦の出る迄はお國へは入る事かなはず、承はれば今年は此地にお渡り遊ばさるる、折を見合せ勘氣の願ひ、平に是非にと諫められ、心は先へ飛立ど、はいりかねたるお屋敷の、

御門前に一時餘り佇む中に門番衆が、咎を機會に漸〳〵と、昔の誤り今の身に思ひ當りし此身の上、叶はぬ迄も御赦免の、詫の綱手は奥樣のお情お慈悲」とばかりにて、先非を悔みし男泣、心を不便と思ひやり、闕の戸「ヲ、其悔は道理々々、今日そなたが來たこそ幸ひ、よい時分に呼出さう、最早歸りに間も有るまい、次で待ちやと」といふ間なき、旦那の歸りと下部が聲、知らせ眩き奥庭へ、いそ〳〵立つて入りにける。早立歸る櫻井主膳、常には酌ぬ盃の、廻り過たる無意氣酒、羽織の肩の滑れるも知らず、ひよろ付く足元、「ナウ危なや」と闕の戸が、取手をじつと引寄せて、主膳「チット開かせ給ふな北の方、手前お上より歸りがけ、思ひ付いたる葭原の揚屋で數獻下され、其上有り難い御意の趣、話して聞そか、イヤ〳〵よしに致さう、ア、面白い手管の諸譯、聞きたからうがマアならぬ、何と憎いか〳〵」闕の戸「ホ、、、是は又ついに覺ぬ醉姿、かう樣な事と知つたらばお乘物でも上げう物」主膳「ナ、何とのたまふ、我等醉は仕らぬ、堅いそもじのお迎より、幇間中居に送られて、漸〳〵只今古きを去て新しう、外へとめ木の香箱に、かげとひなたの二つ紋、付けねばならぬ我等が心、お氣に入らずば御勝手次第、いべくいの暇の狀、書いて進上申さうか」と、酒がいはする戯言に、悠氣の口を閉られて何と云寄る片男浪、騒ぐ胸をば押鎭め、闕の戸「ヲ、あのおつしやる事わいの、折々左樣の御樂しみも、且は御身の御養生、

私が何と申ましよ」主膳「ム、夫でこそ主膳が女房。粋め〳〵」と背たゞき、いやといはさぬ釘鎹、打てば響す表の方、「小野田郡兵衛様御入なり」と、取次の聲に驚く女房、關の戸「ア、申し今のを御聞なされたか」主膳「ア、成程、お國の御家老、郡兵衛殿のお入りなれど、此體では逢れぬ逢れぬ、我等暫く睡眠致さん、宜しく計ひ給はれ」と、廻らぬ舌を卷きかける、管も縺るゝとろとろ目、奥へ行くさへ千鳥足、衣紋繕ひ關の戸が、出向ふ間もなく小野田郡兵衛、兼て心は隔の襖、さも荒けなく入り來る、顔も詞もにが〳〵しく、郡兵「コレサ關の戸殿、只今勝手で主膳殿とは尋ぬれば、館にござると承はつたが、手前か參つたと聞いて、最早おはづし召されたかな」關の戸「是は又あられもない、お珍しいお前のお下り、悦びこそすれ何のあなたに隱れましよ、去りながら明るに間なき夏の夜の、勞を暫し奥の間に、ソレ女子ども、郡兵衛様の御出と、主膳殿へお知らせ申しや、早う〳〵」の内よりも、主膳「櫻井主膳、それへ參つて御對面申さん」と、よからぬ中も面に出さず、上下改め一間を出で、主膳「是は〳〵、お下りの噂もなければ、思ひよらざる今の對面、いつ見ても御無事さうで先は重疊」郡兵「アイヤ主膳殿にも堅固の體、我とても衞門之助殿の家老といへど、殿様なしの田舍住居、貴殿はそれに引きかへて、花のお江戸の家老職、御主人のお膝元と云ひ、跡腹痛ぬお樂みで、御夫婦ともにきつい若やぎ、イヤハヤお羨しう存ずる」主膳「是は郡兵衛殿の、女夫の者を悄氣ささうでか、サア〳〵是へ、まづ是へ」と、合ぬ工合を間に合せて、持長ずれば、圖に乘つて遠慮會釋も高上り、櫻井主膳威儀繕ひ、主膳「最前主人に御意得たれど、其元のお噂もなかりしが、到著召れたはいつ何時、シテ殿には御對面濟みましたか」郡兵「ア、いや〳〵、國元を出ましてより昨日迄十日の道中、思ひがけなう參つたは、ちと折入つて其元へ、相談致さねばかなはぬ故、未だ主人にも對面遂げず、參りがけに山口定九郎殿へ立寄り、直様是へ參りし所、貴殿のお顔を見受ぬから無禮は眞平」主膳「是は又痛入る、用事と有らばゆるりつと、打ちくつろいでお物語。コレ關の戸、早いが賞玩ついちよつと一種一瓶申付きやれ」關の戸「ほんに私とした事か、最前より取紛れお茶さへも上げませず、お赦しなされ」と立上る。郡兵「アいや奥方お心遣ひ無用々々、茶も酒も所望になし、しかし主膳殿のお志、無下に致すも本意ならず、迚も御雜作に預り次手、只一色の肴には、主膳殿のお手際、すつぱりと切腹めされ、夫を肴に一獻酌ふ、奥方早く御用意」と、聞きもあへず膝立直し、關の戸「申し夫主膳には何誤り、何科有つて腹切るのぢや、麁忽な事おつしやつたら、お國の家老とはいはしませぬぞ」主膳「女房默れ、假令いか樣の事あるとも、郡兵衛殿の差圖を受け腹を切る某ならず、殊に又切腹と有れば家の大事、左樣の大事を舌三寸申し出た其仔細は」

郡兵「問ふに及ばぬこなたの胸に覺有る今度の誤り、御先祖より代々續く、浪風立ざる家筋なれども、主膳といふ馬鹿侍にたらされ、毎日毎夜の廓通ひ、管領家の沙汰大方ならず、御主人には閉門との噂、聞くと其儘此家へ來たは、貴殿の口からいはさんため、サァ有りやうに白狀々々」主膳「ハ、、、、何事かと存じたれば、イヤモ其義なればお心遣ひ無用にめされ、微塵いさゝか覺なき廓通の御取沙汰、手前の殿の名を借つて奢を極めし紛れ者、尋ね出す其間、五十日の日延を乞請、やすらかに事を納め、主人を供せし某に切腹せよとは何の癡言」郡兵「ホ、夫程の義知行米を戴く代り、生れ子でも申上うが、若又其尋ぬるやつが其元の手に入らぬ時は」主膳「念に及ばぬ切腹致す」郡兵「ム、貴殿が腹をめされば、衞門之助樣の御身が晴ますかな。イヤサ濟むと思さば今爰で、切腹を見屆ませう」襖の戸「イヤ郡兵衞樣お控へなされ。イヤ申し主膳樣、お二人の爭ひを、聞けば聞く程只ならぬ、主人の御事お前の身の上」主膳「ヲ、樣子知らねば道理々々、知りやる通り某急のお召と聞くや否、取る物も取りあへず、屋敷を出る其折から、主人も俱に御前へ參るべしと重ねて向ふ使者の口上、途中にて出合頭、直樣主君の御供申し、承りし其趣、衞門之助其身の德を甲に著て、日々の奢はいふに及ばず、剩へ吉原の廓へ入り込み、毎日毎夜の藝盡、又或る時は時ならぬ、月雪花の催にて、名有る太夫も我一と馴染重て手に手を取り、屋敷の内も廓同前、武士に似合ぬ三絃太鼓、現ぬかして大名の家名を下すは何故ぞ、早く言譯致されよと、尋ねの内も立板に、水を流せる主人の返答、十が九つ其座にて、申譯は立ちたれども、衞門之助と云ひふらし、訴出たる上なれば、其名を付たる紛れ者、五十日の日延の内、某急度吟味を遂げ、主君の言譯致さんと遮つて願ひしかば、早速に相叶ひ我は夫より吉原へ馬鹿に成つて窺ふ所、衞門之助といひふらし、上もなき大騷にて、立歸つたる殘念至極、イデ追ひかけんと思ひしが、イヤ〳〵一旦此場の陣を引き、ゆるかせに詮議せずば、捕がたしと思ふから、我も是より身持放埒、主人の爲の遊興は、毒を以て毒を消す、主膳が極めし胸の内、連添者にも深く包み、情弱に見せし、詮議の第一」郡兵「イヤ主膳殿おかれい〳〵、潔白らしう聞ゆれど、管領よりの仰の通り、衞門之助殿を唆かし、高尾といへる太夫を身受けさしたもこなたの計ひ、疾く存じておる某に、うはぬんめりの突付賣、其手では行かぬ、もうよい加減にいうて仕廻やれ」主膳「マ、左程實正御主人を、御供せしといふ」郡兵「ヲ、慥な證據見せませう、山口定九郎殿、最前の女是へ同道めされ、早う〳〵」「畏つた」と定九郎、連立つ姿振袖の、打かけ模樣外ならぬ、實も廓の風俗と、紛ふ方なき其粧ひ、郡兵「主膳殿見られたか、今日是へくる道すがら、此者に出合ひし所、主膳樣のお屋敷はと尋ぬる餘り、樣子を聞けば右の段々、山口殿諸共に同道したる此

女、何と覺えがござらうが」主膳「イヽヤ存じませぬ、拙者此江戸表に罷り居れど、吉原へ參つたは夜前が初め、傾城にもせよ何にもせよ、手前毛頭近付ではござらぬ」高尾「ヲヽさうでござんす」關の戸「イヤ申し女中樣、是に居らるゝは私が夫、櫻井主膳と申しますが、お前の尋ぬる心宛は、どこへお出でなさるゝへ」と、問れて高尾もうちにつこり、高尾「ついにおめもじいたさねば、お顏見知らう樣もなし、お名は違はぬ主膳樣、私はお前の御主人衞門樣に受出されし、高尾と申す者でござんすが、衞門樣のおつしやるには、屋敷の内は人目あり、櫻井主膳と名を云うて、何ぢやあらうとそこへ行け、委細は文で跡からと、教の道もあとや先、尋ね迷ひし折からに、あなた方のお目にかゝり、尋ぬるや否、無體に私を駕にのせ、連れて見えた此お屋敷、わたしや何にも知らぬ事、悪い所はよい樣に取りなし賴み上げます」と、聲さへしどけなまめけり。櫻井不思議の顏色にて、主膳「ムヽ、心得ぬ高尾の詞、我れを目充に入込せしは、某に越度を付け、切腹させんずたくみごと、コリヤ〳〵女房、詮議ある高尾太夫、奥へ伴ひいたはり置け、給はる日延の今日より、其曲者を尋ね出し、主人は勿論此身の言譯、さつぱり仕上げてお目にかけう、山口わせい」と立上る。定九郎「イヤさうは得致さぬ、拙者貴殿の組下とはいへど、疑ひかゝりし其元なれば、屋敷の内より外へとては、一寸も動さぬ、それが互に身の潔白、何と郡兵衞殿、左樣ではござらぬか」「中々左樣、譬貴殿がいか樣に尋ねられても、左程の大事を仕出すやつ、めつたにお手には入りますまい、いらぬ事に骨折つて、跡で後悔なされうより、身が前で切腹々々〳〵、彌主人に科なくんば、誤ない義を申上げ、家を立つるは拙者が役目」關の戸「イヤ申し、夫が詮議致さうと、承つて立歸つた、御前の指圖に違變はあるまい、さすれば吟味も此方から尋出す、此役目十郎兵衞、おぢや」と關の戸が、差圖にはつと立ち出る、心勇のひらく眉、關の戸「イヤナウ十郎兵衞、聞きやる通りの品なれば、主膳殿になりかはり、殿の名を衒し曲者、一時も早く詮議仕出し、夫に手渡しする氣はないか」十郎「何が扨最前より、始終の樣子承はり、出るにも主人の傍、お前樣のお情で、結構な役目をたまはる、此勢に一詮議、拙者にお任せ下され」と、聞もあらせず、郡兵「だまり上らう、郡兵衞が前とも憚ず、誰が赦して此家へうせた、うぬは元國元で、身が家來に手疵を負せ首ぶち放す所を、是なる主膳がぬつぺりこつぺり、命助る其かはり、一生脚は切込さぬと、潔白らしいうて置いて、内證で呼びにやり、此詮議さうなどとはのぶとい詮索、侍の禮義も知らぬ、犬同前の己等は、庭の小隅で尾をふり廻し、捨扶持喰ふがよい役」と、あく迄悪口こらへかね、短氣の十郎兵衞立ちかゝるを、押ゆる目遣ひ、「ハァはつ」としづまる弱身へ付込し根悪る。郡兵「屹相かへて立ちかゝるは、此郡兵衞に刃

向ふのか、慮外なやつ」と傍なる茶碗、眞額碎けと打付れば、眉間に當つて流るゝ血汐、猶もこらゆる無念の顏色、郡兵「サア云分あらばぬかして見よ、刀脇差さすやつならば、よもや云分有るまい」と、いへど主膳も理の當然、はたとふさがる、關の戸も、何と開かんやうもなし。折から下部があわたゞしく、下部「京都の町人藤屋伊左衛門と申す者、御詮議の手がかりあつて、お旦那へ直談と申し、次に控へ罷りある、通し申さんや」と窺へば、主膳「ムヽ何にもせよ詮議の手筋と有るからは、遠慮に及ばぬ是へ通せ、關の戸は先奥へ、高尾太夫を同道仕やれ、十郎兵衛も早歸れ、勘當しても主の内、願ひに來るはまゝある事、咎に及ばぬそちが身の上、用事あらば重ねて聞う、早々立て」とどこやらに、こもる詞の締括、すご〳〵立つて行く姿、見やる女房も奥の間へ、しをれし枝におく露の、身にぞ知られて咲く花は、名にし藤屋の伊左衛門、馴し屋敷も改めて、白洲にこそは畏る。主膳「珍らしや伊左衛門、互の無事は語るに及ばず、まづ何は差置詮議の手がかり、殿の災難此身の難儀、いはずとも能く知つたり。シテ其方が手がかりとは、いか樣の筋なるぞ。早くいへ〳〵」伊左「ハアイヤモお氣遣遊ばすな、其お尋者が知ました」主膳「何尋ぬる者が知れたとは、シテ其者の有所は何國、假名實名何と〳〵」伊左「イヤ外までもなく、葭原狂ひに殿樣のお名を汚せし大罪人は、則ち私でござります」と、思ひがけなきに詞

不審、一ばい晴ぬ小野田郡兵衛、大口明いて高笑ひ、郡兵「ハテ樣々のやつがうせて、大切な詮議の腰折、ヤア〳〵佐渡平、アレ引立て」と呼はれば、はつと答へて立出つる、顏は互に見て恟り、伊左「ヤア、ヤアわりや葭原で割間の佐渡七、じやがの團八と云合せ、此伊左衛門を殺さんとせし其方が、爰へはどうして、其形は」と、いはれてきつくり郡兵衛が、知らす目の内呑込む奴、佐渡平「ヤア素町人め慮外千萬、一合取つても武士の家來、割間とやら鼓とやら、ない名を付くるうぬは何やつ、見た事もない毛二才め、主人の御意ぢや、きり〳〵立う」伊左「ムヽアノお侍の御家來なら、猶以て詮議がある」佐渡平「ヤア細言いはずとうせおれ」と、肩口取つて引立つる。櫻井主膳「暫」と留め、主膳「殿の名を衒しと、申出でたる大切の科人、其儘にして次へ立て」佐渡平「主膳樣控へ召れ、主君の御意は背かねど、其元の差圖は受けぬ」主膳「ヤア己れ中間風情の樣をして詞を返す慮外者、早く立てうせおれ」と、はつしと投げる火入のさそく、頰にべつたり石灰も、染る血汐は十郎兵衛が返しと知らぬ短氣の奴、刀の鯉口留むる郡兵衛、郡兵「佐渡平下れ、疵は受けても苦しうない、定九郎殿と諸共に歸れ〳〵、何もかも此の胸に、ナヽサア無念をこらへ旅宿へ歸れ」佐渡平「ぢやと申して是が」郡兵「ハテ歸れといはば早うせう」と、きめて歸すは主從の、胸の一物向ふ疵、のり押ぬぐひ立歸る。櫻井跡を打見やり、主膳「サア、伊左衛門、そち

一人がわざにもあるまい、何者に頼まれしぞ、包まず明せ」と和かに、問はるゝを汐ににじり寄り、伊左「隠しても隠されませぬ、元の發は霞原の、名さへ色ある高尾とて、振袖なれど天晴な、器量勝れし太夫職、ちよつと見初めてそれよりは、夢ともなく現にも、只忘れぬ其面ざし、思出す程猶どうも、任せぬ此身は町人なり、高尾にもせよ誰にもせよ、太夫と名がつきや大名道具、町人風情がいか程に金銀積んでも怪我な事、買ふ事ならぬが廓の掟、叶はぬ事に骨折らずと、儘よと思へど儘ならぬ、戀は曲物心の外と、思ひ付いたる大名出立、玉木衛門之助様と言ひふらせし上からは、手討にあふは覺悟の前、是より外に露いさゝか申上ぐる詞なし、一時も早く成敗なされ、御不審かゝりし申譯、偏に頼み奉る」と、命を塵と投出した、傾城狂ひの白狀は、樣子ありげに見えにける。郡兵衛一々聞きすまし、郡兵「ムヽさうぬかしや違もあるまい、暫しも主君を苦めし、其首刎ねて埒明けう」と、立上るを、主膳「先々暫く、彼が成敗を貴殿にさしては、此主膳は何を以て申開き仕らん、差圖を受けし拙者を指置き、其元が手討にして、又もや我に誤り付け、追失はん御所存か」郡兵「イヤサさうでは」主膳「ないと思さば暫が中、奥へござつて休息めされ、彼にゝもとくと覺悟させ、せめては念佛の一遍も、唱へさするが未來の爲」郡兵「ハテどうなりと勝手に召され、しばらく奥で相待つ中、ぶち落して仕廻れよ」と、理非を糺さず殺したがる、詞の意地は夕霧に、叶はぬ戀の意趣晴し、爰で持込み立つて行く。とは知らずして櫻井主膳、主膳「身を失ふも戀とはいへど、惚た計りに輕々と一命捨つる其方ならず、御恩ある殿樣の御難儀と聞付けて、科なき其身に拵し科人となる志、御主人にもさぞ御滿足、併し此度の事計りは、誠の科人の知るゝ迄は」伊左「ハテ疑深い主膳樣、惚た印は互の誓紙、高尾の方から送りし起請、是見て給べ」と懐より、取出し渡す紙包、其儘取つておしひらく、内は白紙に卷添し、小柄を取つて見て悔り、主膳「ヤヽ、此小柄こそ先殿のお胤を懐せしお妙へ、後の印と給はりし、三疋獅子に家の定紋」伊左「サヽ、惚たと申すはその小柄」主膳「ムヽシテ是を所持せしおかたは」伊左「先達つて此屋敷へ、御入りありし高尾樣、早々是へ御出で」と、呼れてはつと關の戸が傳申す先殿の、姫も今更改る、主從共に深切の、嬉し涙に父の恩、昔を思ひ忍び泣き、主膳威儀を改て、主膳「先殿御死去の砌より、お前樣のお行方を、諸所方々と尋ぬれども、今迄知れざる主人の御胤」伊左「サア私もお噂を承はつてをります故、惚たと申すも其小柄、霞原に置きましては、お家の瑕瑾と存ずるから、惚れて〳〵惚れぬいた、太夫の身受け、大名の名を衒たる入譯、くどういはねど主膳樣、御得心なされたら、一時も早く御成敗、ハテ死でしまへば事濟」と、さつぱりした男ぶり、隠れ浪花の夕霧と、つがひ離ぬ蝶々の、花に飛びかふ中ならん。櫻井主膳

感じ入り、主膳「殿のお胤を葭原にて傾城遊女と云ひふらさば、家老を勤る我々が誤り、其誤りを隠したる其方なれば、助け置きたき者なれども、郡兵衛を始とし、高尾様を先殿のお胤と云ふ事、我口より露顯して、上へはどうも打明られぬ、さすれば御前で受合うた、紛れ者の詮議を正し、主人の明を立つるが第一、不便ながらも伊左衛門、覺悟せよ」と言放せど、心は健氣と感ずる涙、姫も涙の顔ふり上げ、姫「帶は解ねど自は、情を受けし伊左衛門、只一言の禮もなく、又わし故に殺すとは、餘り氣強いどうぞマア、あの人の命を助けかはりには此高尾、とても一度は葭原に　濡し此身を今となり、大名のお姫様と、ふつつりいうて下さんな、やつぱり仕付た道中が、わしや嬉しい」と、どこやらに、こもる涙は一筋に、落ちて流の身にぞ知る、遺に殿の御胤と、背撫でさする關の戸が、又も涙にくれ合時、主膳「ヤア〳〵伊左衛門、最期を知らす暮六つの、かねての覺悟奥庭へ、我も用意」と立上り、姫を伴ひ入りにける。待に待たる小野田郡兵衛、刀提げ奥より立出で、郡兵「是は内室、主膳殿には、伊左衛門めが首打ちめされたか何とてござる、イヤサ關の戸殿、人にばかり物いはし、なぜ御返答めされぬ」と、重ねかけたる一間の内、響く太刀音關の戸が、胸にこたふる夫が聲」主膳「科人伊左衛門が首、不便には存ずれど、殿の名を衒たるお家の爲の大罪人、御覽なされ」と首桶の、蓋押明けて指出す。伊左衛門には似

ても似ぬ、郡兵「コリヤ何者の首、伊左衛門めはナ、何と召された」主膳「ホ、驚きは理、此首こそは佐渡平に方人したる競組の團八と申す者、褒美のわけ口貰はんと僅な金に目がくれて、貰ひに來たは此奴が不運、思ひ計つて某が、裏より廻して此通り」郡兵「ヤ何が何と」主膳「ヲ、知るまいと思召すが、最前歸つた佐渡平め、伊左衛門と顔見合すが否や、互に驚ぐ其座の模様、聞合すれは葭原で、殿と思うて切込だれば、伊左衛門より大事の科人」郡兵「ヤア默り召れ、佐渡平めは國元より、召連れた身共が家來」主膳「イ、ヤさうは言はさぬ、夜前此地へ到著召れた其許、其又家來の佐渡平が、伊左衛門とは何國で顔を見受けましたな」郡兵「サア夫は」主膳「たつて爭ひ召るゝと、追ひ返された奴がかはり、御自分にも詮議がかゝり、切腹召れずばなりますまい、そこを存じて此所へ、折幸ひな此首を、藤屋伊左衛門と名を記し、科の次第書顯し、鈴の森にて獄門にかけ、死骸は則ち京都の親元へ、送屆くる上からは、伊左衛門は死にたると同前、助けて殺す拙者が政道、違變ござらば此首の、科を顯し申上げうか」郡兵「サア夫は」主膳「何と違背はござるまい」と事を納める主膳か情、小庭に聞きゐる伊左衛門、しほ〳〵として手をつかへ。伊左「お志は有難けれど、若し贋物と此事が、お上へ知れゝば御身の難儀」主膳「ホ、其義は少しも氣遣ひなし、お咎あらば汝が次第、申開きは胸にある、とは云ひながら伊左衛門、假にも成敗した

る身の、此後幾年ながらへても、藤屋伊在衛門と名乘るか否や、其時こそは見遁しならず、打つて捨てるが掟の第一、高尾太夫が身の上は、某慥に預つたれば、そちが頼みし親元へ、急度渡してくれんず」と、餘所を憚る表向、首桶だかへ立上り、主膳「郡兵衛殿も其儘御前へ、御苦勞ながら」と挨拶に、返答しかなのむしやくしや腹、當り眼に角立て、郡兵「ヤア家來ども伊左衛門めをほい捲れ」と、呼はる聲も割竹の、情用捨もあらしこに、追捲られて伊左衛門、名計り消えて生殘る、姿弔ふ親里へ、立寄る事も渚の千鳥、泣音不便と見送る夫婦、必ず無事でと一言も、いふにいはれぬ關の戸が、今ぞひらくる櫻井の、色香爭ふ難波潟、名も夕霧に逢阪や知るべの方へと三重行雲の。

第三

下總と、渡せる橋は兩國の、國境をば名に呼し、橋のあいろも見えわかず、猶降しきる夕立の、篠を亂せる雨の足、夜目にもそれと蛇の目傘、えならぬ工の二人連、兩國橋にさしかゝる。定九郎「コレサ佐渡平、郡兵衛殿の頼みにより、謀し合せし今宵の手番、主膳が歸るは此道筋、有無を云はさずたつた一討ち」佐渡平「ア、定九郎樣聲が高い、モ私も腹からの町人でもなく、刀さす譯も知つてをりましたが、兩親に見放され、せう事なしの牽頭持、郡兵衛殿の日に入つて一大事を頼まれ、おのれやれ此役目仕負せてくれんずと、思ふに違ふ葭原のしだら、殿ではなうて伊左衛門、南無三失策してのけたと、思の外咎もなく、佐渡七を其儘に佐渡平といふ不中間、ガ是といふも郡兵衛樣のおかげ、お禮には主膳めをすつぱり殺して了うたら」定九郎「ヲ、云ふにや及ぶ上分別、某櫻井が組下とはいへど、國元にありし時郡兵衛殿に心を寄せ、兼ねて主膳が預り居る殿の重寶國次の刀、人知れず盗み取り渡し置いたる今日迄も、盗まれしと云ふ評議もなく彼是もつて心得難し、彼奴が心底問に及ばず殺すが近道合點か」佐渡平「氣づかひ有るな」と兩人が、點頭き呟く其内に、雨もをやめば傘傾け、今や遲しと待ちゐたる。かくとや樣子知らねども、蟲が知らすか十郎兵衛は、主人の歸り待ちわびて、勘氣の願ひせん物と、心當どは橋の元、待つとも知らぬ闇紛れ傘はたと行き當り、十郎「ハツア御免」と云うて行過ぐる。うろたへ奴が段平物、「主膳やらぬ」と切り付けるを、落ちたる傘ではつしと受け、十郎「さういふ聲は中間佐渡平、主君の名を呼び切り付けたは、思ひ違ひの油斷させ、此十郎兵衛を殺す工か何にもせよ心得ぬ、胸に有る事撒出せ」と、拔身刎られ佐渡平が、星をさゝれて返答も、破れかぶれと性根をすゑ、佐渡平「樣子知らねばとてもの事、ぶち撒いて云つて聞かさう、高は主膳を待受けて殺して了ふ此方の思案、思

ふ圖へ來た汝が不運、主も家來も生けては置かぬ、覿ひろげ」と又切る刀、「惡戯すな」と引摑み身動きさせぬ後より、只一打と定九郎が、騙し寄つて切りかくるを、持つたる刀で丁と受け、十郎「一人ならず二人まで、誰ぞと思へば山口定九郎殿か、こなたも主人を殺しに來たか」定九郎「ヲヽ、推量の通り、佐渡平と諜し合せ、待つてゐた此道筋、汝から先へ了うてやる。叶はぬ腕立て取置け」と、佐渡平諸共詰寄れば、荒氣は返つて主君へ不忠、一旦詫るに若くはなしと思案を極め、兩手を突き、十郎「ムヽ理にもせよ非にもせよ、意趣遺恨はまゝある習ひ、是とてもまつその如く主人に恨あるに寄り討たんと狙ふ今宵の仕誼、モ無理とはさらく思ひませぬ去ながら、我とても勘當の身分、何卒主人に詫言立て、最一度家來と云れんと思ふが故の頼みより、モ外には何と露ほども惜からん此命、サコレ主人の代に今爰でモ一分樣に刻でなりとも、お二人の御存分、サヽヽ、手向ひ致さぬ、サコレ〳〵十郎兵衛が心の内を思ひやり、せめては武士の忠義をば、コレ立てさせて下され」と、投出す命主の爲、塵とも思はぬ兩人が手引き袖引き膝を衝き、忠義の胸の眞實心、思ひやる程殊勝なれ。定九郎「ヤイ十郎兵衛主膳がかはりに汝を殺したら其方の勝手はよからうが、夫では此方の工面が惡い、汝が主に忠義を盡せば俺も又主の云付け、手向ひせずと尋常に臺座からマアはふり出せやい」佐渡平「ヲヽさうぢやく、主膳が替りに死にたかる汝から、マア仕舞うてやろかい」十郎「サヽヽ、其段は尤なれども始から云ふ通り、手前が命を捨てる替り、ナコレどうぞ主膳樣のお命を」定九郎「ヤアならぬはい」十郎「サアならぬ所を聞入れるが武士の情ぢや。申し定九郎樣。是佐渡平殿。十郎兵衛が手を合して、モ一生に一度の頼み、是拜みます、頼ます、申し〳〵是申し頼ます〳〵〳〵」定九郎「エヽ、喧しいわい、頼みます〳〵と、暗中で駕籠舁くやうに、何ほ願叩いても、そんな事聞く耳持たぬ、埒の明ぬ事云はうよりとつとと早う斃れ」と、蹴上る足首しつかと取り、十郎「ムヽヽスリヤどの樣に云うても御主人を」十郎「ヲヽくどい、ムヽモさう云や此方も百年めぢや、主人の仇となる儕等、コリヤもう此方から生けては置かれぬわい」定九郎「コリヤ面白い、さうぬかしや身が有つて相手に仕よい、忠義立に死にたくば望に任せ殺してやる、定九郎が刀の引導受けて冥途へつゝ走れ」と、切込む刀かい潛り、鍔元むづと佐渡平が、同じ拔身の稻妻や、又も降りくる雨につれ、空も閃めく稻妻の、光りを幸ひ十郎兵衛が、二人を相手に根限り目覺しかりける　三重働に、定九郎佐渡平逃支度、何國を當と正體も、轉つまろびつころ〳〵、起上る定九郎が脇腹ぐつと氷の刃、はふ〳〵逃出す佐渡平が肩先丁と切下げられ、うんと計りに倒れ伏す、肝先ぐつと、とどめの刀、空晴渡る橋の上、見付ける主膳に見合す顔、十郎「ヤアお旦那には只今お歸り」主膳「ヲヽ何者かと思

へば十郎兵衛、見れば人をあやめし體口論なるか、いかに〳〵」十郎「ハツアなる程御推量の通り、郡兵衛の賴に寄り定九郎佐渡平と申合せ、此所に待伏してお前樣を殺さん工、モ惡いやつと存ずるから、兩人共にまつこの通り、只今とどめ致せし」と、聞くより主膳大に驚き、主膳「ムム其兩人こそ某が詮議の種となるべきやつ、去るによつて我屋敷で追歸せしを其儘に、捨置たるは深き所存、伊左衛門が云ひしごとく、吉原での狼藉を思ひ廻せば小野田郡兵衛、重々かさなる科人の詮議の元はナソレ其佐渡平、引捉へて白狀させんと思ふた思案も皆はづれ、やつぱり我身にかゝる難儀、エヽしなしたり殘念や」と、悔を聞いて十郎兵衛、居たる所をどつと坐し、十郎「エヽ、下司の智慧は跡の悔、お前樣のお命が助たい計りで、さやうの所へ氣もつかず、殺せしは我誤、是も何故御主人に勘氣の詫の種にもと、極めし的も又それて此身に當る主君の罰、眞平御免下され」と落たる拔身拾ひ取り突込まんとせし所、櫻井「暫し」と押とどめ、主膳「此儘死るは犬死同然、今の命を存命て一つの功さへ立つるならば、勘當赦して元の主從、そこへ心は付かざるか狼狽者め」と拷取る刀、十郎「スリヤ私が一命を、かばい下さる御主人のお心は」主膳「ホヽ、主從となる事も深き因緣、武士の義理にて捨たる其方、功のたて樣よつく聞け、殿の重寶國次の刀代々預る我家筋、過つる霜月廿六夜、例の日待と一家中招寄たる其夜より、紛失して有所知れず、慥にそれと推量はしつれども、是といふべき證據もなく、忍びやかに詮議せんと、思ふ折から小野田郡兵衛佐渡平に申付け、殿を害せんとせし極惡人、今打明ぬも國次の刀の有所を聞いた上と、手延にせしは主膳が越度、今更云うて返らぬ事、力となるは十郎兵衛舊恩を思ひなば、命にかへて刀の詮議、それも長うは延されず、三月三日は殿の誕生、飾る吉事にはづれては櫻井が家の大事と有つて、我手では吟味もならず、主持ぬ身の氣さんじぼ誰憚らず詮議せよ、此役目さへ仕課なば、以前にかはらぬ主從の、約束變ぜぬ證據ぞ」と、一腰脫いて指出せば、其儘取つて押戴き、「盡ぬ主君の御一言、こたへ〳〵し四十四の、骨々は碎くるとも、奪ひ取つたる刀の有所、詮議の手始御覽あれ」と、のたれ伏したる定九郎が懷中さがせば紙入に、たしなむ金子は十郎兵衛が肌にしつかと用意の路金、主膳「ヤレ待て十郎兵衛、金子は愚か塵一本、取掠めては忠義にならぬ」十郎「がハァ御意ではござれども、主君の爲の切取は武士の習、盜賊衒と身をやつし、盜の手本は五右衛門の銀十郎と名も改め、貴人高位の門までも、只人知れず刀の吟味、拙者が胸に覺えの内、そつとも氣遣ひ遊ばすな」と、主命重く身に受けし、阿波の海賊十郎兵衛が盜賊衒の始りは、斯とぞ思ひ知られたり。主膳傍に心を付け、主膳「二人の死骸此儘に討果せしと云ひ觸らさば、咎もあるべし去ながら、人の見ぬ内影隱せ」はつと計り立

上り、十郎「何れ吉左右致すまで、必ず御短慮ばし」主膳「ヲ、何が扨我とても、隨分堅固で便を待つぞ」おさらば〳〵と雙方へ、立別れんとする折節、郡兵衛か下部と見え、主を迎ひの箱提燈打消す主膳十郎兵衛は行方、しらず。三重

第四

浪花津に、いづれはあれど取りわけて、分限長者の寄り所、今橋筋の軒ならび、其名も紙屋三郎右衛門と人にしられし家柄も、夫に離るゝ不仕合せ、商ひ萬事不手廻りに、今は世間を逼塞の、身は氣さんじの二つ髷、娘一人を蝶花と、外にながめはなかりけり。春風に裾吹きそらす取り裝は、さながら武家の奥方と一目に、しるき供廻り、若黨中間徒士の者、其外笠籠挾箱、三郎右衛門表口、案内乞うて立ちやすらふ美々しき體に後家おまき、番頭の庄九郎、連て戸口に手をつかへ、おまき「どなたかは存じませねど、お歴々のお女中様、御用あらば先づ〳〵あれへ」と、詞にこなたは打通り、お弓「ついに逢はねは不審は尤も去ながら、氣遣ひめさるゝ者ならず、わし事は阿州の家中、安松數馬が女房弓といふ者」と、聞いておまきが手をつかへ、おまき「是は〳〵思ひも寄らぬ、夫三郎右衛門存生の時は、殿様の御用を聞き、數馬様にもお目かけられ、お心やすうお屋敷へも毎度お出入、御厚恩に預かつた數馬様の奥方様、當地へお越は夢にも存ぜず、不躾だらけも女子の身、お赦し遊ばして下さりませ。コレ庄九郎そなたなりとも袴羽織」と、いふをとどめて、お弓「其儘々々、此度殿の御用に付き、夫數馬も藏屋敷迄罷り登る、幸の事と思ひ、夫へ願うて京内參り、いはゞ忍びの事なれば、妙はしたも遠慮いたし、今日は町方見物のついでがてら、身まかられし三郎右衛門は、念頃に有つた故、立寄たも夫の差圖、必ず〳〵心遣ひは無用ぞ」と、いふ内用意の挾箱、明けて家來がそれ〳〵に、直す手土産目錄書、戴く手代が押開き、手代「羽二重一疋おまき殿、白縮緬一卷御息女へ、郡内縞一反支配の手代へ、其外家内へ金子千疋」おまき「是はまあ〳〵お冥加もない、家内の者迄つど〳〵のお心付け、お禮申しや庄九郎」庄九郎「ハイ〳〵有がたう存じます、私は此家の番頭でござります、御用もござらばお心置なう」おまき「あまりと申せば爰は端近、チヽそれ〳〵見苦しくとも奥の間へ暫くお越下さりませ、いざ御案内」とすゝめられ、お弓「然らば暫時お茶の御馳走、外にお世話は必ず無用」と、おまきが案内に伴ひて、一間へ入れば庄九郎、庄九郎「御家來衆はこなたへ」と、皆打連れて勝手口、暖簾押上け入りにけり。俄のお客に家内の騒、「ソレへお菓子煙草盆、豆腐取て來い八百屋へ走れ、此肴屋はなぜ遲い」と、喚きちらして庄九郎、臺所より出來り、庄九郎「扨忙しう成つてきたは、つ

いお茶漬を上げる、獻立せいといはれたが、ハア、何であらうぞ、マア向ふが猪口に蒟蒻の白蠻かい、そして汁がばくち汁、平は狗脊と油揚、こりや念佛講の料理ぢや、こりや俺ぢやいかぬ、最一度魚屋を呼びにやれよ」と、勝手口から奥納戸差覗き〳〵、小點頭してそろ〳〵と戸棚の前へ立ちかゝり、紙入から相鑰と見えて錠まへ手ばしかく、引出す財布の縞黄金、五百兩とは陸目から、お弓が見るとも仕濟し顔、懐へ捩ぢ込み押入れ、跡取膳ふ折からに、何心なく娘のお辻、お辻「庄九郎そこにか、嚊樣がお呼びなさるゝ」と、聞いて惚り狼狽へ眼、庄九郎「イヤ庄九郎は一寸どこやら參られました」お辻「ヲヽあの人の何いやるやら、其方に料理の事を云付けると嚊樣が呼んでござる」庄九郎「ムヽそんなら何にも見やなされませぬか、ハアヽまあ夫で落付いた、料理の事なら八百屋と魚屋にとつくりと云付けたれば、氣遣ひはござりませぬ、いつ見ても〳〵美し可愛此腰付き、申し難面ぞへ〳〵、お前の事を明けても暮れても暮れても明けても晝は終日夜もすがら、お辻樣〳〵エヽお辻樣〳〵と、重ね戸棚を踏張ので、中山へ日歸りにした程足に實がいり、其草臥で寢た間ばつかり、夫より外に忘れる隙はござりませぬ、名を呼んでさへ日本國が一所へ寄るやうなに、顔見て是がたまる物か、コレ御覽じませ、天狗の面を風呂敷に包だやうでどうもならぬ」と抱き付き、しなだるゝ手を捩ぎ放し、お辻「アヽこれ〳〵又しても

あた猥らしい藝らはしい、わしには歴きとした云號の殿御が有るぞや、あじやらも手合も事によるよる、重ねて仕やると嚊樣にいふぞや」と、恥しめられても構はぬ厚皮、庄九郎「ムヽ云號々々と、いはしやりますが、其云號の男とはそりやマア誰でござります」お辻「ハテ知れた事、京に隱れのない藤屋の伊左衛門樣」庄九郎「ハヽヽこりやをかしい、其伊左衛門殿は死なしやつたとの世間での噂、それをお前も能く知つて居てから。よし又伊左衛門殿が生きて居やしやるにもせよ、可愛さうに庄九郎が、思詰めて居る物を、見捨てゝ直に嫁入るは、大身代の伊左樣と、榮耀がしたさぢや皆欲ぢやと、お前樣を惡ういふぞへ、お主樣を惡ういはしては、第一番頭の顔が汚れる、惡い事はいはぬ、わしがする樣に成りなされ、こんなよい首尾又とない」と、厭がるお辻を抱きしめ〳〵、しなだれ廻る眞中へ、いつの間にやら別家の手代助右衛門、お辻「オヽよい所へようおぢやつた」と、悦ぶお辻、庄九郎は折角入つた居風呂の底のぬけたる如くなり。それと悟れど助右衛門わざと何氣のない顔付、助右「是はお辻さん庄九郎二人ながら爰に何してござります」と、いふ娘が涙聲、お辻「コレ助右衛門聞いてたも、あの庄九郎が猥らしいわしをなぶりくつさる」と、いふを打消し、庄九郎「アヽ申し〳〵私や何にもいや致しませぬ、お前が芝居話しをして聞かせと仰しやる故、三五郎と金作が色事を一寸仕形で話した計り、イヤそりやさうと助右衛門殿、こな

たは京へ登つたと聞いたがいつの間に戻らしやつた」助右「ホヽ夕夜舟に戻つたが、それに付いてお家様にお目にかゝりたい、どこにござるぞい」庄九郎「イヤお家様は奥にぢや、用が有るなら呼んで來う」と、いふを此場の立汐に、しほの目まぜと仕形にて、必ず何にもいふまいと、娘を宥め番頭は、奥の間にこそ入りにけり。跡はしらけて暫くは、挨拶もなき後の方、おまき「ホヽ助右衛門戻りやつたか、大義で有つた」と母親は、庄九郎諸共奥より立出で、おまき「さつきにから聲がした故早速逢うと思うたれど、今日は珍しい阿波の御家中、安松數馬様の奥方様、大阪御見物の序ながらお尋ねに預つて、御挨拶やらお伽やら久しぶりの屋敷付合」助右「夫は思ひも寄らぬ珍客、定めて何かお心遣ひ、まあ早速申しませうは、京都の様子藤屋の家の騒動、伊左衛門様の事は御病死とも、又生てござるとも取々の風聞にて慥な事は知れ申さず」と、聞いて娘も母親も、又今さらの憂思ひ、傍に差出る庄九郎、庄九郎「イヤ伊左衛門殿の事なら聞合すに及ばぬ、死なれたが本とも〳〵、根元根本僞りなしの大誠、病死といふは皆嘘で、眞の事は阿波の殿の名を衒り、何か江戸の吉原で太夫を揚詰め、段々奢の戯が過ぎて十二月の饗應、夏雪降の體をしたとやらが江戸中の大評判、其ぼくが阿波殿へかゝつて、夫で伊左衛門殿は阿波の屋敷で成敗に遭れたを、一家衆が隱して病死にして仕廻うたとは、大阪中に誰知らぬ者がない、まあよい事はあのお辻

様をやらなんだが大きな仕合せ、此上は結納を戻してさつぱりと、他人に成つてお仕廻なされませ。繼がつて居たらどんな難儀が掛らうも知れぬ。お辻様は一人子の事なれば、内へ聟取つたがよござります。アヽどこぞ爰らに良聟がありさうな物ぢやが」と、己ぶん勝手へ引きかけて云廻すとはしらぬ母、おまき「いか様是は庄九郎の云やる通り、世間の取沙汰も悪い伊左衛門殿、殊に生たとも死んだともしれぬ人に便々々と、繼がつて居やうより、結納を戻してさつぱりと、聟舅の縁切るが上分別」と、母の詞に悲しむ娘、お辻「そりや嘘様何いはしやんす、常々お前の御意見に、女子は其身一生に、殿御は一人持つ物ぞ、夫と定る其人に、女郎妾の色狂ひ、腹の立つ事あらうとも、悋氣嫉妬の氣を持つな。隨分夫を大切に、もしも不縁で去れても、又嫁入せぬ物と云はしやんしたをわしや忘れぬ。譬枕は交さずとも、云號すりや定まる殿御、其夫故どの様な難儀災難有るとても、娘故ぢやと諦て、必ず〳〵夫婦の縁切てばし下さんすな。若し死なしやんしたが誠なら、わたしや此儘尼に成る、外の殿御は厭々」と、誠を守る娘氣に、母も兎角を涙ぐむ。助右衛門も目をしばたゝき、助右「ヲヽ御辻様ようおつしやりました、人の誠はこんな時が肝心、伊左衛門様の生死は噂計りで知れぬ事、一旦の云號を變改するは水臭いといふ物、彼方は至極深切に、此方の身代の不勝手なを察し、五百兩といふ結納の印、今云號を變改すり

や、まあ其金から戻さにやならぬ、差當つて是が迷惑」庄九郎「イヤこれ助右衛門、金事に拘はつて家の爲にならぬ事しては、此番頭の顔が立たぬ。戻す金が惜くば其金はおれが工面して出す、金づくで娘御に難儀はかけぬ。サア此金を戻してさつぱりと縁切つて仕廻しやりませ」と、取出す以前の五百兩、庄九郎「我金出して主の力になる、何とこんな手代は有るまいが。家の爲なら命も惜まぬ、お爲〳〵」と誠を見せ、娘を女房に跡式までしてやるお爲ぞ恐しき、おまき「ホヽ、二人ながら家を思うての心遣、嬉しいといはうか過分といはうか、取分けて庄九郎、五百兩といふ金才覺してたもつた段、一入嬉しい忝ない。近年屋敷方の金は戻らず逼塞の身分なれども、娘が一世一度の嫁入、其結納に貰うた金、どの樣な術ない事が有ればとてめつたに遣うてよい物か。其時の封の儘取つて置いたを見せませう」と、戸棚の傍へ立寄りて、鑰取出し錠押明け、おまき「ヤア結納に貰つた五百兩の金、爰にはない」と惚りを、聞て驚く助右衛門、庄九郎も空とぼけ、倶に立寄り上を下、尋ね捜せどあら金の、お辻「ムヽ、錠前も損ず盗人の業とも見えず、若し置き違はなされぬか。氣を靜めてとつくりと、思ひ出して御覽じませ」と、娘も倶に氣を付くれば、おまき「サアいづれ金銀は大切の物なれど、わけて大事の此金とわしが部屋の此戸棚へ、置き忘れう樣はなけれど、三度尋ねて人疑へ、念の爲ぢや、藏の戸棚を尋ねて見やう」とふと立上る。

お弓「イヤ藏迄もなし其金は、やはりそこに」と聲かけて立出づる數馬が女房、庄九郎が尖聲、庄九郎「ムヽ、藏へ行くに及ばぬ、其金がそこに有るとは、して五百兩の金は何處にござりますな」お弓「ヲヽ、外迄もなし、そちが出した五百兩が則ち戸棚に有つた金」庄九郎「何ぢや是が戸棚に有つたのぢや。コレ是はの、わしが在所へ云てやつて取寄せた五百兩、夫が戸棚に有つたとは、あんだら臭い馬鹿盡な」お弓「ムヽ、在所といふそちが所は」庄九郎「ヲヽ、但馬の豐岡」お弓「シテ豐岡への道程は大阪から四十里餘り、日數にして幾日程に往て戻らるゝぞ」庄九郎「サレば急いで往ても行戻りでは八日程かゝらうか」お弓「ムヽ、最前から樣子を聞に、結納を戻さう戻すまいと評議の有つたは今日の事、夫に八日もかゝるそちが在所へどうして金を取りにやつた。エイ伊左衛門とやらの死なるゝ事を、そちや前どからよう知つて、それで其金取り寄せたか。アノ横道者めが、サア盗んだ樣子有やうに白狀せい」ときめ付けられ、ぎつちり詰れど怯まぬ惡者、庄九郎「ハテ變た所へ出しやばつて、變つた世話をやく女中、一體伊左衛門といふ奴はどら打ちのお大將、大坂へ來ては新町の夕霧といふ太夫になづみ、幾日も〳〵居續の馬鹿者、そんな呆癡に大事の娘御を添しては、末が詰らぬと思うて、夫で疾から取寄せて置いた金ぢやが、夫が何とした人聞の惡い、盗人ぢやの白狀せいのとは、又わしが盗だといふには、何ぞ慥な證據でも有るか」お弓「ヲ

ヲ證據はそちが胸の内に、慥に覺えの有る盜人」庄九郎「ハ、、こりやをかしいわい、わしが胸の中に有る證據、夫が爰へ出して貰ひたいな。かうなつてはわしも身晴ぢや、侍の女房ぢやとて遠慮はない、サどうすりや胸の證據が出る、仕樣が悪いと赦さぬ」と、摑かゝる庄九郎が、小腕ぐつと片手に捻上げ、懷探して紙入取出し、お弓「ハレ助右衛門とやら、其内詮議」と投げやる紙入押開き見れば内には鍵一つ、合點が行かぬと戸棚の錠に合して見ればしつくり合鍵、おまき「コレほんの鑰は此母が腰に放さぬそりや合鑰、ても横道な」と呆る主從、お弓は猶も手を捩ぢ上げ、お弓「主の難儀を救はん爲、主の金を盜んだれば忠義ともいふべけれども、此奴が心はさうでない、大枚の金を盜取り、儕が才覺した顏で、夫から付入り其お辻を女房にして、身代を丸取にせうといふ悪工する番頭殿、此内には置かれまい」と、庭へどつさり投付くれば、娘が悅び母親も、おまき「飼犬に手を喰る恩知らずの横道者、隙くれる出てうせう」といはれて何と庄九郎、庄九郎「エ、あたぶの悪い失策てのけた、儕衒妻め覺えてけつかれよ、アイタタ、タア、いたいおさんは都の町で、待ちてをれよ」と口へらず、頬をしかめて出て行く。跡見送りて母は手をつき、おまき「あなた樣のおかげにて不時の難儀を遁るゝ仕合、娘もちやつとお禮申しや」。お辻「ほんにわたしとした事が最前から御挨拶も、お蔭で煩い病の根ぬけ、お勞休にナア嗅

様」おまき「ヲ、それ〳〵奥の間へお供して、無重寶なそなたの琴でもお慰に」お弓「夫は段段心遣ひ、もうお暇と存ずれど、左樣ならば今暫し、御馳走に預りませう」と座を立上り、娘の手を取り、お弓「驚き入たは此息女、貞女兩夫に見えずの教を守る心ざし、器量といひ貞心といひ、武士の妻にも有るまい育」と、子を譽られて母親の、心いそ〳〵、おまき「コレ助右衛門、聟殿へ戻す金元の所へ入れておきや」助右「そんならどうでも此金を」おまき「ハテ變改するも娘か可愛さ、先樣へ戻さにやならぬ大事の金、戸棚へ入れて奥の間へ、いざ御越し」と母娘伴ひ奥へ入りにけり。跡に殘つて助右衛門、金取納め煙草盆、煙管相手に獨言、「日比から義理を立て人を憐む母御の氣質、夫に似合はぬ結納の印、戻して變改せうと有るは義理も構はぬ御了簡、又娘御の心はきつい物ぢや、どんな難儀がかゝつても、一旦定めた男なれば、外の男は持たぬとは、丁度忠臣藏の小浪が樣な心ぢやの。アヽ、どうで此云號を、變改さゝぬ仕樣が有りさうな物ぢやが」と、心一つにとつ置いつ、案じる此方彼方には、客饗應の琴の音、重扇の風薫る、匂ひを傳ふ蔦蘿、忘れぬ人は今さらに、さらぬ別れのしやらどけも、やがて結ばぬ岩田帶、助右「アレつい彈かしやる琴の歌でもとかく夫をしたふ唱歌、若し伊左衛門樣の病死が本の事なら、いとしやあの子は氣違にがなならしやるであろ。アヽ、どうしてなりと夫婦にしてしんぜたい」と、思案小首も傾き

し、日の目眩き深編笠、浪人と思しくて尾羽を枯せし身の廻り、案内もなく打通り、浪人「紺屋三郎右衞門とは爰元な、在宿ならば御意得たい」と、聞いて居直る助右衞門、助左「どなたかは存ぜねど、成る程三郎右衞門宿は是でござれど、旦那儀は死去仕り則ち我等支配の手代、御用ござらば私に」と、慇懃にあしらへば、浪人「ム、支配人と有らば亭主同然、赦しめされ」と上座に坐り、浪人「御意得たい事別儀でない、見らるゝ通り我等儀は尾羽を枯せし浪人者、知縁の者の取持にて、播州のお大名へ召抱へられ、近々出勤致す筈なれども、何を言うても此風體、身の廻り何かの拵へ、少々金子入用に付此家へ無心に參つたのさ、暫くの内取換へて呉れられうなら、過分にあらん」と押柄に、いへど此方は律儀者、助左「夫は近比お氣の毒な事ながら、只今も申す通り、旦那相果て支配人の私、金銀の事は心に任せぬ事ながら、御浪人様の御出世の筋と有れば、無下にならぬとも申されまい。マア其金は何程の事でござります」浪人「イヤ僅五百兩、夫程有らば當分夫で相濟む」と、いふに此方はぎよつとして、助左「申し五百兩とおつしやるは、小判の事でございますか」浪人「成程小判五百兩、いはゞ少々の事、家柄を見かけて參つた、用立ておくりやれ」と、いふを打けし、助左「ア、申し、もう御意なされますな、大概物には程の有る物、御浪人の御無心よく〳〵で有らうと察し、二歩か三歩か高々一兩までなら私の了簡でと、思ひの外口にさへ頬張る金高、今逼塞の此紺屋、家内の諸色賣代なしても何として出來ぬ金、埒の明かぬ事に隙どらずと、又外々へ御出なされ」と、すつかりいへど動かぬ浪人、浪人「イヤサ外々へ參る所存なれば、押付て是へは參らぬ、家柄と云ひ金の有る事も存じて參つた。畢竟見ずしらずの我等なれば衒とも思はれうが、高の知れた金の事、衒られたと思うて當分用達てくりやれさ」助左「イヤなりませぬ、衒られるも用立つも、金が有つての上の事、盗人衒の用心には無い程慥な事はない」浪人「すりやどう有つても」助左「ハテ七くどい無いと云ふのに」浪人「ハア是非に及ばぬ、此上はちとお座敷を穢し申す」と、居直つて肌くつろげ差添するりと抜放し、腹切る用意は强請の兀頂、夫とはしらぬ正直者、助左「ア、申し、こりや何事をなされます」浪人「イヤサ放しやれ、所詮無心を聞きとどけねば奉公の望も叶はぬ、此儘一生浪人せうより、切腹して相果る」助左「夫は御短氣まあ〳〵」と、とどむるこなたは、障子をひらき、お弓は何か繪圖取出し、引合す姿繪に、割符を合す浪人者、扨こそ是と心に笑み、さはらぬ體にて、「助右衞門〳〵」と、呼れてはつとは云ひながら、爰も氣遣ひ立兼ねて、助左「イヤ申し御浪人様、必早まつて下さりますな、又了簡もこざりませう」と、漸宥めて隔の襖開けばお弓が小聲に成り、お弓「一部始終残らず是にてきいたるが、あの浪人は阿波の十郎兵衞といふ海賊、昔の石川五右衞門にも

劣らぬ盜賊、夫故五右衞門の銀十郎と異名する由、仔細有て此如く繪圖を取て尋ね搜す、此度夫の上坂も殿よりの上意にて、彼を捕ん爲の事、今日計ずも此弓が廻り逢うたも、數馬殿に手柄させいと天の賜、ハア、忝なや嬉しや〳〵、家來にいひ付け召捕らん」と、勇立つを押とゞめ、

助右「成程左樣な事なら疫病の神で敵とやらで、近頃氣味のよい事ながら、爰の內でお縛なされましたら掛り合に成つて、若し親方が難儀致す樣な事は御座りますまいかな」と、氣遣ひがれば、

お弓「いか樣なう、爰の內で召捕らば掛り合の筋は遁れぬ。夫を庇うて依怙贔屓の沙汰もならず、銀十郎を召捕つたは斯樣々々と明白に殿へ言上せにやならぬ。其時は掛り合、後家御を國へ召さるゝは定の物、また其上に科人の口書次第でどんな難儀がかゝらうやら、そこを思へば近比氣の毒、というて手に入つたあの十郎兵衞、見遁しては夫へ立たず、召捕つては此家の難儀、ハテどうしたらよからう」と、思案の體に助右衞門、

助右「イヤモ左樣な掛り合でお國へなど召れては、女の事なり難儀千萬、何とかう遊ばしませんか、如何なと欺してあの浪人を去します、所を御家來衆に言付けて門でお縛りなされませぬか、スリヤ私の親方にかけ構はないと申す者」

お弓「成程尤も、併し大抵の奴でなければ、自由に此家を去ぬまいぞや」

助右「イヤモそりや致し樣がございます、何で有らうとあの者が申す通り金貸ていなします。ハテ此家をさへ離たれば、御家來衆がお縛なされますか、そこでは金を此方へお戻しなされて下さるれば、難儀も掛らず濟むといふ物」

お弓「ムヽでかした遁上分別、然らば其旨申付けん」と、家來を密に小手招き、

お弓「汝等は裏道より表へ廻り、コリヤかう〳〵」と呼き默く相圖の手配、助右衞門は何氣なく勝手へ出て、

助右「申し御浪人樣迷惑千萬な御無心、私の心では濟ぬ故、女儀ながら親方に相談致したれば、お侍樣の命に代ての事無下にいやともいはれまい、よい樣に計へと有る故、仰の通り五百兩御用立ませう程に、御出世次第急度御返濟下されますか」と、いふにこなたも刃物を納め、

浪人「然らば拙者が望の通り聞き屆て下されうか、是は〳〵過分至極」

浪人「ハテお命に及ぶ事、手前も逼迫難儀なれどお取りかへ申します」と、戸棚開いて以前の金、包ながらの五百兩渡せば取て押戴き、

浪人「拙者が命助る恩義、生々世々忘れは置かぬ、心もせけば早お暇」「左樣ならばござりませうか」「お禮は重ねて」「さらば〳〵」と金追取つて懷中へ、表をさして立出づる。待設たるお弓が家來、

家來「こりや捕たは」と左右より、寄るを蹴倒しもんどり打たす、手練の曲者持餘す、家來が働見兼ぬるお弓、小褄を帶にしつかりと、挾箱より用意の捕繩、表へそつと竊ひ足、

お弓「阿波の十郎兵衞遁さぬ」と、夕日も西へ入身の備へ、「イヤちよこ才な」とほぐしの柔術、互に裏取表口、助右衞門があぶ〳〵と心を配る氣を配る、お弓をてうど眞のあて、

辻行く曲者遁さじと、たぢろく足を踏しめ〳〵、跡をしたうて行く道は、大川筋の濱傳、かけくる浪人追ひくるお弓、人なき所に立ちどまり、お弓「こちの人」十郎「女房ども、まんまと首尾好う出かした〳〵。五百兩といふ仕事、思ひの外心安う手に入つて有難い」と、財布取出し戴く後へ、いつの間にやら庄九郎、庄九「ヤア様子は聞いた衒妻め、よう先にはえらいめに遭したな。衒どもを引きくゝり代官所へ引いて行く、覺悟しをれ」といはせも立てず引抜いて大袈裟切り、どつさり響く暮六つの、かね懷へ夫婦連、行方しらず　三重　なりにけり。

第五

坊主「南無阿彌陀〳〵、抑當寺の御本尊目剝の如來と申し奉るは、人皇廿六代武烈天皇惡逆無道の王様にて渡せ給ふ、其時に此如來出現ましまして御怒り給ひ、兩眼を剝せ給へば、武烈天皇眼をまはし給ひしより目剝如來と號し奉る。かゝる尊き御佛なれば、此攝州寺町尊正寺に安置し給ふ。一度拜する輩は、惡事災難を免かれ、時花病取つく事あたはずまた盜賊が這入らんとすれば、睨み殺し給ふ靈驗あらたなる尊像でござる。此度序に御開帳はござれども、又御開帳は稀なる御事でござる。信を取つて拜を有られませう。此刀は三條小鍛冶が打つたる名劍、義經公よりの御寄附でござる、得と拜なされい。追付け開帳に間もなければ、賽錢を上げて御緣を結ばれませう」と、緣起坊主の口車、老若男女押合ひ犇合ひ、奇瑞も取々聞傳へ、お百度參りの數取りや投げる散錢ばら〳〵〳〵、早閉帳の鉦の音、戸帳も下る七ツ過ぎ、思ひ〳〵に願籠めて、皆散散に立歸る。二人の弟子はほつと顏、鈍才坊「ナント才覺坊、此間は無上やたらに夥しい參詣、此如來の奇瑞には、根性の惡い者は、眼を剝いて睨ましやるの、お請けが有ると座頭の眼が明いた、膝行が立つたのと、世上で專の取沙汰、そこで我等が出鱈目の緣起、何と味やつたで有らうがな」才覺坊「いかにも貴僧の云やる通り、今迄何の役に立たぬ如來ぢやと思うて居たは、こちとらが根性の惡いの、是迄貧乏な此寺、和尚も俄に福僧になられて、今夜彼のお梵妻が見える筈、此樣に賽錢の上る時にしこだめて、買梵妻で樂まうぢや有るまいか」鈍才坊「コリヤよからう」とそゝり立ち、天窓擲いて悅ぶ所へ、奥より和尚立出でて、和尚「コリヤ才覺坊鈍才坊、もう日も暮かゝるに何をのらくら、賽錢集めて仕舞はぬか」と、呵られてとつぱかは、賽錢箱を打明けて、手ん手につなぐ數珠の實の、數は八貫蓮葉に、浮む小玉や包銀、一つに集めて、和尚「ホヽ、昨日よりは銀納が多い、モウ日も暮るれば彼者が來るで有らう。鈍才は爰掃出し、火を點せ。才覺坊は此錢銀、納戸の内へ運んでたも」と、打連れてこそ入りにける。既に其日も黄昏や、

身の置所なき花の、べつたりとした厚化粧、人喰た様な口紅粉で、ぴらりしやらりの冬瓜顔、付添ひ來る淨慶は、門内窺ひ訪なへば、和尚は待受け出で向ふ。淨慶「コレ〳〵和尚様、約束の彼梵州、只今同道致しました」和尚「それは近頃御苦勞千萬、先々是へ」の挨拶に、伴ひ座敷に押直り、淨慶「扨て昨日何角お咄し申した通り、是から隨分可愛がつて下さりませへ」和尚「成程成程、衣の振合も他生の縁、可愛がらいで何としませう。貴僧何角とアいかい御世話でござる。コリヤ鈍才、ソレ盃を持て來よ」と、和尚の目遣ひ、取肴、銚子盃持出づれば、「是は〳〵御丁寧、然らば先仲人役差圖致さう。コレ正貞様、何ほ天窓は丸うてもお定り、サア呑んで差さんせ」正貞「そんならお慮外、ホ、、、」と、盃を取上ぐれば、「お酌仕らう」と三獻合せつぎかくれば、ずつと呑干し、正貞「此盃はどうせうへ」淨慶「ハテしれた事葬禮迄のお梵妻、其盃は和尚様へ」正貞「ホ、、、是は近頃お慮もじ、是から萬事御世話がち、兎角御念もじになされて」と、お極りなる口上に、和尚ほや〳〵打笑ひ、盃取上げ押戴き、和尚「世話は互に此方からも頼みます」と、是も三獻受持つて、謠一ツ鳴尾の沖過ぎて早住の江に著きにけりと祝儀の小謠、淨慶「是で固めは相濟んだ、仲人役の我等は茶碗」と、手酌に引受けがぶ〳〵、肴は酢鮪か、祝儀を祝うて酢鮪とは、コリヤ出來た」と、鉢をかゝへて無息呑、正貞「アヽ、目出たし〳〵、ナア和尚様」和尚「アイヤもうかう解合うからは、云つて置かねばならぬ、拙僧が寺號は尊正寺、替名は正淸と云ふ程に、よう覺えて居たが能いぞや」正貞「アイ〳〵、そんならお前のかへ名は正淸様、いかにも正の字は正しく、淸は淸いといふ證據」和尚「そもじの名は」正「アイ正貞と申します。正は正しい、貞は貞女の貞の字でござんす。おまへの名は正淸様」和尚「そもじは正貞、ハテ思ひ合つた名ぢやなう」と、坊主天窓をかち合せ抱付いたる有様は、蔓をからみて出來もよき、西瓜を見るが如くなり。淨慶「ヲヽ、先々御氣に入つて大悦致す、仲人は宵の程、最早お暇申しませう」と、淨慶は庭に下り、ひよろり〳〵立歸る、和尚「サア〳〵餘程夜が更けた、あすはとうから起きねばならぬ、門をしめて火の用心、正貞おぢや」と手を引いて、和尚は一間へ入りにけり。跡に鈍才才覺坊、浦山しげにながめやり、鈍才「ひよんな氣になつた、夜が更けたらば拔けそもならぬ才覺坊」才覺「ヲヽ、おれも體がしやきばつて來た、虫養ひに抱かれて寢ようか」鈍才「ヲヽ、抱かれて寢るけれど、此方も愚僧も同じ身の上、エヽこんな事知つたらば、去年落した前髪が、どちらに有つてもよいものを、アヽ任せぬが世のならひ、サア〳〵寢よう」と、帶解ひろげ抱き付き、寢るより早き高鼾、早更け渡る夜嵐に、水も寢入りし丑滿頃、皆一様の忍び頭巾、先に進むは闇の黑八、ばつたり道七、跡に控へし大男、大だら腰に名も高き阿波十郎兵衛、夜盗の一族呰き點

頭き、黑八道七腰の段平引き拔いて、手練の早業藪垣一重、音もなんなく切り破り、一人はそつと忍び入り、内を窺ふ門の戸を、開けば十郎兵衛しづ〳〵と、指圖に隨ひ兩人は、指足拔足納戸の内へ忍び入り、銀箱かますを引抱へ、出るに和尚は眼を覺し、「ヤレ盜人よ」といふ聲に、二人の弟子は飛上り、わつと裸で胴ぶるひ、黑八道七睨付け、「ヤァあた喧しい、おどほね立てると儕等が爲に成らぬぞ、押黙つてけつかれ」と、つかふど聲に和尚もわな〳〵、爰ぞ大事と胴をする。和尚「ヤイ命しらずの盜人めら、此寺へ盜みに這入といふは、儕等が大きな不覺、爰を何所ぢやと思ふ、コリヤ、爰は寺町尊正寺ぢやぞよ。忝くも本尊は奇瑞の有る目剝の如來、諸人群集をなすをしらぬか。儕等が樣な盜人共が這入り錢銀を盜んで往かうとするを、アノ如來樣がお目玉を剝かしやると忽ち其體がひり〳〵、ぐにや〳〵〳〵と碎けて死ぬるぞよ。そんなめに合はぬ中に、盜んだ物を置いて、詫言をして早う去に居らう」盜人「ヤイヤイ、ヱ喧しいわい、アノぬかした面はいなう、おいらが手に入つた物を返すといふは、ァヽ如來が撥鬢奴に成つて、泥龜屋をする時節に返してこまさう」和尚「ヤヽこいつが〳〵、生如來樣を勿體ない事いうたぞよ。よい〳〵、コリヤ〳〵兩僧、此上は如來樣のお力を借らねばならぬ、わいらも俱に祈れ〳〵」「いかにも合點と裸身に、手巾鉢卷すた〳〵坊、和尚と俱に數珠さらさらと押しもんで、三僧「抑〳〵我朝に尊き佛は多けれども、中にもこちの目剝樣、一に意地の惡い奴、二に睨、三に三々なめに合はせ、四に死ぬる程な苦しみかけ、五に五體をしやきばらし、六ッ夢中にならば七ッ泣いてもわめいても、八ッ役には立たぬ事、九ッ爰な大盜人を十で頓死をさせてたべ。南無眼剝の如來樣」と責めかけ〳〵祈りけり。時に不思議な雲おこらず、奇瑞も更に有らばこそ、和尚も弟子も手持なく、うつとりとして居たりける。十郎兵衛高笑ひ、十郎「ハ、、、、、テモうまい奴等ぢや、コリヤ皆よう聞け、手下の者に云付けて利もせぬ如來を願ふが利と云うて、此寺へ錢銀を上げさすのは、皆おれが仕業、根を尋ぬればおれが物で、おれが取りに來たが誤りか」和尚「ヤァ、扨は此方の如來を時花すやうにして、錢銀を上げさせ、其銀を取りに來るのぢや。コリヤ壺ぢや、ドレそんなら報謝に少しばかり」と、取付く腕首引つかみ、「ヲヽ、報謝には丸裸」と、和尚の著物剝取れば、「是は胴欲お赦し」と、二人の弟子が取付くを、引つまんで打付ければ、黑八道七俱々に踏み付け〳〵、十郎「ヲヽ、もう能いは〳〵、赦してこませ。したが、寶物の此刀、心當の代物」と、引拔いてとくと改め、「ヱヽ、何の役に立たぬ生くら物、何ぢやきら〳〵とした此打敷、是も一緒に盜んでやる。又賽錢が蓄つたら取りに來る、必ず人に盜まれなよ。アノ大盜人め」と十郎兵衛、手下に諸色取持せ、悠々とこそ立か

へる。斯くと見るより正貞は、庭の隅より走出で、裸和尚に縋付き、正貞「さつきにから怖さに味噌部屋へ隠れてゐたが、此お姿は何事ぞ。今夜漸〳〵此寺へ入佛して、いとし可愛と肌ふれた、其温暖を冷したは、あの盗人の胴欲や。思へば〳〵和尚様、目剝の如來で銀儲、銀澤山な此寺へ、來ると其儘盗人に、遭ふと云ふのはあたすかん、よく〳〵なすびな生れ性、夫が悲しい〳〵」と、身欲を思ひ詫泣き、正味の涙交りなし。和尚「ヲヽ、悲いは道理々々、是に付けても聞えぬは、日頃飼つて置くアノ如來殿、盗人と一味して、ようきついめに合したなう。此評判が廻つたら、明日から參りは一人もなし、コリヤまあどうせう才覺坊」才覺坊「アヽ、成程、御悔は御尤、いつまで泣いても歸らぬ事、明日から鼻の下を養ふ思案が肝心、鈍才何と思やるぞ」才覺坊「サアレバおれもそれが心がかり、アヽどうしたらよからう」と、思案とり〴〵さま〴〵に、四人は胸を痛めける。中にも和尚涙をとゞめ、和尚「ムヽよい分別が出たぞ〳〵、二人共に聞いてくれ、かゝる災難にあふ不仕合、明日から參りも有るまいし、無いと乾上る四人が鼻の下の養ひ様は、幸ひ普請の時の地車に、アノ如來を乘せ、町々へ勸化に出る思案はどうぢや」弟子「シタリ、如何様寺に置いて役に立たぬアノ如來、酷いめに合せ過怠、コリヤよからうと二人の弟子、勝手へ立つて引出し、住寺も倶に地車へ、乘せる如來に恨言、和尚「如何に知らぬが佛ぢやとて、あんまり酷い胴欲ぢや、毎朝此方が喰はぬ先に、初穂を上げるは何の爲、こんなめに合はぬ様と、大事にした甲斐もない。去とは酷いのら如來、思ひ廻せば廻す程、腹が立つて身が燃ゆる。今夜始て枕かはせし、正貞の手前さへ面目もないわいの」と又取り亂すしやくり泣き。ヲヽお道理と泣きたさを、泣かぬ鈍才才覺坊、弟子「アレ〳〵とやかういふ内に夜明烏のかしましや。サア〳〵出よう」と進められ、進まぬ和尚も裸身に、衣手々に二人の弟子。跡に正貞袋持ち、才覺鈍才聲張り上げ、弟子「横寺町尊正寺眼剝如來直の勸化盗人に合うて尊正寺」和尚はつちと口々に、衣の奉加口奉加、打連れてこそ　三重。

第六

とん〳〵〳〵、とんと世上の、色の湊は京の女郎に江戸の意氣張、大坂の揚屋で長崎衣裝著せて、一ふう三四五六に七八九軒町、師走の果も色里は、別世界なる賑ひに、胸の煤掃衣裝著せ、紋日の日和吉田屋の、庭は餅搗手鞠つく、春より先に春めけり。太四郎「節季候、だい〳〵〳〵」喜八「是は忙しない、今やう〳〵と搗かける所へ、もう催促か、五六軒行廻つておぢや、あんまり早い」と顔見合せ、喜八「ヤア太四郎様、こりや珍らしい、何の間にトの字へお這入」太四郎「ハテ喜八田舍

者、貴様はかご舁、俺は太鼓持、貴様や俺は、旦那衆をせぶつて喰う節季候と同じ身ぶん」喜八「こいつはゐい、お澤どん、お上へ申上げさんせ」「イヤ聞て居る」と伊左衛門、伊左「太四郎喜八、隙がゐると思うたが、龍宮の踊の拵へ、此浦島を待たせて置いて、乙姫はどこにゐる」太四郎「染之丞どうぢや」染之丞「イエ太夫さんは、癪で頭がふらつくとて、私を先へ」太四郎「コレハしたり、そんなれば此子も此子、附まして居たが好いわいの、手鞠ばかりついてゐずと、最一走呼びましておぢや。コレ〳〵これいなう、チヽ雪」「アイ、夫でも手鞠がわしや面白い」とん〳〵〳〵走り行く。太四郎「イヤ又夕霧様もきついきしましやう、旦那江戸へお出なされ、半年もお通ひなかつたに、此頃久しぶりのお歸り、磁石の様にひつ付いて、ござりさうな所、扨は葭原でのお樂しみを、少しひぞりの筋と見える」喜八「イエさうぢやないぞへ、住吉屋の阿波のお客、身請の噂で起つた癪、どうぞ伊州様の方へ、ちやつと身受さしましたいと、こちの旦那様が氣をせいて、京の藤屋の手代衆に逢うて、金の降り乘りして來ると、それで一昨日京上り」伊左「何ぢや、喜左衞門はおれに隱して本家へ行たか、氣轉は利いたが、親共は悪い癖で女郎が嫌ひ、失策つて戻らにやよいが」喜八「アヽ旦那、そんな先折おつしやるな、大事の祝儀日、神様へ早うお鏡備へまし、二人中もまん丸に、重り合うてござる様に」太四郎「エヽ、喜八下手ぢや、是から太四郎が一臼參らう、臼取は噂の役、お澤どん、お徳どん、二人を假の本妻妾、旦那囃して貰ひましよ」伊左「コリヤ〳〵〳〵、此方の噂らやお妾や色めが、紅の襷をしんどろもんどろかけて、しんどろりと、磨ぎやりましたを搗こなら今ぢや」太四郎「旦那は金持、太夫は癪持、我等は牽頭持、喜八は荷持、中居は懐妊か、お澤が尻餅、悪戯さんすなお徳がやきもち、送りの長持、もち込み取込む吉慶吉田や、さらば是からぜんざいらく、まんざいらく」と舌鼓、打連れ奥へ騒ぎ行く。苦界の中の樂しみは、勤めと色と二ツ葉の、音に聞えし全盛と、名に夕霧の立姿、雲の黛筆にさへ、誰書きなさん越後町、しどけ媚く裲襠の、跡に身代破れ編笠、紙子の燧朝夕の、煙も其日の貰喰、物貰「お情に預りませう太夫様、申し太夫様」と、付いて廓の揚や町、鑓人が見付けて走付き、鑓人「テモ扨も此乞食殿は。伊勢參りの道か何ぞの様に、太夫様の傍へ汚い裝で、悉皆花畑の鳥おどし、見なりの悪い、退いて貰を」とつかふどに、夕霧つくぐ打守り、夕霧「コレなう、はしたなう叱らぬがよい、心有げな物貰ひ、紙子姿は粹の果、昔はどんなお方やら、おいとしほや」と美しい、詞に取付き、物貰「さすが名にしおふ太夫様、お見立の通り其以前は、分相應の花もやつて參りました、かうした風體のものを結構な御挨拶、あんまり有難うて、物貰ひます所ぢやない、何とお禮の申し様も此身分、さもしい物ぢやが私の志、どうぞお